

# 学位論文

在日コリアンにおける二文化への態度とメンタルヘルス

平成 25 年 3 月

李 正姫

岡山大学大学院  
社会文化科学研究科

<b>第1章 序論</b> . . . . .	<b>1</b>
第1節 研究の背景と問題の所在	
第2節 研究史 . . . . .	2
2.1 西洋の先行研究における二次元文化変容モデル . . . . .	2
2.2 在日コリアンにおける文化変容態度への示唆 . . . . .	7
2.3 西洋における文化変容態度と関わる心理的変数 . . . . .	11
2.4 在日コリアンにおける文化変容態度と関わる心理的変数 . . . . .	16
2.5 本研究の目的 . . . . .	17
2.6 本研究の構成 . . . . .	18
<b>第2章 在日コリアンにおける文化変容態度の探索</b> . . . . .	<b>21</b>
第1節 研究の背景と目的 . . . . .	21
1.1 西洋における4類型文化変容態度 / . . . . .	21
1.2 日本の社会学における在日コリアンの生き方やアイデンティティの類型と個への注目 . . . . .	21
第2節 方法 . . . . .	25
第3節 結果と考察 . . . . .	26
第4節 まとめ . . . . .	39
<b>第3章 在日コリアンにおける二次元文化変容モデルと自由人, 葛藤, スイッチングとの関連</b> . . . . .	<b>42</b>
第1節 研究の背景と目的 . . . . .	42
1.1 西洋における二次元文化変容態度の概略 . . . . .	42
1.2 在日コリアンにおける文化変容態度の実証化 . . . . .	43
1.3 目的 . . . . .	45
1.4 仮説 . . . . .	46
第2節 方法 . . . . .	46
2.1 調査対象者及び手続き . . . . .	46
2.2 質問紙の構成 . . . . .	47
第3節 結果 . . . . .	48
第4節 考察 . . . . .	55
第5節 まとめ . . . . .	59

<b>第4章</b>	<b>在日コリアンにおける二次元文化変容モデルとメンタルヘルスの関連, 及び, 超越志向に関する因果モデル</b>	<b>62</b>
第1節	研究の背景と目的	62
1.1	西洋における二次元モデルを用いた文化変容態度とメンタルヘルス	63
1.2	在日コリアンにおける文化変容態度とメンタルヘルスへの示唆	64
1.3	超越志向に関する因果モデル	65
第2節	方法	68
2.1	調査対象者及び手続き	68
2.2	質問紙の構成	68
第3節	結果	74
第4節	考察	78
第5節	まとめ	82
<b>第5章</b>	<b>総括</b>	<b>84</b>
第1節	自由人, 超越志向および関連要因	84
第2節	文化変容態度とメンタルヘルス	86
第3節	本研究の限界と今後の課題	89
引用文献		91
付表		98

## 第1章 序論

### 第1節 研究の背景と問題の所在

日本にもたくさんの外国人が増えてきて、多民族化・多文化化に拍車がかかっている。2010年の法務省 (<http://www.moj.go.jp/content/000081957.pdf>) の統計によれば、在日外国人数は日本の人口の1.67%を占めており、10年前より26.5%増加している。金(2011)によれば、日本政府では2000年から多文化共生政策をめぐる議論が始まり、2005年には「多文化共生社会の推進に関する研究会」が発足し、政策的にも外国人を単に異質な存在ではなく、地域住民の生活者としてとらえるようになったと述べている。日本社会レベルでも、地域に外国人と混じって暮らしている個々人のレベルにおいても変化が起る。この変化が“文化変容”である(Berry & Kim, 1988)。

文化変容は、他の文化集団メンバーとの接触の結果起こる変化である(Berry, Kim, Power, Young, & Bujaki, 1989)。文化変容の捉え方について、Berry (2006) は、かつては、ホスト文化への同化という一次元的変容で捉えた、といい以下のような特徴を述べている。一つ目に、ホスト集団からはステレオタイプで見られ、偏見、差別を伴う民族関係が与えられる。二つ目に、文化変容特に同化は、少数派が行なうものとして認識されたという。そして、今は、ホスト文化とエスニック文化、両方への態度によって捉えられる二次元的変容の視点が主流だという。Berryら(1989)はカナダにおける4つの移民集団に質問紙調査によって、二次元文化変容の概念的分析を行った。そこでは、まずホストとエスニックの二軸を想定する。エスニックに対しては、①「文化的アイデンティティと特徴」を維持したいかどうか、ホストに対しては、②「ホスト社会とのよい関係」を維持したいかどうかと問い、「はい」と「いいえ」で答えてもらう。これらの組み合わせによって、4類型文化変容態度が定義される。具体的には、①②とも「はい」と答えた場合は「統合」(integration)と区分される。②のみ「はい」で①は「いいえ」なら「同化」(assimilation)、反対に①のみ「はい」で②が「いいえ」なら「分離」(separation)、①②とも「いいえ」なら「周辺化」(marginalization)とみなされる。文化変容する個人たちが他のグループ・個人とどのような関係を持つことを望むのかを示すのが文化変容態度であると定義している。

文化変容研究の必要性は、今日の心理学研究において高まりつつある。Jang, Kim, Chiriboga, & King-Kallimanis (2007) は、米国における移民人口の増加を考えれば、多文化理解や文化変容の研究の重要性は明らかだと主張している。移民の増加をはじめとして、文化間の人々の流動性の高まりは、米国に限ったことではなく、日本も例外ではない。こうした認識を共有できる地域は、今日の地球上ではますます増えていき、文化変容研究の重要性を共有できる地域も増えていくだろう。

日本は歴史的にみて単一民族・単一文化志向が強い国だが(岡崎, 1992)、近年は日本にも

外国人が大幅に増えてきた。その中で、戦後まもなくから昭和 30 年代まで日本における外国人の 90%以上を占めた在日韓国・朝鮮人がいる (<http://www.mog.go.jp/content/0000081958.pdf>)。彼らは出入国管理特例法 (1991) により、“平和条約国籍離脱者又は平和条約国籍離脱者の子孫”とされ、“特別永住者”という在留資格を得て、この資格は旧植民地住民に与えられたものであり、この点で一般永住者とは区別される。特別永住者の 90%以上が韓国・朝鮮系であり、1991 年には外国人の 57%、今は(2011 年)19%が、特別永住者の割合である。本研究ではこのような歴史的背景を持つ特別永住者及びその子孫を含め、在日韓国人・在日朝鮮人、両方を含めた広い意味合いで「在日コリアン」という用語を用い、韓国籍だけを示すときは在日韓国人と称することにする。彼らは日本の朝鮮半島への植民地支配によって、強制的・自主的移住が行われ、今では日本で生まれたその子孫とともに、朝鮮半島へのルーツを持つ、いわば移民のような存在となっている (原尻, 1989)。福岡 (1993) は、在日コリアン 150 人あまりを対象に聞き取り調査を行って、今の在日コリアンが日本に定住するようになった背景をまとめた。第二次世界大戦中に強制連行という形で日本に連れて来られた大部分の人は母国に帰り、自分の意思で仕事を求めて渡日した人々は敗戦後にも日本に在留することを選択した。その結果、およそ 50 万~60 万人の朝鮮人が残ったという。谷 (2002) は、その論考において、1970 年代から 1980 年代にかけての時代に、在日韓国・朝鮮人の「法的地位の面」や「社会保険の面」が明確にされていき、意識面で定住傾向を強めてきたという。そして在日朝鮮人は、日本の外国人移民の中で、定住の期間がもっとも長い 70 年以上の歴史があると述べている。彼らは日本の多文化化を切り開く最前線にいた集団といえるのであろう。西洋では、移民などの異文化滞在者を対象とする心理学研究の領域では、彼らの二文化への文化変容態度とメンタルヘルスに関する研究が盛んに行なわれている。一方で、日本では、在日コリアンという“日本人ではない集団”が、長期間日本に定住しており、日本における多文化民族の先頭にあつたといえる彼らを対象とした心理学的な研究は乏しい。多文化化・多民族化になっていく日本社会の状況を考慮すると、彼らが精神的健康を保ちながら、日本での生活を過ごしていく上で必要な文化変容態度はどのようなものであるかを知るの重要だと思われる。本研究では日本という定住先における在日コリアンの暮らしかたはどのようなのかについて、心理学的に文化変容の観点から捉える。そして、メンタルヘルスとの関連はどのようなのかを検討する

## 第 2 節 研究史

### 2.1. 西洋の先行研究における二次元文化変容モデル

文化変容について注目されるようになってきたのは、この 50 年あまりといえよう。この主題における心理学的研究の始点の一角とみなされている Graves (1967) は、異なった集団間の接触による個人たちが経験する変化を心理的文化変容 (psychological acculturation) だと称している。Ward and Kennedy (1994) はこの Graves の見方について、それ以前には集団レ

ベルの現象として認識されることが多かった文化変容を、個人レベルの現象という認識にシフトさせたものとして評価している。この見方では文化変容は、他の文化集団メンバーとの接触の結果起こる、個人が経験する心理的変化及び行動的変化をさすものと考えられる。

移民研究の初期には、同化の度合という一次元で文化変容が評価されてきた時期があるという。この提唱者とされる Berry ら (1988) は、その展望論文において、“文化変容”がしばしば同化の意味合いで使われる言葉でもあり、必然的に、固有の文化をなくしてホスト社会に吸引される意味で使われるとも述べている。しかし、今日の文化変容研究では、ホストとエスニックの二次元で捉える視点が広まっている。Berry ら (1989) では、移動側の人たちが他の集団やメンバーとの接触の結果、2つの課題、すなわち“文化的アイデンティティと特徴を保持したいか”、“ホスト社会とのよい関係を作りたいか”、を抱え込むという。これが二次元文化変容モデルの2軸ないしは2次元である。この二つの問いに対する「はい・いいえ」の答えを組み合わせ、4類型文化変容モデルで整理できるとした。この Berry らの考え方が、二次元文化変容モデルの概念的な提唱とされているものである。

この Berry モデルは、続く多くの研究者が参照する、影響力の大きな枠組みとして機能してきた。たとえば Ward and Rana-Deuba (1999) は、この Berry モデルは、文化変容の研究や理論に顕著な影響を及ぼすものとして、広く認められていると高く評価している。Ouarasse and van de Vijver (2005) にも、Berry らの文化変容モデルと4類型は数多くの学者から支持されている、とする記述がみられる。Berry ら (1989) は文化変容モデルを実証調査で構築する時に、エスニックアイデンティティとの関連性で妥当性検討を行い、周辺化を除いてはアイデンティティとの妥当性が得られたと報告している。その後、Berry らの二次元文化変容モデルは、他の研究者によってはアイデンティティのモデルとしても引用され、アイデンティティの4類型と心理的変数の関連をみた研究も多い (Ting-Toomey, Yee-Jung, Shapiro, Garcia, Wright, & Oetzel, 2000 ; Ouarasse ら, 2005 ; Ward, 2006)。

Berry の初期的な研究における提案は、こうして広く活用されていったが、Ward ら (1994) では、Berry らの二次元モデルを基盤としながらも、測定の方法に若干の変更を加えた修正尺度が登場してくる。主な違いを挙げておくと、Berry らは、異文化滞在者の個人は2つの課題に直面すると考えた。それを概念化するため、それらを反映する二軸の問いを設定し、「はい・いいえ」の答えを求め、4類型の組み合わせを考案した。4類型に該当する表現を独立した項目で尋ねて、各類型への当てはまりを査定している。その結果、各類型における得点がプロフィールのように描かれて、個人の状態を示す。一方で、Ward らでは、上記の Berry らと異なり、2つの単項目の課題を2軸 (/2次元) として設定するのではなく、2つの独立的な概念である“母文化との同一視 (identification with culture of origin)” “ホスト文化の人との関係 (relations to members of host culture)”, という2次元 (/2軸) を設定する。2次元は、対項目を成す構成である。たとえば、ホストの料理が好きな度合、エスニックの料理が好きな度合をそれぞれ答える。合計された2軸の合計得点を中央値で分けて、回答

者を4類型に当てはめる。具体的に、高ホストー低エスニック群を「同化」、高ホストー高エスニック群を「統合」、低ホストー低エスニック群を「周辺化」、低ホストー高エスニック群を「分離」とされる。近年の研究では、二軸を別々に尋ねてあとで総合する、Wardらのような測定が多くみられる。なぜなら、①各軸の影響をより細分化して分析できること、②回答者が答えやすいことが、その利点かと思われる。文化変容研究は、Berryらと続くWardらのこの二次元モデルを基本に展開してきている。後にその具体的な測定項目などについて詳しく述べる。

Berry式であれ、Ward式であれ、4類型文化変容態度の具体的な特徴は共通しており、以下を紹介する。Berry(2005)の展望論文では、「同化」は、固有の文化的アイデンティティの維持を望まず、日々の生活でホストとの交流を望むこととされている。「分離」は、自分たちの母文化を維持しながら、同時にホストとの交流を回避することとされている。「統合」は、固有も維持しホストとも交流することとされている。「周辺化」は、エスニック文化を消失するように強制されたために、固有の文化を維持することに消極的になり、かつ差別や排他主義のためホストとの交流にも関心が乏しい状態だと述べられている。

以上まで、二次元文化変容モデルにおけるBerryらとWardらの2次元の捉え方および4類型文化変容態度が誕生してくるプロセスをみてきた。総じて、文化変容態度は、測定手続きは示されても、概念的な定義は明示されていないように見受けられる。ただ文化変容が単なる変化を指すのみの語であるのに対して、文化変容態度はその変化を、操作的定義をもって類型化した概念といった解釈はできるだろう。具体的には、文化変容態度といえ、2軸または4類型で決められる区分を指してきたように思われる。

次は、二次元文化変容モデルの着想に沿って、文化変容態度を測定した研究例を表1-1にまとめた。研究によっては、“文化変容態度”と“文化変容方略”という用語を使っているが、ともに本稿では“文化変容態度”としてくくっておく。以下に、測定に使われた変数の例をみていく(表1-1を参照)。

表 1-1

二次元文化変容モデルにおいて用いられてきた文化変容の尺度

著者	対象	軸	概略
Berry ら (1989)	カナダ在住 の多様な エスニック 集団移民	・「文化的アイデンティティや特徴を保持したいか」, 「ホスト集団との関係を維持したいか」	<ul style="list-style-type: none"> <li>・友人関係についての項目例</li> <li>「分離」: 周りの友達は韓国人がほとんど, なぜなら気楽であるから。しかし, カナダの友達とはそう感じない</li> <li>「同化」: 周りの友達はカナダ人がほとんど, なぜなら, 楽しいし気楽だから。しかし, 韓国人とはそう感じない</li> <li>「周辺化」: 最近, 私の inner feelings を共有できる友達を見つけるのが難しい</li> <li>「統合」: 韓国人の友人との関係もカナダ人の友人との関係も価値あるものである</li> </ul>
Ward ら (1994)	海外に居住 している ニュージー ランド公務員 (一ヶ月か ら四年)	・母文化との同一視 (identification with culture of origin) とホスト文化の人との関係 (relations to members of host culture)	<ul style="list-style-type: none"> <li>・認知と行動に関する 21 項目を 1 対 1 で尋ねている</li> <li>・項目の例</li> <li>あなたの行動や体験は母文化の人々と似ているか</li> <li>あなたの行動や体験はホスト文化の人々と似ているか</li> </ul>
Jang ら (2007)	在米韓国人 移民 1 世	・韓国文化志向 12 項目とアメリカ文化志向 12 項目を 1 対 1 対応するように設問	<ul style="list-style-type: none"> <li>・韓国高齢者用の尺度がないので, 既存のものから修正を加えた。特に, 年齢と関わる項目となるように修正した。home/host culture 両方に関する多様な領域からなる。項目の例) メディア, 食べもの, 祝日, 所属感, 言語, 交友関係など</li> </ul>
Ouarasse ら (2005)	オランダに 居住する モロッコ人 2 世	・ホスト/ エスニックに対する like/ dislike 項目を 1 対 1 対応するように設問	<ul style="list-style-type: none"> <li>・ホスト/ エスニックに向ける like/ dislike 項目を 1 対 1 対応するように, 12 個の文化領域の項目</li> <li>・項目の例</li> <li>オランダ料理が好きか, モロッコ料理が好きか</li> <li>あなたはオランダ語が好きか, あなたはモロッコ語が好きか</li> </ul>



これらの研究は基本的に二次元文化変容モデルの発想を用いているが、Berry らの測定方法を必ずしも踏襲はしておらず、そこに修正を加えた Ward ら (1994) の手法にならったものが多い。Berry と Ward の測定方法の違いを以下に挙げる。第一に、Berry の測定項目は、集団間の関係よりも、慣習の実行、価値観、伝統に重点を置いているが、Ward は集団間関係にもっと焦点を当てるべきだと主張している (Ward ら, 1994)。第二に、Berry モデルでは、最初から設定されている四類型への当てはまりが個人ごとに判定されるのみで、二軸の直接、独立的な影響力は測定できないが、Ward では二軸の影響は個別に捉えている。第三に、Ward ら (1994) は、自らの研究では教育や仕事など特別な目的をもって、自主的に移動する一時滞在者が主だが、Berry の研究は移民、難民、短期滞在者など多様なサンプルを扱っている点で異なると述べている。なお、Berry と Ward の力点の置き方の違いは、こうした背景の違いを反映したものと推察される。対象が異なれば、「文化」として要点を当てる現象も異なってくる。Berry は価値観などの認知や個人の意識に重点を置いた測定を行ったが、Ward の測定項目では、対人関係など外界との関わりに重点がおかれている。

Berry は主に移民や難民などの長期異文化滞在者をみてきているが、それは Ward のみている短期または一時的な滞在者と比べて、外界とすでにかかなりの程度、融合している可能性があるだろう。そこではむしろ内面の変容こそが、残された深い問いになるのかもしれない。Berry は内的、Ward は外的な変化として文化変容を捉える姿勢の違いは、何が変容するかという、変容の焦点が異なることを反映したものと推察される。ということは、文化の変容を主題にする場合、何をもってその文化の変容を捉えるのかが、測定に先立って、まず最初に問われねばならないという意味でもあろう。具体的には、当該文化と母文化の間でどのような面が異なっており、それに個人はどう反応するのか、当該文化のどの側面が個人にとって重要な意味を持つのかなどが把握されねばならない。在日コリアン研究においては、文化のどの側面で文化変容を測定するのが妥当か、明確な結論は出ていない。単に経験的に注目してきた要因が取り上げられ (例、帰化)、論じられているに過ぎない。海外の知見との異同を比較していくためには、何をもって変容を測るのかを巡って、視点の整理が課題になっていくことを指摘したい。

今日は国境を越えた多様な形の移住が生じてきて、Chirkov (2009) は、従来の標準的な二次元文化変容モデルでは複雑な移民の現象を理解するのに不十分だという見解を述べている。Bhatia and Ram (2001) は、展望論文で、標準的な文化変容モデル (standard acculturation model) ではなく、受け入れ社会の社会 siciocultural and political contexts) の中で彼らの migrant identity を議論するのが提案する、との見解を紹介している。そして、心理的文化変容の過程が、それを経験する全ての個人に同じ種類であろうという想定は再考されるべきである述べている。Bhatia and Ram (2009) は、transnational migration and global movement の観点から動的な概念として文化変容を理解する必要があると述べている。今まで、文化変容の研究が Berry らの概念の中で行われてきて、そこから派生する課題認識が、近年になっ

てなされるようである。エスニックとホストという二軸を持って移民などの異文化滞在者の文化変容態度を捉えているが、この二つの軸におさまりきれない概念があるのかどうか十分に精査されておらず、さらに二次元以上の多次元の視点が可能かどうかという着想からの検討もまだない。受け入れ社会の環境を考慮した文化変容態度について、以下の報告から知見を得ることができる。Jang ら (2007) のアメリカにおける移民研究では、ホストとエスニックを対にした項目で、二軸を独立に測定する Ward らの測定方法を使っている。クラスター分析を試したところ、4 類型より 2 類型の文化変容態度が適しており、それらは項目構成から見て「統合」群と「分離」群と解釈された。このサンプルにおいては、同化も周辺化も希薄であった。この集団では、母文化は総じて保たれており、ホスト文化の受容の度合のみが二つの類型を分けている。母文化保持の程度は選択の対象ではなく、基本的に保持され続ける場合には、ホスト文化の受け入れ度合いのみを測定すれば分類としては十分といえる。しかしながら、母文化の保持が保障されない環境、つまり同化圧の高い社会への移民ならば、母文化から離れる可能性は高まるかもしれない。同化が選択されやすくなるだろうが、ホスト文化の受け入れが進まない場合には周辺化が生じるだろう。こうして単一文化社会においては、同化と周辺化が主たる分類カテゴリになるのかもしれないが、この予想を検証した実証研究はまだ見られない。統合は、移民自身が望む重要な目標地点になっているという (Berry & Sam, 1997)。しかし、同化主義社会では、その国のイデオロギが単一文化、単一のアイデンティティを追及するために、その圧力から移民の統合的方略は制限されるという (Berry & Sam, 1997)。受け入れ社会次第 (例、多文化政策があるか、単一文化社会か) で、文化変容の選択肢が変化すると予想される。受け入れ社会が多文化主義を標榜する社会であれば、統合という方略が社会的適合性が高くなると予想される。その結果、志向する者も結果的に方略として用いる者も増加するかもしれない。異質さを伴う他文化を寛大に受け入れる社会や、エスニック文化を否定しない環境は、統合の可能性を高める社会的要因として機能するものと予想される。母文化の剥奪が一般化した社会では、ホスト文化の受容度合いのみが重要なものになるかもしれない。従って、4 類型を要するのは、4 類型が複雑に分岐しうる社会での研究ということになろう。個々の研究者が対象としている社会によって、4 類型のどこが意味を持つか、どの類型に集約されていくかが、ある程度決まっていくのではないか。こうした予測を確かめるには、さまざまな社会における移民の比較研究の集積が必要であろう。

こう考えていくと、文化変容の二軸が独立である西洋の報告 (Ward ら, 1999; Berry & Sabatier 2010) は、おそらく受け入れ社会が複数の文化を抱えることに関して許容しているので、両者を並列的に保持することが可能であろう。単一文化社会では、移民が両者とも保つ統合的態度が難しいのであろう。

## 2.2. 在日コリアンにおける文化変容態度

在日コリアンは、韓国・朝鮮のルーツを持ちながら、日本の社会文化的環境で生活してき

た人々である。その二文化への態度についての報告をみていきたいが、在日コリアンを対象とした二文化への態度いわゆる文化変容態度に関する心理学的な研究は乏しい。関連研究として、社会的における在日コリアンの生き方の多様性の分類か民族的アイデンティティの多様性の分類に関する報告がある。福岡（1997）は、質問紙調査によって、日本生まれで、韓国籍を持ち、18歳から30歳までの韓国国籍の青年800人の生き方を調べた。先行研究である福岡（1993）の聞き取り調査から、在日コリアンには7タイプの生き方、すなわち「個人志向型」「祖国志向型」「共生志向型」「葛藤回避型」「葛藤型」「帰化志向型」「同胞志向型」がある、との仮説をたてた。調査では、7タイプの名称を簡単な説明と共に調査協力者に呈示して、当てはまると思うタイプを複数選択してもらった後に、単一選択を依頼し、最後に生き方に関する質問に答えてもらっている。林（2001）は、韓国籍を持つ20歳以上の576名を対象に、質問紙調査によって、「民族的アイデンティティ」の多様化を分類する目的で、ホストに対しては「日本への帰化願望の程度」を尋ねているし、エスニックに対しては「本国に対する愛着程度」を尋ねている。「帰化したくない・愛着を感じる」を「伝統志向」、「帰化したい・愛着を感じない」を「帰化志向」、「帰化したい・愛着を感じる」を「両属志向」、「帰化したくない・愛着を感じない」を「個人志向」と名づけている。

海外の心理学的な移民研究では、母文化の生活習慣を保持あるいは諦めてホスト文化を受容するかどうかなど、異文化滞在者の母文化とホスト文化をどう取り入れるかについて、多様な項目で測定を行い、「文化変容態度」という概念で全体をまとめるのが一般的である。しかし、これをアイデンティティとして引用する研究もあり、両者間の区分は明確ではない。一方で、在日コリアンでは、エスニックとホスト両方に対する一般生活及びエスニシティに関する項目を測定し、「生き方」ないしは「アイデンティティ」という概念で全体をくくるとの違いがある。

在日コリアンの文化変容態度を考えると、受け入れ社会としての日本は同化主義社会で（山中，1982）、在日コリアンは植民地移民（金，2011）であることを考慮すべきであろう。以下に日本という同化志向である受け入れ社会における、在日コリアンの二文化集団への態度として以下の3つの先行研究の例を紹介する。一つ目は、“葛藤”を示唆する態度である。例えば、在日本大韓民国青年会（2010）には、“日本で生まれたのに日本人ではなくて韓国に行っても純粋な韓国人ではなく、すごくコンフューズする感じで、ややこしいなと思いました”，“自分の存在は何なのか、何人なのか疑問として悶々と育ってきた”，“自分は日本人でもなく韓国人でもなく、在日コリアンという人間だ”，という語りが紹介されている。これらの語りから察せられることは、在日コリアンが、日本人か韓国人なのか両者択一を迫られる環境で育っていること、どちらでもない、いわばぴったり当てはまるカテゴリがない状態であることが、彼らの日本社会における居心地を否定的なものにしていることである。一方で、受け入れ社会がアメリカである場合、かつて在日韓国人であったが、米国に移民したというある Korean-American の聞き取り調査では、「自分は日本人であり、韓国人であり、アメリカ人

だ」(黒坂・福岡, 2008), という語りが記されている。これは四人兄弟の末子で, アメリカで生まれた人の語りだという。上記の日本とアメリカの受け入れ社会における語りの例は, 同じ在日韓国人である社会的な身分でありながら, 受け入れ社会の環境によって自己の捉え方が異なることを示唆する。二つ目に, “同化” 的態度である。原尻 (1989) は, 特に 1 世は生きていくために同化をせざるをえなかったという。三つ目に, “エスニック集団” と強い連帯感を持つことである。以下にその例を紹介する。福岡(1993)は, 日本社会の差別から在日コリアンという集団カテゴリを盾として自己防衛したと, 述べている。福岡 (1997) は, 在日韓国人青年の成育過程における民族的劣等感, 被差別体験によって強く内面化される, と報告している。しかし, 防衛的に自尊心を強化させたり, 在日韓国・朝鮮人であることは恥ずかしいことではなくむしろ誇るべきことだと再解釈の方法をとるといふ。ここでいう自尊心は, 集団的アイデンティティに関わる部分だと説明している。つまり, 差別から自分を防御するため, 集団アイデンティティに帰属し, 自尊心を保とうとすることである。また, 差別を受けることによって民族的誇り・個人的誇りが低下する知見もある一方で, かえって高揚する意見もあると述べており (金, 1997), “在日であるというアイデンティティが差別の対象になっているからこそ室にしたい”, との語りが紹介されている (森, 2002)。在日本大韓民国青年会(2010)には, “人前で表現したりするのに執着しているのは, 在日だからってというのがすごく大きいと思う。私がもし在日じゃなかったら歌ってないかもしれない” との語りがある。これらのことは, 在日コリアンというカテゴリが差別の対象となっているからこそ, 共通的に自己防衛次元で集団アイデンティティを強化したり個人的に自分を表に出したがつている様子が見られる。すなわち, 在日コリアンというカテゴリが日本社会において, 肯定的に認められず, 自分たちの存在を表に主張できない反動としてエスニック集団に帰属感を得て自尊心を保とうとするのではないかと思われる。

在日コリアンが日本への移民当初のころは, 特に, 日本という同化主義社会において, 安心して生きていけることに注目しがちで, そうなると, 集団として団結し, 彼らの確固とした法的な地位を求めようになるのであろう。単一民族社会である日本社会に (古家, 2010 ; 李 2011), 外国人が少ない時代に, 在日コリアンはほぼ 90% を占めていた (<http://www.moj.go.jp/content/000081958.pdf>)。その中で, 在日コリアンは異質な存在として見られ (金, 2011), 差別があった当初としては, その盾として集団でまとまり, 従って, 在日コリアン研究は集団に焦点を当てられてきたと思われる。在日コリアンに見られたこの現象を西洋の文化変容研究の中に位置づけてみると, 「集団レベルの文化変容」に該当する。Berry (2005) は約 30 年にわたるこの領域における研究を総括した展望論文で, 文化変容には集団レベルと個人レベルの文化変容があると述べながら, 「集団レベルの文化変容から, 個人レベルの文化変容, そして個人の適応」という経過を想定した。集団レベルの文化変容 (cultural/ group level acculturation) を考える時は, 社会状況の理解が必要であると述べている。出身社会に関わる要因として, 移住動機がどの程度自発的にしていたかが, 重要

な役割を果たすという。移民先社会の要因としては、受け入れ社会が移民に対してどのくらい寛大か、多文化社会なのか多文化を排除する社会なのか、重要であるという。

近年は、在日コリアン以外にも異文化圏からの移入者が多数滞在するようになり、日本社会の多文化化が進みつつある。日本社会の構成員の世代交代が進み、戦後に比べれば差別は弱まってきた（李，2011）。そこで在日コリアンも集団への依存が弱まったり，コリアンのカテゴリへのこだわりが弱まったりするかもしれない。所属集団が自己像に大きな存在感を持っていた時代とは異なり，自分の特徴で自らを語りたいという欲求が生じて不思議ではない。そうなれば，与えられたカテゴリに自分を当てはめるという自己規定の仕方ではなく，自分の選択によって自己の存在のあり方を意味づけ，ありのままの自分を出し，自然のままの自分でいたいと願うようになるかもしれない。言い換えれば，在日コリアンの集団への依存が弱体化し個人アイデンティティを軸にした自己の捉え方が強まったのであろう。個人アイデンティティを主張できるようになったというのは，受け入れ社会がそれを認めてくれるようになったことと，在日コリアンが集団カテゴリに拘らぬ生き方を持つようになったことが，その背景にあると思われる。エスニック集団というのは，1世には拠り所であったといえども（福岡，1993），今の世代にエスニック集団は拘束感の存在であるかもしれない。金（1999）は集団が個を抑圧してきており，1980年代以降の世代は「在日コリアンとしての自分」ではなく「個人としての自分」をみてほしい世代であると述べている。李（2011）は，今の在日コリアンの若者は，1世とは異なり，民族性より個を重視するという。森（2002）は，次のようなある在日韓国人の語りを紹介している。卒業後，外資系の会社で働いた時，欧米人と接することについて，“すごく気持ちよかったのは，私を個人として見る”からだ，上記の語りは全て，エスニック集団から距離をおいたりないしは否定し，個人が注目されることに心理的な解放感を感じる例ともいえるだろう。

個人のアイデンティティが注目されるに至った背景は，他にも想像できる。原尻（1989）は，日本にも韓国にもびったり当てはまるカテゴリがないと思う在日コリアンは，帰化したあとも，朝鮮人でもないが日本人でもないと感じ，“自分は何ものか”という疑問を持つという。そこで社会の周辺的な人間，いわゆるマージナルマンであることで，返って「コスモポリタン」や「自由人」を標榜するようになる人たちがいるというこの発見は，帰化をしても自分を日本人と称することが妥当と感じられない場合に，どちらのカテゴリでもない，新たなカテゴリを作りだすことを選んで，“自由人”のような第三の存在のありようを創出するという選択肢の登場を示唆する。ただし上記は心理学的な調査ではなく，構成概念や他のカテゴリとの異同が詳しく分析されているわけでもない。新たな生き方を多くの人が本当に持っているのか，理念としての提唱に過ぎないのか，あるいは自己の存在の仕方への単なる比喩表現なのか。日本人でもなく韓国人でもないと感じる在日コリアンが，自己を“個人”（金，1999）や“自由人”（原尻，1989）と表することは，どのような生き方と結びついているのか。具体的にはどのような行動を指すのか。まだ実証的研究が少なく，実態の把握を進めることが求

められる。これは従来の二次元文化変容モデルに照らし合わせると、エスニックとホストの二次元からはみ出た、このモデルでは理解できない現象といえよう。本研究では、移民としての在日コリアンを心理学視点から個人として捉えた視点の研究を行なう。

以上まで、海外と日本における文化変容態度及び二次元モデルに関する先行研究を概観してきた。次に、文化変容は個人にいかなる意味を持つのか。個人のメンタルヘルスとの関連を巡っての先行研究を概観していく。

### 2.3. 西洋における文化変容態度と関わる心理的変数

Berry ら (1988) は展望論文において、個人に起きる文化変容とメンタルヘルスの関連について、この両変数は必然的に関連しており、文化変容プロセスをたどった結果、うまくいけば適応に至るが、うまくいかなければ文化変容ストレスが生じるという。そしてメンタルヘルスの指標となる心理的な特徴は多様だが、適応の質を反映した特徴が主に用いられると述べている。肯定的な特徴としては、病気がない状態を超えた心理的 well-being, 否定的な特徴としては文化変容ストレスがあるという。海外の先行研究において、文化変容と関連して取り上げられてきた心理的な従属変数を表 1-2 にまとめた。

表 1-2

## 心理的従属変数に用いられる尺度

著者	対象	指標	概略
Jang ら (2007)	在米韓国人 移民 1 世	文化変容と メンタルヘルス	・メンタルヘルス：うつ・不安感
Ward ら (1994)	海外に居住して いるニュージーラ ンド公務員	文化変容と 心理的適応	・心理的適応は心理的 well-being や新環境におけ る満足感と関連し、本研究では、尺度として「うつ」 を用いている
Ouarasse ら (2005)	オランダに居住 するモロッコ人 2 世	文化変容態度 と心理的適応	・心理的適応の尺度として、「メンタルヘルス」を 用いている。項目の例：“寝付くのが難しい”，“時々 自分の人生は価値ないもののように思われる”
Berry ら (2010)	カナダとフラン スにおける移民 2 世	文化変容方略 と心理的適応 (self-esteem)	・本研究では、心理的適応の検討に、二種類の自尊 感情の側面を測定する。①一般的な self-esteem を 測るための Rosenberg scale ②自尊感情の四つの 次元 (emotional, familial, social, school)
Sam ら (1995)	ノルウェーにお ける移民 2 世	文化変容態度 と感情障害 (emotional disorders)	・感情障害の下位概念として、うつ・否定的自己 評価・心理的症候を用いている

独立変数には文化変容に関する変数として“文化変容”，“文化変容方略”，“文化変容態度”，そして従属変数にはメンタルヘルス，心理的適応，感情障害が取り上げられている。従属変数の指標として，主に，うつのような臨床的な問題傾向や病的状態が中心となっており，肯定的な意味合いの変数の測定は少ない。なお“文化変容”，“文化変容態度”，“文化変容方略”は，測定の内容を見るとすべて二軸を想定し，母文化への態度に関連する項目と，ホスト文化への態度に関連する項目を使っての測定が行われている。Ouarasse and van de Vijver (2005) 以外では，4 類型化も行われている。これらでは用語は不一致だが，すべて二文化への態度を評価し，特にそれらを組み合わせるという点で，内容的には類似と考えられる。そこで本稿ではこの種の試みは，“文化変容態度”の測定として表記しておく。





上記の表から、4 類型文化変容態度と心理的従属変数の先行研究の報告を巡っては、「統合」群の所属者において、一番心理的適応がよいとの結果は一貫している。しかしメンタルヘルスが最も悪いのは4 類型のさまざまな報告があり、一貫していない。Ward ら(1994)は、海外に居住している New Zealand 公務員を対象に、「同化」群がもっともうつである報告をしている。Jang ら(2007)は、アメリカ居住の韓国人高齢者を対象に、「分離」群がもっともうつであるという。Sam ら(1995)は、Norway 移民を対象に「周辺化」群がうつ、否定的自己評価、心理的症状(psychosomatic symptoms)の説明変数であると報告している。

ただし、4 類型化を行なうときに、Ward ら(1994)のように中央値区分方式を使うと、スコアの偏りがあっても、その中で中央値で区分されるため、各類型の特徴が明確にならない可能性がある。評定の絶対値をみてみないと、各類型の典型性がどの程度反映されているのかは把握できないだろう。この意味で、Berry らの最初から4 類型を想定して、4 類型ごとの文章を作って評価する方式は、絶対的な性質を前提としているが、Ward らの結果論的な区分はいわば相対的な分類といえる。後者は、相対的な高低スコアでみた場合に、いずれの社会でも共通した現象がみられるのかどうかを検討するには適しているだろう。だが相対値に還元してしまうことで、社会的特質を考慮した分析にはなりにくく、受け入れ社会を他の社会と比較して位置づける視点は省かれてしまう点が問題だろう。受け入れ社会の特徴を反映した四類型への偏在を検討するにはBerry らの手法が適している。すなわちBerry 式は当該社会が、滞在者にどの類型の傾向を持たせやすいかという特徴を、反映させながら測定できる手法である。ただし、当該社会の特徴は反映されにくい、複数の社会間の比較を測定しようと思えば、Ward の手法が有利である。その場合は、ユニバーサルな質問項目だけで測定を試みるため、特定の文化・社会への関わりをどう精密に把握するのかという点に課題は生じよう。

上記は文化変容態度と心理的従属変数との関連を見てきた。先行研究では、二次元文化変容モデルがアイデンティティの概念としても引用される研究があるため(Ting-Toomey ら, 2000; Ouarasse ら, 2005), 以下にアイデンティティと心理的従属変数の結果をみていく(表 1-4)。

表 1-4

## アイデンティティと心理的従属変数の測定結果

著者	対象	尺度	結果
Nesdaleら (2003)	オーストラリア 居住の多様な エスニック集団 (すべて外国生 まれ)	・説明変数：エスニック アイデンティティ (エス ニック同一視) ・従属変数：エスニック 自尊心、個人的自尊心 (Rsenberg Self-esteem Scale), 心理的健康	・エスニック同一視 (identification) はエス ニック自尊心の正の予測要因だった ・エスニック同一視は、個人的自尊心の負の予 測要因だった ・個人的自尊心は、心理的健康の予測要因だっ た
Phinney (1992)	在米居住の多様 なエスニック 集団の高校生と 大学生	・説明変数：エスニック アイデンティティ ・従属変数：個人的自尊 心 (Rsenberg Self-esteem Scale)	・高校生も大学生もエスニック・アイデンティ ティと自尊心の間に有意な正の相関があった
Gong (2007)	在米アジア系 (外国生まれ, アメリカ生ま れ) とアフリカ 系	・説明変数：エスニック アイデンティティ, ナシ ョナルアイデンティテ ィ, ホスト集団との同一 視 ・従属変数：個人的自尊 心 (Rsenberg Self-esteem Scale)	・エスニックアイデンティティが全ての集団に おいて、個人的自尊心の予測要因だった ・2世のアジア系においては、ホスト集団との 同一視が個人的自尊心の予測要因だった
Ben-Shalom ら (2004)	旧ソ連からイス ラエルに来た 移民軍人	・説明変数：エスニック アイデンティティ, ナショナルアイデンテ ィティ ・従属変数：心理 的適応 (生活満足感)	・ナショナルアイデンティティと心理的適応の 間に低い関連があった ( $r=.12$ ) ・エスニックアイデンティティと心理的適応と は関連がなかった
Wardら (1999)	ネパール居住 外国人 (1ヶ月～8.8年)	・説明変数：同胞民族への 同一視, ホスト民族への同 一視 ・従属変数：心理的適 応 (うつ)	・心理的適応の唯一の予測要因は同胞民族との 同一視で、ホスト民族との同一視とは関連がな かった

表 1-4 をみていくと、アイデンティティを独立変数とした研究において、従属変数には自尊心と適応の二つが使われている。まずアイデンティティと自尊心についてみていくと、多くの研究では、エスニックアイデンティティが自尊心の予測変数であったとして報告している (Phinney, 1992 ; Gong, 2007)。これは、上記の文化変容の 2 次元と心理的変数との関連からみたときに、「同胞民族への同一視」は心理的適応の予測変数であったという報告 (Wardら, 1999) と一貫している。ここでいう「同胞民族への同一視」の測定項目の例として、“あなたの行動や体験は母文化の人々と似ていますか” などがある。一体化することの意味合いで、意識面を強調するアイデンティティの概念とは微妙に違うものかもしれない。Phinney (1992) は、エスニックアイデンティティが自尊心の関連について以下のように推測している。アメリカにおいてマイノリティ集団の人々は、総じてマジョリティ集団である白人たちよりもエスニックアイデンティティが高く、特に黒人は他のエスニック集団よりエスニックアイデンティティの得点が高い。こうした現象は、社会的な不利と差別的待遇が彼らを高い所属感に駆り立てたためであろう、と述べている。

次にアイデンティティと適応の関係を考えてみる。自尊心ほどは研究例がみられないが、一定の知見は見られる。Ben-Shalom & Horenczyk (2004) の調査では、ナショナルアイデンティティと心理的適応 (生活満足感) は有意な低い相関 ( $r=.12$ ) を示したとされている。調査対象は、旧ソ連からイスラエルに移民した軍人である。彼らのナショナルアイデンティティが高いことについて以下のように考察されている。まず、彼らは軍事的サービスに従事することを、不必要な厄介ごと (unnecessary obstacle) ではなく一つのチャンスととらえているのではないか、さらに軍隊には強く同化をいざなう性質があるためではないか、と述べている。これが軍人という特殊な集団に限ってのことなのかどうかは、未詳である。こうした知見から、たとえ自主的な移住でなく強制的な移住であっても、移住を災難として受け止めるのではなく、チャンスなどと肯定的に認知する場合は、ホスト社会を肯定しやすく、同一視が進んだり、ナショナルアイデンティティが高まったりしやすいだろう。こうしてホストの文化・社会への心理的接近は、心理的適応に肯定的影響を及ぼすと予想される。

以上をまとめると、心理的適応 (生活満足感) を果たすためには、ホスト寄りの心理 (例、移民を Chance と捉えること) を持つことは有利に働いているようである。しかし、同胞民族との同一視のようなエスニックへの強い心理的関わりは、社会生活とは異なる次元で心理的安定を図る機能があるという見方もできよう。

#### 2.4. 在日コリアンにおける文化変容態度と関わる心理的変数

在日コリアンは 100 年以上日本に住んでいるが、彼らの法的地位及び行政面 (例、参政権、社会福祉など) に関する社会学の研究に比べて、心理学研究は少ない。心理面に近いものとしては民族差別、国籍に基づいたアイデンティティ、民族的誇りや民族的劣等感などが報告さ

れてきた（福岡，1997；林，2001）。例えば，民族的劣等感および誇りを測定する際に，“これまで、在日韓国・朝鮮人である自分をいやだと思ったことがあるか”，という単項目が尋ねられている。簡易に問われるのみで，精緻な測定はされていない。つまり，集団の構成員としての意識を尋ねることが多く，集団の社会的位置づけに力点が置かれてきたと思われる。

移民を対象とした研究において，西洋では個人に注目した心理学視点からの研究が多い。一方で，在日コリアンでは個人より集団に注目した先行研究が多く，個人が軸となる心理学視点からの研究は少なかった。西洋の移民研究では，個々人のメンタルヘルスと関連して文化変容の要因を心理学的に重要な主題としていることに対して，在日コリアンの心理学研究では空白のままになっている。特に，在日コリアンを従来の集団としてではなく，個人として捉える視点はメンタルヘルスとどう関連するかは，本研究でみていきたい点の一つである。

## 2.5. 本研究の目的

在日コリアン研究は，今まで，集団の一員という認識に焦点が当てられる，集団が基準となる研究が多かった。例えば，在日コリアンというあいまいな社会的身分からもたらされる心理的葛藤（主に，集団アイデンティティ）の報告が多い。“日本人でもなく韓国人でもなく個人として”（福岡，1997；金，1999），“何人をやめて地球人にしよう”（辻本ら，1994）などのような例はこの知見をを裏付けるものである。集団と離れて単独な個人として扱った研究は少ない。

本研究では，移民的な集団としての在日コリアンの個人の心理現象に焦点を当てて心理学な視点と手続きによる研究を行う。具体的には，基本的な検討として，西洋の移民個人を対象とした心理学的研究で，文化変容とメンタルヘルスに関する研究蓄積が厚いことから，在日コリアンでも同じモデルを使って，このいわば定番知見の検討を行う。まず，文化変容態度について，西洋の移民における広く用いられる二次元文化変容モデルの概念構成自体が，在日コリアンではないため，どういう項目で在日コリアンの文化変容/文化変容態度を捉えるかを検討する。そして，在日コリアンでは，従来の集団中心から「個」中心へと自己の捉え方が変わりつつあり，日本か韓国という二者択一の選択ではなく，それらを否定あるいは超えた生き方として個人や自由人，コスモポリタンなどの捉え方が注目を受けている。これは西洋の二次元文化変容モデルと対応すると，そこに当てはまらない現象である。我々は，この現象を含めて，在日コリアンにおける文化変容態度は何かを質的手法によって探索する。次に，質問紙調査によって在日コリアンの文化変容態度を実証化するプロセスをたどる。メンタルヘルスについては，うつ，孤独感，mental disorder などネガティブ面に焦点が当てられてきたが，本研究では，より幅広い観点からメンタルヘルスを捉えるため，うつと幸福の両方を入れて測定を試みる。最終的に，在日コリアンにおける文化変容態度とメンタルヘルスの関連を明らかにし，受け入れ社会の社会文化的特徴や日本における在日コリアンの社会的身分などの背景を考慮した考察を行なう。

## 2.6. 本研究の構成

本稿の構成は以下の通りとする。

第1章では、移民として捉えられる在日コリアンについて、西洋における移民研究と対比しながら先行研究を概観し、在日コリアンの心理学的視点からの研究課題を論じた。具体的には、在日コリアンにおける文化変容態度とメンタルヘルスに関する論点となっている。

第2章では、質的研究による在日コリアンの文化変容態度を探索するが、近年、在日コリアンで注目されている、従来の韓国や日本という集団カテゴリと離れた“個人”や“自由人”など、新たな自己認識とみえるこの現象も組み込む。これは、従来の集団から今日の「個」への自己の捉え方の焦点がう移りながら、注目されるようになった現象で、従来の標準的な2次元文化変容モデルに照らし合わせると、それに当てはまらない現象といえよう。本研究は在日コリアンの個人に焦点をあてた研究であるため、この現象を組み込むのは価値あるものと考えている。我々は、面接調査によって、実際にこういう志向の人がいるかどうか確認、いればこれを概念化してみる。この初級的研究によって、在日コリアンの文化変容態度を測定する項目及び、仮説の手がかりを得ることができる。

第3章では、在日コリアンにおける心理学視点からの二次元文化変容の尺度がないため、質問紙調査によってそれらを用意する。そして面接調査で得られる個人や自由人などの現象を含めて、新たな態度的特徴の概念があれば、それも尺度化を試みる。在日コリアンがどのように両文化を抱えているか、つまり、どこを持ってエスニック/ホスト文化と認識するかを把握するため、わざと、1対1の対項目構成で、項目選別を試みる。尺度の用意ができれば、在日コリアンにおける二次元文化変容態度と面接で得られる新たな概念間の関連を検討する。なぜなら、二次元文化変容の概念は西洋の移民研究で頻繁に用いられるが、しかし、在日コリアンではそれを測定できる尺度がないため、用意する。さらに、面接で新たに得られる在日コリアンに見られる態度的特徴があるなら、それは先行研究の中で位置づける必要があると考えられる。そして、個人とか自由人などの新たな自己認識について、質問紙調査による実証的に概念化を行なう。研究全体の主題を考慮して、ここでは単項目でありながら、メンタルヘルスについて示唆的な知見を得るために、尋ねる。

第4章では、西洋の移民研究での定番知見である文化変容態度とメンタルヘルスの関連について、尺度の用意ができたため、質問紙調査による在日コリアンにおけるこれらの関係を検討する。文化変容の尺度は受け入れ社会や移民の歴史的背景などにより、各国の移民に異なると予想されるため、在日コリアン用の文化変容の尺度が必要であると考えられる。しかし、うつや幸福感のメンタルヘルス尺度は、ある程度は人類全体に共通しうる概念と考えられるため、既存の尺度を用いることにした。次に、日本人でもなく韓国人でもなく個人や自由人など、集団カテゴリから距離をおいた自己の捉え方に関する新たな概念についてそのプロセスを検討する。第3章の調査では概念化を行ない、従来研究との関連の中で位置づけまでができた。これによって両者の静止的な関係までは実証できるが、在日コリアンが新たな

自己認識にいたるまでの他の要因との動的つながり、動的なプロセスを検討するため、パス解析を行なう。これを行うことによって、個人や自由人などの新たな自己認識の実態が明確になると考えられる。つまり、どのような特徴が個人や自由人になることを促進するかあるいは抑制するかが把握でき、その流れをつかむことができる。

最終である第5章では、以上の結果を総括して、本研究の基本的な検討点である在日コリアンにおける文化変容態度とメンタルヘルスの関連について、受け入れ社会である日本社会の特徴と関連して全体考察を行なう。発展的検討点として、在日コリアンに見られる個人や自由人などの新たな自己認識は、従来の二次元文化変容モデルと対比するとこのモデルでは説明できない現象である。この現象が引き起こされる前後の因果プロセスを検討し、さらにメンタルヘルスとの関連を明らかにする。そして、本研究の限界と今後の課題について論じる。

以上の手順で、日本における外国人の中で最も定住期間が長く、今のような多文化社会になる以前から日本に居住していた、日本の多文化化の先頭にいたといえる在日コリアンを対象に心理学視点からの研究を行なう。日本社会は彼らへの対応がどうだったのか、在日コリアンはどのような葛藤や悩みを抱えているのか、彼らの精神健康に影響する要因は何かを検討することで、今後、今よりさらに多文化・多民族社会になっていく日本社会に新たな知見や課題を映し出すことができるのであろう。

なお、構成の全体象については、図 1-1 に示す。

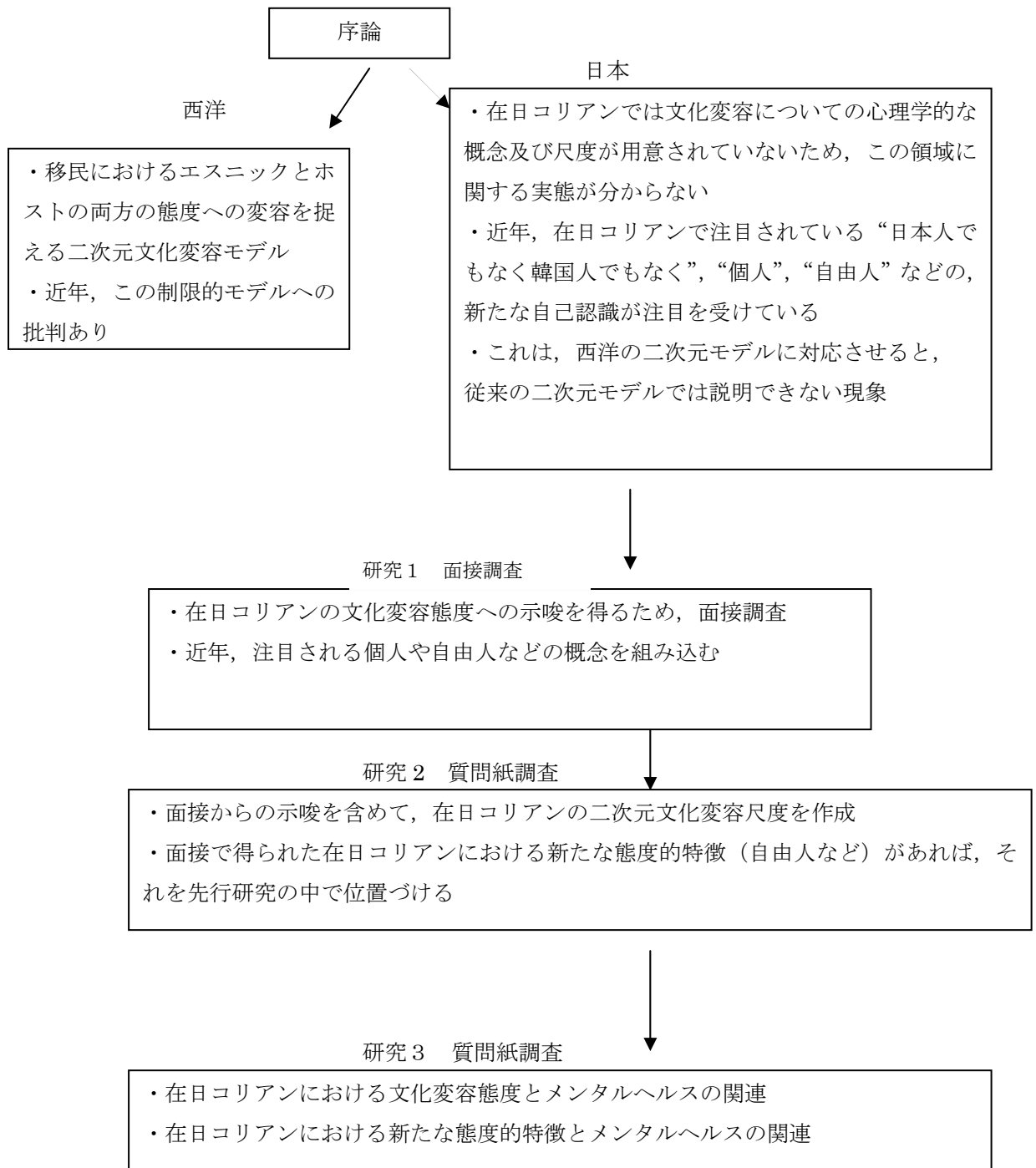


図 1-1 研究の全体象

## 第2章

### 在日コリアンにおける文化変容態度の探索

#### 第1節 研究の背景と目的

##### 1.1. 西洋における4類型文化変容態度

移民の受け入れの歴史が長く、人々の国際的流動性が高い西洋諸国では、異文化圏から移入してきて定住する、長期異文化滞在者の心理学的研究が蓄積されている。Berry, Kim, Power, Young, & Bujaki (1989)による、カナダにおける移民の文化変容態度 (acculturation attitudes) の概念モデルはよく知られているが、そこでは移民の文化変容態度が4類型で捉えられている。①「文化的アイデンティティと特徴」を維持したいかどうか、②「ホスト社会とのよい関係」を維持したいかどうかという観点に、「はい」と「いいえ」の姿勢を想定して分類する。両方「はい」の移民は「統合」(integration) とされる。②のみ「はい」で①は「いいえ」は「同化」(assimilation)、反対に①のみ「はい」で②が「いいえ」は「分離」(separation) とみなされる。ともに「いいえ」なら「周辺化」(marginalization) とみられる。そしてそれぞれの度合いを数値化するため、カテゴリごとに複数の項目群を設定した質問紙が作成されている。例えば、友人関係に関する「分離」の項目として、“ほとんどの私の友達は韓国人で、なぜなら、カナダ人と一緒にいるより気が楽だから”などと尋ねられている。

##### 1.2. 日本の社会学における在日コリアンの生き方やアイデンティティの類型と個への注目

在日コリアンの文化変容態度の類型化を心理学的に行なった研究は見当たらないが、社会的な示唆はみられる。まず一世の文化変容態度について、金(1999)は、民族という枠組みのみを持って自分たちの存在を説明しようとした、と述べている。この点では、心理的には一世はホスト社会と距離を持ち、同胞との強い結びつきに支えられて生きるという西洋の「分離」に該当すると考えられる。

日本で生まれ育った二世・三世については、原尻(1989)は、文化的に日本人に同化している面が強く、現実に文化変容を受けていると述べている。宋(2001)は、在日韓国・朝鮮人の若い世代は、現代の日本の若い世代と同じ考え方や行動をする、と述べている。福岡(1993)は、在日韓国人の聞き取り調査から、二世・三世は、空気を吸うように自然に日本文化を吸収・内面化している、と述べている。これは、ホスト文化への合流が進んでいるという意味で、西洋の「同化」に重なる部分が多いだろう。しかし、加えて出身文化への態度が肯定的なものであるなら、西洋の「統合」の可能性もあろう。

福岡(1993)は、祖国で成長し民族文化を自然に内面化した上で渡日してきた一世の同化と、



日本で生まれ育った二世・三世の同化は、分けて考えるべきだと述べ、両者に同化的な現象が存在するとの認識を述べている。このことは、同化の質的差異(1世と2・3世)を想定することで解釈できよう。つまりその意図や必然性は異なり、一世は生きていく手段としてやむを得ず同化したが、それは表面的、部分的に周りに合わせていたに留まるのかもしれない。二世以降は特別な努力を要したというより、むしろ自然に同化しているらしいことから、成育する際の社会化の過程でホスト文化の内化が起きており、同化的態度が心理的にも完成している状態にあることを示唆しているように思われる。

林(2001)は、在日韓国人を対象とした質問紙調査で、“民族的アイデンティティ多様化を分類”する目的で、二世・三世に対して、「母国に対する愛着度」と「日本への帰化願望」をそれぞれ評定法によって尋ねている。愛着に関する「非常に・かなり愛着がある」「どちらともいえない」「あまり・全く愛着を感じない」の3カテゴリと、帰化に関する「是非・できれば帰化したい」「あまり・全く帰化したくない」の2カテゴリを組み合わせて、6セルに回答者を分けている。続いて愛着あり/帰化したい、愛着なし/帰化したい、愛着あり/帰化したくない、愛着なし/帰化したくない、の4セルの回答者のみを取りだして、「両属志向」、「帰化志向」、「伝統志向」、「個人志向」としている。そして、これらは統計的に弁別はされたが、愛着と帰化の評定が片方のみ高い人に比べて、両方高い人や両方低い人の特徴はつかみにくいと述べ、その上で両方低い人たちには「個人志向」があるようだと論じている。この人たちは海外へ留学したり、外資系企業に就職するなど、日本社会にとどまらない「移動」をすることがあり、差別的評価から自由になることを願っている人が多いと述べている。愛着について「どちらともいえない」と回答したことから、6セルから除かれて上記の4分類に含まれなかった2セルに属する人たちは、全体の18.0%にのぼり、彼らの特徴づけが不明という問題は残る。だが少なくとも愛着も帰化志向も「低い」人たちが、両文化に距離をとっているという意味では、西洋の「周辺化」に重なる部分を持ったカテゴリといえるだろう。

西洋の「周辺化」を示唆する知見は、他にも見つかる。福岡(1993)は、二世・三世への聞き取り調査から、“アイデンティティの分類”として独自の4類型(帰化志向、祖国志向、共生志向、個人志向)を提唱した。個人志向が一つの類型として立てられ、「日本社会における自己の生育地への愛着心が薄く、在日の歴史へのこだわりも少ない人たち」とされている。その特徴は、①個人的成功や自己実現を追求し、②そのために「移動」をし、③対人関係面では民族・国籍といった属性にとらわれず、④業績自体を評価する“個人主義的”な考え方を持っている人々との付き合いに解放感を抱くこと、とされている。両文化のカテゴリを離れたがるという点で、これも西洋の「周辺化」と重なる発想といえよう。

以上のように、近年、在日コリアンの間では国籍や集団カテゴリから離れ、独自の自分という「個」としての自己のありかへの捉え方が注目を受けている。その結果、従来の在日コリアンという集団を中心と行なわれた研究が、近年は個人が研究対象となっていく動きを見せている現象といえる。教育・文化人類学者の原尻(1989)は、在日朝鮮人が自分を「自由人・

国際人・その他」で認識するケースが増加していると述べている。先の辻本ら(1994)による自由記述の報告の中には、集団カテゴリに距離を置く考え方が紹介されている。「民族の自覚をもつことは大切だが、あまりに強い民族主義的傾向は、外国に居住しているものとしてはあまり好ましくなく、韓国人として過剰意識を持たなくてもいいと思うが、韓国人としてのプライドを持つことは大切だと思う」と書かれていたという。教育社会学者の金(1999)は、従来は民族という枠組みが個を抑圧する機能を果たし、集団的アイデンティティが誇示されていたと述べたうえで、今は“個人としてのアイデンティティの尊重”が主張され、「在日朝鮮人としての自分」ではなく、「個人としての自分」をみてほしい、と感じる世代であると述べている。従来の在日コリアンが民族カテゴリをかなり強調してきたこと、今日はそれには依らない者もみられるようになってきたことが読み取れる。

Berry ら(1989)の周辺化は、「文化的アイデンティティと特徴の維持」「ホスト社会とのよい関係の維持」とともに否定するという定義に過ぎず、代わりに何を志向し、何を求めるのかは未詳のままといえる。今日の在日コリアンの二世・三世において、「国籍に拘らない」傾向(宋, 2001)がみられるという指摘は、西洋の「周辺化」の概念的な解明という課題と結び付くだろう。彼らが二文化の二者択一的な選択でも両文化の統合でもなく、それらとは異なる態度として、“個人”“人間”“自由人”“国際人”などとして生きる、新たな志向性を持つならば、Berry ら(1989)のいう周辺化を、この特徴を含めて再定義できるかもしれない。何らかの価値や意味をこめた積極的な選択なのか、他のカテゴリに属しない人たちの消極的な選択なのかは定かではないが、これを仮に「自由人」とし、二文化カテゴリの希薄のみでなく、そこからの“脱却”も意図するカテゴリとして、捉えなおす可能性を検討してみたい。

これは、韓国や日本という二軸から離れたがる現象で、従来の二次元モデルと対比すると、標準的な二次元モデルには含まれてこない現象であり、理解されにくい現象として位置づけられる。本研究では、文化変容態度とメンタルヘルスのかかわりの解明を視野に入れ、その第一段階にあたる初期的調査として、在日コリアンの文化変容態度について上記の「自由人」の現象を含めて探索してみたい。

具体的に、文化変容態度のガイドラインとして、西洋では文化変容の尺度の中には、self-identity といってアイデンティティ項目が日常生活の文化(例、交友関係)と一緒に組み込まれたり(Ward ら, 1994)、アイデンティティと文化との対応がほぼ一致する(Berry ら, 1989)との報告がある。しかし、在日コリアンの社会学的研究では、日本への文化的同化を進めながらも韓国国籍を維持する在日コリアンが少なくないとされる(谷, 2002)ことから、アイデンティティと文化を分離して尋ねるのが妥当だと考えた。「文化変容態度」の具体的な測定概念は「1. アイデンティティの自己カテゴリ付け」と「2. 二文化環境との関わり方」を尋ねる。

「アイデンティティの自己カテゴリ付け」は、個人の内的な心理状態をどう認知しているかを尋ねるものである。二文化の間で文化的存在としての自分をどう見なすか、代表的なカ

テゴリを想定した中から、自称像を選択してもらって測定したい。山崎・平・中村・横山(1997)は、在日アジア系留学生を対象とした心理学的な調査において、「自分の民族的立場を自分の言葉で書いてください」と自由記述で求め、さまざまな回答を得ている。そして少数ながら、「地球人」との記載を得たという。在日ブラジル人の子供たちを対象とした教育学者の調査(光永・田淵, 2002)では、「自分は何人?」と自由記述で問われて、「単純な日本人でもない、ブラジル人でもない混血だと思う」「日本人かな」などと答えている例がある。自己カテゴリ付けを問う聞き方をすれば、自分の内的なアイデンティティの捉え方を知ることになるだろう。心の内的なバランスを問う聞き方をすれば、心理的な自己評価をたどることになるため、メンタルヘルスとの関連がより強く反映される可能性も考えられよう。ただし、全くの自由記述では回答のカテゴリが不明瞭になることが懸念される。本研究では、カテゴリを提示して選択してもらいつつ、二文化への考えや姿勢を自由に語ってもらう半構造化面接の形で、彼ら自身の言葉で二文化環境への態度を語ってもらうこととしたい。具体的には、「自分のアイデンティティの状況を一言で言ったら」と尋ね、「統合人, 日本人, 韓国人, 自由人」を提示して、選んでもらうという方法を用いる。

「アイデンティティ選択」の中に、「自由人」を入れた理由は、従来なら「周辺化」を入れるが、近年在日コリアンで注目されている「個」としてのありようが本当に選択されるのかを確かめてみたい。そして従来の「周辺化」定義が、両文化への志向性が低いという以上の定義にならず、「自由人」の度合いを測定するには不足だろう。従って、本研究では新たに建てた「自由人」の概念化を試みて、今後の研究展開として「自由人」の尺度化に向けた質問項目を考えていく必要がある。

「二文化環境とのかかわり方」は、二つの文化と個人との関係の持ち方を、内的及び外的な観点から問うもので、Berryら(1989)の考え方(例、ホスト社会での対人関係や母文化の継承意欲)を参照しながら、在日コリアンにおいて注目されてきた事柄、例えば帰化の意思や本名の使用、親友の国籍などを入れて、在日コリアンにあわせた内容を尋ねた。日本文化と韓国文化の両方への態度を尋ねるが、母文化とのかかわり方が変容しつつあるとの知見をうけて、母文化に関わる部分をより細かく尋ねる。尋ね方としては、半構造化面接とする。

続いて「アイデンティティ」選択と「二文化環境とのかかわり方」が、いかに関わるかをみてみたい。例えば、韓国文化が色濃い生活をしていたら、韓国人アイデンティティが選択されるだろうか。ずれがあるなら、アイデンティティの選択は、単なる二文化環境とのかかわり方の反映ではないことになり、そのずれは何を意味するのかを考えてみるのは興味深い問いとなる。また、個人としてのありようを尋ねたとき、選択肢の一つに「自由人」を提示したなら、それは韓国人や日本人のカテゴリよりも選好されるのか。その個人の家庭環境や周囲の人とのかかわり方、二文化へのストレスの認知は、どうなっているのか。設定されたアイデンティティの四カテゴリと二文化環境とのかかわり方は、どうつながっているのかを探りたい。

以上を研究上の問いとして、本研究では、2つのリサーチクエスチョンを設定する。一つ目は、「自由人」は何かという自由人の概念構成を探ることである。二つ目は、「1. アイデンティティの自己カテゴリ付け」と「2. 二文化環境とのかかわり方」、両者の対応関係を確かめながら、アイデンティティによって二文化環境への関わり方がどう特徴づけられるのかを整理してみようと考えた。以上の自由人概念化とアイデンティティ選択と語りの関わりから、日本における在日コリアンの文化変容態度を捉えていくための視座を見出そうとした。

## 第2節 方法

### 2.1. 調査対象者

在日韓国人11名（男性4名・女性7名）。筆者の知人を通じて、縁故法によって依頼した。研究の意図を説明したところ、全員が協力を承諾し、面接に応じてくれた。世代構成は、二世が3名、三世が8名であった。年齢は、20代が3名、30代が3名、40代が2名、60代が3名。

2.2. 調査時期 2009年8月中旬。

2.3. 手続き 一人つき30分程度の半構造化面接を行った。語りは、メモをとって記録した。あらかじめ用意した質問をたどりながら、話しにくそうな問いは飛ばし、差し支えない範囲で話してもらった。全員、日本語で面接を行った。

2.4. 面接のガイドライン 答えやすさに配慮して、以下に示す①から⑭を順に尋ねていった。なお、⑨は「文化的アイデンティティの自己カテゴリ付け」（自称項目：\*印）を尋ねたものである。①～⑧と⑩～⑭は、「二文化環境とのかかわり方」を問うもので、Berryら（1989）において、個人内の文化的アイデンティティの項目をもとにしたもの（個人内項目：◎印）と、周囲との関係の項目をもとにしたもの（関係性項目：○印）から成る。面接においては、インフォーマントには、これらの問いに対して自由に考えを述べてもらった。

<尋ねた事柄> ①日本人の友達と付き合う時と同胞の友達と付き合う時とで、付き合い方を変えるかどうか（○）。②韓国文化を異文化のように感じるか（◎）。③日本文化と韓国文化の違いでストレスを感じることはあるか（○）。④韓国文化を引き継ぎたいと思うか（◎）。⑤家で韓国語を使うか（◎）。⑥あなたの家では韓国人として教育を受けたか、日本人として教育を受けたか（◎）。⑦日本に帰化したいと思うか（◎）。⑧日本に対するイメージは（○）。⑨自分のアイデンティティの状況を一言で言ったら、自分はどれだと思うか（統合人・日本人・韓国人・自由人を説明しながら示し、選択を求める）（\*）。⑩私はやっぱり韓国人だなと実感する時はいつか（◎）。⑪韓国に対して、日本に対して愛国心はどれぐらいか（◎）。⑫私はやっぱり日本人みたいだなと感じることはあるか（◎）。⑬通名と本名と、どちらの名

前を主に使っているか(◎)。⑭親友やより深い話をするのは日本人と韓国人のどちらか(○)。

具体的な質問項目の選択については、以下のように考えた。

<文化的アイデンティティ> 韓国語(⑤)は、「母国語がしゃべれれば自意識に目覚めたとき何かの手助けになる」(辻本ら, 1994), 「母国語ができないことを恥ずかしいと思う」(在日本大韓民国青年会, 2009)といった指摘があるため、母語の継承が重視されるという観点から尋ねた。母文化に接する場としては家庭が重視されていることから、家庭教育(⑥)について尋ねた。在日コリアンが、「母文化の継承とホスト文化の受容という二重の課題を抱える」との指摘(李・佐野, 2009)を受けて、母文化の継承意欲(④)を尋ねた。ホスト文化の受容は、日本人だと思う時(⑫)を尋ね、母文化の内在化を尋ねる意味で、韓国人だと思う時(⑩)を尋ねた。ホスト文化への同化的な受容は、韓国への異文化感(②)で尋ねた。海外の移民研究で注目されてきた心理的な要因以外に、語学や愛国心などのエスニシティに関わる基本的な要因と、在日コリアン研究でしばしば取り上げられてきた、帰化(⑦)や名前(⑬)という外的な手がかりについても尋ねた。例えば、「母国に対する愛着と帰化願望は母文化アイデンティティの重要な構成要素である」(林, 2001), 「在日外国人のエスニック・アイデンティティを理解するにあたり、名のりへの注目が取り上げられている」(竹尾・矢吹, 2006)といった指摘がある。

<周囲との関係> 対人関係面では、親友(⑭)と人との付き合い方(①), 環境面では、日本イメージ(⑧)と二文化間ストレス(③)を尋ねた。

## 2.5. 分析

二文化環境への態度に関して、インフォーマントがアイデンティティに関する4つのどれを選択したかに注目し、続いて語りの内容がそれとどのように対応するかを整理した。

## 第3節 結果と考察

### 3.1. 韓国人か日本人の一方を選んだ人

今回は、日本人を選んだ人はいなかった。韓国人を選んだのは、Jさん、Kさんの二名で、表2-1にその語りを要約して示した。

表 2-1

韓国人を選んだ人の語り (J さん, K さん)

	尋ねた事柄	Jさん (60代, 女性)	Kさん (60代, 女性)
アイデンティティ項目	自称カテゴリ: 統合人・日本人 韓国人・自由人	韓国人, 前は同化 今は韓国人として 宗教の影響で自由人もある	韓国人として
個人内項目	使用名	—	—
	母文化継承	—	—
	愛国心	対日本; 共存, 韓国; あり	—
	日本的なところ	日本人とは日本食に同胞とは 韓国食に, つまり皆と合わず・ 気づかうところ	揉め事があっても, まあ, よし とする
	韓国文化の異質感	—	—
	帰化	いいえ, 娘が日本人と結婚して 帰化した, 親として後悔する, なにか雰囲気がぎくしゃくする	いいえ
	家庭教育	韓国人として, 「韓国人だから 恥ずかしいと思うことない」	—
	韓国人 としての実感	食べ物	韓国語, 韓国教会
	家で韓国語	お母さんは使った	—
関係性項目	親友, 深話し	より深話をするのは同胞	—
	日本に対する イメージ	根性がわるい	日本人はつめたい
	対人態度の切り替え	—	ない
	二文化へのストレス	—	—

Jさんは、かつては日本人の中で生きてきて、韓国人でいる必要性を感じなかった、同化だったという。しかし今、韓国人を選ぶ理由として、友人が韓国人として生きているのを見て、自分も韓国人として生きることにしたこと、子育てが終わったことを挙げた。以前は、韓国人のカテゴリに違和感があったが、しかし、自分の気持ちが変わったから、人を見る目が変わったし、韓国人に対する見方も変わったと述べた。そして世界平和を大事にする宗教の影響で、自由人も、自分の生き方の中に含まれている、という。日本人とは日本食、同胞とは韓国食を共にしており、一緒にいる人にあわせるという。子供が日本人と結婚して帰化したがるが、親として後悔する部分もある、雰囲気がギクシャクするから、と述べている。

Kさんは、(韓国人か日本人かという)相手によって付き合い方を変えるのは、自分を殺すことで疲れるでしょう、と言いつつ、揉め事があつたらまあよしとする、と述べており、日本的な付き合い方をしていることが伺える。面白いことに、この2名は韓国人アイデンティティ選択なのに、語りには相手によって行動パターンを合わせるスイッチングを示唆する語りがあることである。例えば、以下のような語りがあげられる。「日本人とは日本食、同胞とは韓国食に」、「揉め事があつたらまあよしとする」。

この二名に共通し、かつ他のインフォーマントに見られなかった語りは、日本への否定的イメージと同胞への強い心理的つながりである。日本のイメージは、「根性がわるい」(Jさん)、「冷たい」(Kさん)と述べている。また、「深い話ができるのは同胞」(Jさん)、「同胞は将来のことを共に心配してくれる」(Kさん)という語りもある。

教育・文化人類学者の原尻(1989)は、「民族的アイデンティティを感情として捉え、その感情が自己規定の本質的部分になっている」(pp, 11-12)との見解を述べている。これは心理学的な実証はまだ得ていない仮説といえるが、ホスト環境への否定的イメージと同胞への信頼や愛着が、韓国人としての自己定義を強める可能性を指摘しているといえよう。

社会学者の福岡(1993)は、以下のように述べている。日本社会の差別と偏見から、在日コリアンは自分へのマイナスイメージを持たされるが、日本社会の差別にこそ問題があると気付けば、誇りをもって生きていこうと、母文化のアイデンティティを形成していくという。これも仮説ではあるが、差別への認識が母文化のアイデンティティを促すという解釈で、原尻と共通する見方といえる。

彼らの仮説が支持されるならば、日本イメージの悪化と同胞への愛情が共にあるとき、韓国人カテゴリの自称は促されるかもしれない。出身国の文化的アイデンティティを排他的に保持することの心理的機能は十分解明されてはいないが、否定的環境の中で、母文化のアイデンティティが自尊心保持などの何らかのポジティブな機能を持つことは予想できる。

心理学者の川瀬・相良(2009)は、質問紙調査の結果、ニューカマーの韓国人の母親において、日本人が好きという感情があると、日本における異文化ストレスが低いことを示した。評価項目は、一時滞在者が頻繁に出会う困難から組み立てられており、「外国人であることで特別視される」「日本人と親しい人間関係を作ることが難しい」などの項目が使われている。

日本人が好きだと日本への親和性が高く、情動的側面での適応が達成できているとの結論を述べている。在日コリアンの二世や三世にこの知見が当てはまるかは未詳だが、ホストの人や文化への感情的評価が、メンタルヘルスにかかわりを持ってくる可能性は考えられるだろう。

今回、日本のイメージとして、「日本は閉ざされた国・閉鎖的」(Bさん)、「違うものを受け入れない」(Fさん)、「はっきりしない・めめしい」(Cさん)、「全体主義」(Dさん)、「冷たい」(Kさん)、「根性が悪い」(Jさん)が語られており、この6人においては、排他的な対応が認知されているといえるだろう。しかし、彼らが韓国人としての実感を持つときは、食べものか外国人登録証など、概ね外的な手がかりを通してである。ホストとの滑らかな対人関係や、二文化ストレスの弱さといった心理的な状態からは、内的にはホスト文化への受容が進んでいることが伺える。

文化受容の進行と、日本に否定的イメージを持つことや日本人カテゴリーの自称が選択されないことが、同時に見られることは、文化の受容と文化的カテゴリーの自称との心理的意味の違いを反映しているよう。Berry(2006)は、母文化アイデンティティが安全に守られる環境であればホスト文化も受け入れやすいが、母文化アイデンティティが脅かされると、ホスト文化のアイデンティティも拒絶する傾向があると述べて、多文化社会において自文化が保証されることの意味を強調している。自文化を安心して保持できるかどうかは、ホスト文化のアイデンティティの認知に影響を与える要因となる可能性がある。この見方をするなら、仮に在日コリアンが韓国アイデンティティが守られていないと感じた場合には、日本のアイデンティティをとることを潔しとしない傾向が生じるかもしれない。

Gong(2007)はバイカルチュラル・アイデンティティに関する研究を展望している。そこでは、エスニック・アイデンティティとナショナル・アイデンティティの関係を調べると、正の関係、負の関係、関係が見られない場合に分れるという。そしてホスト社会から受け入れられていないという感情を持つ場合、この二者は負の相関を持つと述べている。ホスト社会の対応に関する認知は、両アイデンティティ間の関係に影響するものといえるだろう。

### 3.2. 日本人と韓国人の両方を選んだ人

統合人を選んだのは、Eさん、Fさん、Gさんであった。Hさんは日本人か韓国人か場合によって違う、と述べた。

表 2-2, 2-3 に彼らの語りを要約して示す。



表 2-2

日本人と韓国人の両方を選んだ人の語り (Eさん・Fさん)

尋ねた事柄		Eさん (30代, 女性)	Fさん (30代, 女性)
アイデンティティ項目	自称カテゴリ: 統合人・日本人 韓国人・自由人	統合人	気持ちとしては自由人であり たいが、実際は統合人
個人内項目	使用名	本名だけ	通名
	母文化継承	したい	ー
	愛国心	対日本; 別にない, 対韓国; スポーツ応援	どっちにもない
	日本的なところ	自分が日本人だと思った ことない	ー
	韓国文化の異質感	ー	二文化は困難より 両方あっていい
	帰化	いいえ	いいえ, 帰化しても血は 変わらない
	家庭教育	最初から韓国人として	日本人は本音を言わないと親が言った
	韓国人としての実感	食べ物	食べ物, 刺身のソースが韓国スタイル
	家で韓国語	使う	使わない
関係性項目	親友, 深話し	ほとんど, 日本人	同胞友達いない, 同胞だと必ずしも信頼できるわけではなく, かえってショックが大きいかもしれない
	日本に対するイメージ	ー	違うものを受け入れない
	対人態度の切り替え	ない	ない, 日本人の信頼する友達にはすべてを言う
	二文化へのストレス	ー	ある, コリアンタイム

表 2-3

日本人と韓国人の両方を選んだ人の語り（Gさん・Hさん）

尋ねた事柄		Gさん（60代，女性）	Hさん（40代，男性）
アイデンティティ項目	自称カテゴリ： 統合人・日本人 韓国人・自由人	統合人	その場によって違う，生活パターンは日本的・日本文化，血は韓国，例えばスポーツは韓国
個人内項目	使用名	通名	本名
	母文化継承	—	韓国文化でもなく日本文化でもなく，韓国的な部分が薄れていく，ミックスしていくから
	愛国心	韓国に対する愛国心がもっと強い	一緒ぐらい
	日本的なところ	—	—
	韓国文化の異質感	ない	—
	帰化	いいえ	いいえ，しかし帰化したほうが自然かな
	家庭教育	自然のまま，韓国人としての教育にこだわっていない	—
	韓国人としての実感	—	愛国歌を聞くととき，ぐっとする
	家で韓国語	使わない	使わない
関係性項目	親友，深話し	使い分けしていない	同胞友達いない，日本人がほとんど
	日本に対するイメージ	特にない	常識的，まじめ
	対人態度の切り替え	ない，人によって感情表現のありかたが自然に変わってくるかな，多分自分の中に自然に使い分けしているかもしれない	—
	二文化へのストレス	ない	ある，日本人は控えめな言い方，韓国人はストレートな言い方

Eさんの語りを見ると、本名（韓国名）だけを使う、「あなたは韓国人だよ」など強く親から言われてきた、自分が日本人だと思っただけではない、と述べており、総じて韓国意識が強い。

Fさんは、通名（日本名）を使い、二つの文化があることは困難というより両方あっているものと思う、と述べており、両文化を共に肯定する姿勢が強い。

Gさんは、日本名を使い、相手によって自然に使い分けをしているかもしれないと振り返る。いわば、対人態度について、おのずと二文化のスイッチングを行っている状態と推察される。家庭教育については、自分は子供に韓国人としての家庭教育をすることにこだわっていない、自然のままと語っており、韓国文化の継承をさほど強調しない様子が伺える。

その場によって違う、と答えたHさんには、アイデンティティのスイッチングを見てとることができる。アイデンティティの選択に際して、「その場によって違う、生活パターンは日本的・日本文化、血は韓国、例えば、スポーツ応援は韓国」と述べている。母文化を引き継ぎたいと思うかと問われた時には、「(自分の中では) 韓国的な部分が薄れていく。韓国文化でもなく日本文化でもなく、ミックスしていくから」と語った。すなわち、韓国的な部分と日本的な部分が自身に混在している認識を持ち、場面ごとに振舞い方を選択している。この意味で、二文化間でのスイッチングが存在していると解釈できる。上記の「韓国人」選択者とこの「統合人」選択者に共通的にスイッチングを示唆する文化行動の使い分けのパターンが見出された。エスニックアイデンティティを保っている人は、日常生活における文化行動においてもエスニックを保ちたいため、つまり、二文化を共存させる方略としてスイッチングが用いられているかもしれない。

Gong (2007) は、Phinney and Devic-Navarro(1997) の「混合型二文化人 (the blended biculturals)」と「二者択一型二文化人 (the alternative biculturals)」という概念、すなわち二文化のアイデンティティ間に衝突がなく統合しているタイプと、二文化アイデンティティを分離して切り替えるタイプという二概念を紹介している。今回の知見を当てはめるなら、スイッチングが滑らかなら前者、切り替えに違和感や乖離感が強ければ後者と判断できるだろう。Gさんは、使い分けに伴う自然な感じを述べ、Hさんは、二文化へ依存を肯定的に捉えていることから、二人とも前者に近いのではないかと推測される。

社会学者の福岡(1993)は、在日韓国人の若者 150 人あまりにライフヒストリーの聞き取り調査を行い、以下の印象を述べた。「彼らは日本人の世界にも同胞の世界にも無理なく適応している。二つの自己を意識的に“使い分けしているのではなく、その場の雰囲気ですっと適応している感じ”だという。こうした印象が、自然さを伴う使い分けが成立していることからみるとみるなら、この若者たちのスイッチングもまた、今回のGさんやHさんと同様に、上記の「混合型二文化人」を示唆するものだろう。

### 3.3. 脱文化的な選択をした人

両文化を統合したり、いずれか片方を選択するのではなく、いずれにも当てはまらないという答え方をした人が4人いた。表2-4、2-5に彼らの語りを要約して示す。

表2-4

脱文化的な選択をした人の語り (Aさん・Bさん)

尋ねた事柄		Aさん(20代・女性)	Bさん(20代・男性)
アイデンティティ項目	自称カテゴリ: 統合人・日本人 韓国人・自由人	自由人	自由人
個人内項目	使用名	本名	高校までは通名, 今は本名 自分の本当の名前だから
	母文化継承	特に, なぜなら自由人だから	したい
	愛国心	全くない, 例えば竹島一ただの島だろう, 地球のものだろう	5対5
	日本的なところ	性格, 価値観	ファッション, 韓国旅行を 海外旅行として捉える
	韓国文化の異質感	ない	言われたら意識する
	帰化	いいえ	いいえ
	家庭教育	最初から韓国人として	韓国人としての教育だった, しかし3世ぐ らいになると韓国人・日本人として ではなく, 人間としての生き方
	韓国人としての実感	外国人登録証	外国人登録証, 親の顔を 見るとき
	家で韓国語	使う	使う
関係性項目	親友, 深話し	主に, 日本人	どっちともする
	日本に対するイメージ	時間厳守	閉鎖的, 時間厳守
	対人態度の切り替え	ない, 国籍ではなく人間として	ない
	二文化へのストレス	ない	ない

表 2-5

脱文化的な選択をした人の語り (Cさん・Dさん)

	尋ねた事柄	Cさん (30代・男性)	Dさん (40代・男性)
アイデンティティ項目	自称カテゴリ: 統合人・日本人 韓国人・自由人	自由人	おれ人, 在日はノーアイデンティティが多い
個人内項目	使用名	日本名をもっていない	学生の時までは通名で, 今は本名
	母文化継承	実際, 教えている	教えている
	愛国心	どちらの国も好きだし 嫌いでもある	5対5
	日本人的などころ	自分は自分, 国籍は二の次	日本語しかできない, 日本に住んでいる, 韓国旅行を海外旅行 として捉える
	韓国文化の異質感	ない	ある, 特に食べ物, しかし 困難より楽しい
	帰化	いいえ	いいえ, しかし帰化して当たり前だと思う
	家庭教育	韓国人として	韓国人として
	韓国人としての実感	韓国に行ったとき	DNA, 顔, スポーツ応援 親のことを思い出すとき,
	家で韓国語	使う	使う
関係性項目	親友, 深話し	どっちともする	国籍関係なく どっちともする
	日本に対するイメージ	あいまい, めめしい, はっきりしない	全体主義
	対人態度の切り替え	ない	ない
	二文化へのストレス	悩んだことあり	ない

「自由人」を選択したのは、Aさん、Bさん、Cさんであった。Dさんは、選択肢にはない「おれ人」と答えた。彼らは日本人や韓国人の片方、あるいは両方のアイデンティティを選択することをしていない点で共通している。

この4人の語りには、共通して脱カテゴリー的な表現がみられる。Aさんは「特に、母文化を引き継ぎたいと思わない」「竹島、ただの島だろう、地球のものだろう」「国籍ではなく人間として付き合いたい」と述べている。Bさんは「人間としての生きかた」、Cさんは「自分は自分・国籍は二の次」、Dさんは自分を称して「おれ人」「ノーアイデンティティ」という表現を用いている。

この4人以外に、脱カテゴリー的な語りがわずかに見つかる人は、JさんとIさんだが、最初に他のカテゴリーを選んだうえで、付加的に自由人に言及したに過ぎない。Jさんはまず韓国人を自称したが、自由人の部分もあると述べた。これは一部自由人的な韓国人、という自己定義とみなせる。日本人・韓国人・統合人のカテゴリーの選択と、自由人の選択が両立するのか、これらが独立の概念なのかは、今後検討していく必要がある。

Iさんは、アイデンティティの選択を問われて、無回答であった。そして韓国にも日本にも弱い意識しかないのかと尋ねたところ、そうだと答えた。積極的に自由人を自称するケースではなく、二文化アイデンティティの弱さで定義される Berry ら (1989) のいう意味での周辺化と解釈できるかもしれない。ただし Berry は文化的アイデンティティの弱さは測定したものの、自由人という発想や主張の有無は測定しておらず、彼の測定した周辺化に自由人が含まれたのかどうかは、厳密には判定できない。

自由人を自称した3人と、おれ人を語った1人に共通していて、かつ他の7人にはみられない特徴は、「本名を使う、韓国人として家庭教育を受けた、家で韓国語を使う」の3点が揃っていることである。この4人は、韓国文化により濃く触れながら育つ環境にいたといえる。先に見た、韓国人を選んだ2人(Jさん、Kさん)には、この三点は揃っていない。この4人は、社会環境には日本文化が満ちていながら、家庭環境には韓国文化が満ちている環境に育ち、他のインフォーマントに比べると両環境の乖離が比較的大きいと予想される。仮にそれが心理的葛藤をもたらすのなら、その解消手段として脱カテゴリー的な「自由人」の志向が促される可能性を、考えられるかもしれない。

この解釈を支える見方は、教育社会学者の金(1999)の報告に見られる。ある在日韓国人の語りとして、「在日朝鮮人としての自分」ではなく「個人としての自分」を求めていること、そして外部からの期待や要求に応えるものとしての「在日朝鮮人」ではなく、もっと自発的で気持ちの中から沸き起こってくる「こうありたい在日像」を求めている、という事例が紹介されている。田中(2003)の心理学領域の展望論文では、三世に進めば脱文化が進み、民族的な区分にはより執着しなくなり、個人化の傾向がみられるようになる、とまとめられている。この見方に即せば、心理的にも、世代進行に伴って集団のアイデンティティよりも個人のアイデンティティに比重を置く自己認知が生じていくことは、そう不思議なことではな

いだろう。

上記のような解釈が可能だとするなら、自由人やおれ人を自称したインフォーマントにおいては、強い集団のアイデンティティによって自分を表現する環境にあっても、個人のアイデンティティに注目したいとの動機付けが、脱カテゴリー的な自称を促した可能性を考えることができる。さらに、自由人を選択した3人とおれ人と称した1人は、大きく分ければ二種類に分かれるように思われる。ひとつは“普遍型の自由人”とでもいうべき概念を示唆している。Bさんは、(自分には)韓国人としての家庭教育が行われたけれど、三世ともなれば韓国人としてとか、日本人としてではなく、人間としての生きかた(が、主になるでしょう)、と語っている。またAさんは、母文化を引き継ぎたいと思うかとの問いに、特にしたくはない、自由人だから、と答えた。愛国心を問われた際には、両国ともにまったくない、例えば竹島はただの島だろう、地球のものだろう、と答えている。「人間」「地球」など、韓国や日本を越えた上位カテゴリを用いたのは、この二名のみである。

もうひとつは、“個人型の自由人”とでもいうべき概念を示唆するものである。Cさんは、自分の中で日本人みたいなところはどこかと聞かれたとき、「自分は自分、国籍は二の次」と答えた。Dさんは、自分のアイデンティティの状況を一言で表現すると、という質問に、提示された4つの選択肢を用いず、「おれ人」と答えた。「自分」「おれ」という一人称視点の答え方は、この二名のみである。

二つの型の自由人は、社会的カテゴリにいささか距離をとったところでの、個人としての生きかたを、別の角度から主張しているように思われる。かもしれない。

Berry & Sabatier(2010)は、フランスとカナダに在住する二世移民への質問紙調査で、ホスト集団から認識される被差別感の程度を、集団レベルと個人レベルに分けて比較している。個人レベルで認識される被差別感には有意差が見られなかったが、集団レベルで認識される被差別感には、フランスの方がカナダより有意に高かった。すなわち、主観的な認知をみると、集団レベルでは差別があっても、個人レベルでは差別があるとは限らないことになる。一見矛盾する結果に見えるが、視点の個人化は、心理的にみれば、差別的な視線から距離を置く認知的な機制なのかもしれない。

### 3.4. 無回答の人

Iさんは、提示した4つの選択肢に該当するものがないと答えた。語りを表2-6に要約して示した。

表 2-6

無回答であった人の語り (Iさん)

	尋ねた事柄	Iさん (20代, 女性)
アイデンティティ項目	自称カテゴリ: 統合人・日本人 韓国人・自由人	無回答
個人内項目	使用名	通名
	母文化継承	—
	愛国心	どっちにもない
	日本的なところ	—
	韓国文化の異質感	—
	帰化	昔はしたいと思った, 同胞と関わってから, 別にしなくてもいいと思うようになった
	家庭教育	—
	韓国人としての実感	韓国人はきつい 自分の性格もきついところ
	家で韓国語	使わない
関係性項目	親友, 深話し	日本人
	日本に対するイメージ	—
	対人態度の切り替え	ない
	二文化へのストレス	ない

Iさんは、前は帰化したいと思ったが、同胞と関わってからは別にしなくてもいいと思うようになった、と述べている。韓国人を選んだ先のJさんも、同胞とのかかわりから同化を脱した、と述べた点では似ているが、その後のIさんの選択は、Jさんとは対照的である。韓国人志向は強くなるのではなく、弱まっており、結果的に両国のカテゴリとも希薄化している。

Iさんは、自分の中の「韓国人だと思うところ」を聞かれたときには、自分の性格のきつさ



という心理的特性を挙げた。だが、こうした認知があっても、韓国人は自称されていない。アイデンティティを選ぶことは、「らしさ」を認めることとは異なる、独特の意味を付与する心理的な選択なのかもしれない。

Wiley, Perkins, & Deaux (2008)は、二世の在米移民者に質問紙調査を行って、ホストが自分たちのグループをどう評価しているか尋ねた。すると二世は、一世よりも否定的な評価をしており、しかも肯定的な集団イメージを保つために、そのホストからの評価を無視する傾向があったという。これを当てはめれば、在日コリアン二世・三世が、自分たちの集団への、ホスト社会からの否定的な評価を無視する意味で、「自由人」や「無回答」を選択する機制も考えられるかもしれない。だが評価の無視とアイデンティティの無視が同一視できるかは未詳であるうえ、他のカテゴリの選択者が、ホスト評価をどう捉えているかも、今回の反応からはわからない。

自由人の4人は、「韓国名のみ」「家では韓国語を使用」「韓国人としての家庭教育」と答えていたが、Iさんは「通名だけを使う、韓国名を使うことはない」「家で韓国語を使わない」と述べており、この点では家庭での韓国文化はそう強くはないと解される。なおIさんは、日本人だと思ふところを問われたときも、無回答であった。

Iさんにおいては、日本に帰化する動機付けは低い。そして韓国人らしさは認識されているものの、強く韓国文化を保持しているともいえず、積極的に韓国人カテゴリを採択するような志向性もみられない。「自由人」のカテゴリをみて「これとは違う」と否定しており、脱カテゴリを積極的に志向しているとは見なせない。これらのことから、両文化の意識が希薄で、二文化に関わるカテゴリに多くの注意を向けていないという意味において、自由人のサブカテゴリとして、「消極派の自由人」と仮称しておき、上記の自由人選択者グループ(4名)を「積極派の自由人」と区別しておくのが妥当のように思われる。前述のように、無回答の人は二文化アイデンティティの希薄という意味合いから、Berryら(1989)のいう周辺化と解釈できるかもしれない。

### 3.5. 「自由人」は何か

Berryら(1989)は、周辺化の実態を解明しきれてはいなかったが、しかし今回、従来の「周辺化」の意味合いである二文化カテゴリ希薄を含め、二文化カテゴリからの脱却を意図する定義から「自由人」というカテゴリを組み込んだ。アイデンティティ選択グループごとに語りの内容をまとめた結果、「自由人」は二つの下位分類に分けることができると考えた。「積極派」と「消極派」である。「積極派」自由人は、自由人選択者グループの4名において、二文化カテゴリ希薄であり脱却を示唆する代替カテゴリの主張があった。さらにこれは個人型の自由人と普遍型の自由人という二つのサブカテゴリを持つことが示唆された。こうした分類が、Berryら(1989)が対象としたカナダの移民にはなく、在日韓国人にのみ見られるのだとしたら、それが何によるものなのか、異なる心理機制を想定する必要があるのかどうかを、

見極めていく必要があるだろう。「消極派」自由人は、アイデンティティの選択において無回答の人1名において、二文化カテゴリへの興味はあまりなく、特に脱却を示唆する代替カテゴリの標榜がない人や志向を指す。

自由人の概念がどのようにして発生したのかについては、以下のような推測ができよう。Viruell-Fuentes(2007)は、在米メキシコ系移民を対象にインタビュー調査を行い、「親は家で母国語しかしゃべらず、私は非常にストレスだった」、「(私は白人でも黒人でもなく)どこに当てはまるのだろうか?」という語りを得ている。彼らは二文化の狭間で葛藤していることがわかる。

在日コリアンの一世は、母国で民族文化を内在化させた後に移動しており、ホスト文化への同化につとめたと考えられる。しかし二世・三世は、民族文化を保持しようとする親のいる家庭に育ち、家庭と社会の文化的環境のずれを抱えながら、いわば二重の社会化を課される。二文化のアイデンティティを持つことが心理的葛藤につながるのだとしたら、それを解消する方法として、脱カテゴリ的に「自由人」を選んだり、「おれ人」を語るのかもしれない。ある20代の在日コリアンの語りの「日本で生まれたのに日本人ではなくて、韓国に行っても純粋な韓国人ではなく、すごくコンフューズする感じで、ややこしい」というのが、葛藤の感覚を示している(在日本大韓民国青年会, 2010)。本研究における葛藤を示唆する語りとして以下のようなものがある。二文化の狭間にいるストレス(Cさん, Fさん, Hさん)、日本の社会や文化への否定的イメージ(Bさん, Cさん, Dさん, Fさん)、否定的感情(Jさん, Kさん)の語りがみられている。なお、これらの語りは特定のアイデンティティの人に見られたのではなく、アイデンティティの選択とは関連なく見られた現象である。

### 3.6. 周囲との関係

周囲との関係を、環境や対人関係について尋ねた項目①, ③, ⑧, ⑭への反応について、全インフォーマントを眺めて整理してみたい。今回の語りを見た限りでは、総じて対人関係面では、今回の11名のインフォーマントには、不適応と呼べるほどの不協和音はみられなかった。社会学者の福岡(1993)は、在日韓国人二世・三世は生まれ育つ中で自然に日本文化を身に付け、空気を吸うように日本文化を内面化していくという見解を述べている。インフォーマントに見られるホストとの調和的な関係は、文化受容を反映しているものかもしれない。

## 第4節 まとめ

本研究の目的は、①自由人の概念構成を探ることと、②アイデンティティ選択と語りの対応を確かめながら、アイデンティティによって二文化環境への態度がどう特徴づけられるのかを検討する。そして、自由人概念とアイデンティティ選択と語りの関わりから、日本における在日コリアンの文化変容態度を捉えていくための視座を見出すことである。探索の結果、在日コリアンにおける文化変容態度への示唆として以下の三つが考えられる。一つ目は、自

由人に下位分類ができたこと、二つ目は韓国人アイデンティティ選択者と統合人選択者にスイッチングの現象が示唆されたこと、三つ目はアイデンティティの選択とは独立に二文化の狭間におかれている心理的葛藤の現象である。以下にこれら三つの現象を順に述べる。

まず、二次元文化変容モデルでは説明できない現象として捉えた「自由人」は、「積極派自由人」と「消極派自由人」の2つの下位分類ができた。「積極派自由人」は、自由人選択者及びおれ人自称者において、二文化カテゴリ希薄のみでなく代替カテゴリの主張もあった。「消極派自由人」は、アイデンティティ選択において、無回答の人1名が該当した。単に両カテゴリ意識の希薄さのみで、代替カテゴリを標榜するのではない意味合いから解釈された。

次に、アイデンティティ選択と語りの対応をみた結果、主観的なアイデンティティの選択やアイデンティティに関する語りと、二文化への関わり方は、必ずしもBerryらモデルで想定する、例えば韓国文化を色濃く保持する者が韓国人アイデンティティを選択するといったような、単純な一致を示さなかった。例えば、Jさんは、韓国人を自称しているが、日韓の文化行動の規範を行き来するスイッチングの語りがあった。Dさんは、「在日韓国人はノーアイデンティティ（の人）が多い、つまりそれは日本人に近い」「日本で暮らしながら韓国の儒教的な思想を持つとすれば、うまくいかないだろう」と語っている。しかし日本人は選ばず、おれ人を自称している。

我々は、アイデンティティ選択と語りの不一致から、受け入れ社会の特徴と関連する在日コリアンにおける文化変容態度の示唆的知見として葛藤とスイッチングを捉える。

アイデンティティの選択と語りのずれが生じた背景について、受け入れ社会との関連から推測してみる。一つ目に、受け入れ社会の同化主義傾向があるため（李，2011）、その反動として、日本人アイデンティティ選択者は一人もいなかったのではないと思われる。二つ目に、韓国人アイデンティティ選択者と統合人選択者に、「韓国人との方が直情的に感情表現をする」「感情表現の仕方が自然に変わってくるかな・・・」などスイッチングを示唆する語りが見られた。これは、二者択一を求める日本社会の影響を受けた環境下での、二文化を共存させる方略として用いられているかもしれない。さらに、スイッチングは、西洋における二次元文化変容モデルと対応すると、二次元の静止的な分類に当てはまらない現象の一例といえよう。三つ目に、特定のアイデンティティ選択者に限ったことではなく、アイデンティティ選択とは独立に葛藤を示唆する語りが見られた。これは、同質性を大事にする日本社会における（安達，2008）、純粋な日本人ではなく「在日コリアン」カテゴリを持つことから、異質な存在として見られ（金，2011）、葛藤を抱える可能性があると思われる。

以上の自由人概念とアイデンティティ選択と語りの不一致から、受け入れ社会の特徴を反映した在日コリアンにおける文化変容態度の示唆的特徴として、「自由人」、「葛藤」及び「スイッチング」を捉え、今後の研究に用いて実証化を行なう。

表 2-7

調査協力者一覧

調査協力者	年齢	性別	結婚の有無	世代
A	20代	女	未婚	2世
B	20代	男	未婚	3世
C	30代	男	同胞と結婚	3世
D	40代	男	日本人と結婚	3世
E	30代	女	同胞と結婚	3世
F	30代	女	未婚	3世
G	60代	女	同胞と結婚	2世
H	40代	男	韓国人と結婚し、 今は離婚	3世
I	20代	女	未婚	3世
J	60代	女	同胞と結婚	3世
K	60代	女	離婚	2世

### 第3章

## 在日コリアンにおける二次元文化変容モデルと自由人，葛藤，スイッチングとの関連

### 第1節 研究の背景と目的

#### 1.1. 西洋における二次元文化変容態度の概略

西洋では、心理学領域から捉えた移民の文化変容に関する研究が蓄積されている。文化変容態度で広く知られているのが Berry ら (1989) のエスニックとホスト、両方への態度から捉える二次元文化モデルである。Berry らは2次元を2 issues で捉えているが、その後の研究では (Ward ら, 1994) 2 fundamental 次元で捉える研究も多い。とにかく、これらの二次元の独立性が想定だったが、たくさんの研究がこれを支持している (Ward ら, 1994; Jang ら, 2007)。さらに文化変容の2次元を別々の概念で捉える手法は、各次元の中央値により、対象者を4つ group わけ、4 類型文化変容態度 (AIMS) として (Ward ら, 1999; Ting-Toomey, 2000)、幅広く応用、測定されている。4 類型の詳細については、Berry (1987) は、「分離」は、エスニックの伝統保持を好み、同時にホスト文化の規範・価値観をあまり重要視しない、とされる。「統合」(Bicultural) は、エスニックの伝統保持を好み、同時にホストの社会習慣も必須として受け入れる、とされる。「同化」は、エスニックの規範や価値観をあまり大事にせず、同時に自分たちをホスト社会のメンバーとしてみる、とされる。「周辺化」は、エスニック集団とも Larger society とも交流を失い疎外感を感じる、とされている。

しかし、Chirkov (2009) は、現在の文化変容の発想による接近では、今日の移民の複雑な現象を説明するのに不十分と述べている。Bhatia ら (2009) は transnational migration and global movement の点から、心理学における文化変容の固定的な traditional 概念は再考される必要があると指摘している。Bhatia ら (2001) は、文化変容プロセスにおいて、受け入れ社会の sociocultural and historical contexts の中で彼らの migrant identity を論じることを提案している。つまり、西洋の標準的な二次元モデルは多文化志向であるカナダに移住してそこに定着していく過程を見つめる中で、生まれてきたものである。しかし、今日では各地で多様な移動がみられ、そして受け入れ側の社会状況も様々で、カナダのような多文化社会とは限らない。中には一所に定着せず、広範囲に移動したり、頻繁に移動したりすることもある。しかし、今日の各地における、多様なタイプの移動を考えたら、固定的なモデルを脱して、より柔軟な文化変容の概念を考えるべきとの見解に、我々は賛成である。単一文化社会の環境、例えば日本もその一つだが、そうした社会においてはエスニックとホストの二軸への態度が独立であるのはより難しくなるだろう。従って、文化変容の伝統的な二次元モデルの想定も、問い直す必要が生じると思われる。また二軸以外の新たな態度的特徴が存在する可能性も、考えていく必要があるだろう。

## 1.2. 在日コリアンにおける文化変容態度の実証化

本研究では在日コリアンの文化変容態度を心理学視点から実証する。社会学の情報と我々の探索的な面接調査から得られた知見をもとにして、西洋の心理学領域の移民研究で広く測定されている二次元文化変容モデル(Ward ら, 1994)を在日コリアンに適用する。このモデルに対して批判的見解も指摘されているが、在日コリアンでは文化変容についての心理学的な概念及び尺度が用意されていないため、この領域に関する実態が分からない。従って、その実態を把握するため、このモデルを在日コリアンに適用すると同時に、上記の面接調査から在日コリアンの文化変容態度を示唆する3つの context-specific construct である「自由人」「葛藤」「スイッチング」を組み込んだ検討も加える。具体的に、在日コリアンに4類型文化変容態度を設定したときに、面接から見出された3変数は4類型のどこに関連するのか実証化する。これによって、従来の標準的な文化変容態度における在日コリアンの特異な3変数の位置づけが明確になる。

以下に、在日コリアンにおける文化変容態度への示唆として面接調査から見出された3変数に注目する理由について述べていく。

一つ目に従来の二次元文化変容モデルでは説明できない現象として「自由人」に注目する。自由人には「積極派」と「消極派」がある。積極派自由人は、自由人選択者グループに見られた現象で、二文化カテゴリ希薄のみでなく、脱却カテゴリを積極的に標榜する人ないしはその志向性である。消極派自由人は、アイデンティティの選択において無回答の人に対する解釈した現象で、二文化カテゴリ希薄のみで、脱却カテゴリへの主張はない人あるいはその志向性を指す。

海外にも、文化変容態度の二次元には、収まりきれない態度の指摘はみられる。例えば、Hall (1990) は、固定的な文化変容モデルや移民アイデンティティ形成 (formation) の reframing する示唆として、国籍、空間 (space)、場所 (place) に固定された概念ではないものとしてのアイデンティティ、そして本質的なものではなく位置取りのアイデンティティ (not essence but a positioning) の概念を主張する。つまり文化変容軌道を経験する個人たちを固定的な想定よりもっと柔軟な移住者アイデンティティ (migrant identity) の理解が必要であることを示唆する。西洋の発想との異同を評価するには、日本でみられる“自由人”や“個人”などを標榜する動きを確認した上記の面接調査に続いて、さらにこうした概念を実証的にとらえる研究が必要である。社会学では論説として論じられたり、示唆的な語りを紹介した報告はあるが、心理学的な測定による実証はまだない。

二つ目に、「自由人」の関連要因として葛藤に注目する。上記の面接調査からも社会学の先行研究からも、共通に見られる“日本人でもなく韓国人でもなく”，のような捉え方は葛藤を示唆する。二文化集団の狭間にある心理的葛藤の解消手段として「自由人」の捉え方をすることが考えられよう。

また、在日コリアンにおける葛藤は普遍的で一般的である知見が多く社会学の知見に見

られる。例えば、福岡（1993）はごく普通の在日コリアンなら葛藤を経験するといいい、在日コリアンが、二重方向性を併せ持つことから葛藤が発生すると述べている。「同化された自己」＝日本人と同じでありたい、「異化された自己」＝違う自分でありたいという考えが、一人の人の中でせめぎあうという。福岡（1997）は、聞き取り調査から分類した、「自分は日本人とも言い切れず、かといって韓国人とも言い切れず、そもそもいったい自分は何者なのかというアイデンティティの葛藤を経験している」人たちを、「葛藤型」と命名している。ある20代の在日韓国人のインタビューの内容に以下のような語りがあった。「自分はもちろん日本人ではないし、しかし韓国へ旅行に行った時に“あれ？”という違和感を感じ、やっぱり日本で育った在日韓国人というまた違うカテゴライズされた人種ではないかと感じた」（在日本大韓民国青年会，2010）。以上の葛藤と関連する在日コリアンの先行研究の例から、在日コリアンが、日本に住んで日本に慣れている生活者だが、典型的な「日本人」ではないという存在のあり方が、社会的に認容されにくく、それが彼らの葛藤と関連することを示唆する。

海外で移民の葛藤を直接的に調べた報告は比較的少ないが、移民が2つのアイデンティティを同時に持つことの困難からくる情緒的な葛藤の報告がある。Haritatos and Benet-Martinez（2002）は、二文化人のアイデンティティは、プライドの感じ及びコミュニティの豊かさのな面もあれば、アイデンティティの混乱や価値観の衝突（value clash）も引き起こすという。この混乱や衝突は、葛藤に近い表現といえよう。Benet-Martinez and Haritatos（2005）は、Chinese-Americanを対象に bicultural identity integration の多様性を探求し、perceptions of “conflict”（vs. overlap）と perceptions of “distance”（vs. harmony）、という独立の二因子を見出している。両者は独立的な関係にあると報告している。つまり、結合されたアイデンティティ（combined identity）を持つことと同時に葛藤もあるとのことを示す。この葛藤因子の項目の例として、“I am conflicted between the American and Chinese ways of doing things”，などがあり、情緒的、感情的な特徴として取り上げられている。Yep（1998）は、複数のアイデンティティを持つことについて、Asian latino American の三つのアイデンティティが、常に調和的とか緊張から自由であるとは限らない、と述べている。

上記から考えると、西洋でも日本でも、移民が二文化集団の狭間に置かれている自分の存在、位置づけをめぐる心理的苦痛や葛藤を経験するのは共通する。しかし以下の違いが考えられる。

個人主義が背景にある西洋では（Hofstede, 1991）、個人の心構えによる葛藤であり、個人次第で葛藤を解決できる可能性もある。一方で、集団主義が背景にある日本では（木村, 2009）、ウチとソトを区別する性質があり、そうになると在日コリアンは日本人ではない属性からソトに該当する。ソト（の存在）に対する日本人の認識は必ずしも肯定的ではなく（金, 2011）、従って、彼らにとっての葛藤は固定的な集団カテゴリに由来するかもしれない、個人次第というより環境次第かもしれない。そうになると、個人レベルにおける文化変容態度とも独立的

に葛藤が存在しうる可能性がある。海外では葛藤と文化変容態度の間の直接的関連についての検証は見当たらないが、本研究では日本で確かめておきたい観点の一つとしてとらえ、これを確かめておきたい。

三つ目に、従来の静止的な文化変容態度ではない特徴から、「スイッチング」に注目する。

スイッチングは、韓国人選択者と統合人選択者に見られた現象である。我々は、日本という同化主義的受け入れ社会における、二文化共存の方略としてスイッチングを解釈した。社会学でもこれと似たような報告がある。福岡（1993）の聞き取り調査では、“日本人と付き合う時は日本人だっていうか、同胞と付き合う時はやっぱり韓国人、割り切っちゃってる”。という語りが紹介されている。意識的な「使い分け」というより、「その場の雰囲気ですっと適応している感じ」で、としてスイッチング・メカニズムを発達させていると表現されている。これは相手の持つ文化による、行動のスイッチングといえよう。本研究では、面接の結果と社会学の報告に基づいて、在日コリアンにおける日韓の文化行動を行き来する流動的な文化変容態度としてスイッチングに注目する。

海外にもスイッチングという表現は見られる。

Hong, Morris, Chiu, & Benet-Martinez(2000)は、二文化人 (biculturals) の社会的認知プロセス (socio-cognitive process) における「cultural frame-switching」が存在することを証明した。Hong, Ip, Chiu, Morris, & Menon (2001)は、Chinese-American は中国 アイデンティティが活性化されると (activated), 中国文化の特徴である“義務”の得点が高く, アメリカ・アイデンティティが活性化されると, アメリカ文化の特徴である“権利”の得点が高かった。西洋のこの2例に共通するのは、二文化の間で、社会文化的文脈によって認知が変わることがある, という見方である。

日本の先行研究や我々の面接調査は、相手や場面による対人行動の意識的な選択、いわば適応方略としてのスイッチングが、語りから示唆されたに過ぎない。本研究ではスイッチングに対して実証的な方法で測定を試みる。

### 1.3. 目的

我々は、在日コリアンにおける新たな文化変容態度の特徴として、自由人（積極的自由人・消極自由人）という自己の捉え方、文化行動のスイッチング、普遍的な葛藤に注目している。本研究では、彼らに見られたこれらの三つの context-specific construct の態度的特徴と、標準的な従来の二次元文化変容モデルとの関連を検討する。特に、本研究では、二次元文化変容モデルにおける対象者の特徴を理解するため、二次元文化変容の各尺度得点により中央値で分けて、対象者を4類型に振り分けた4類型文化変容態度と上記の3変数との関連を検討する。なお、研究全体の目的から、ここでは簡易にメンタルヘルスに関する単項目を尋ねる。

我々の事例や関連分野の研究から得た示唆について、実証的に検証してその一般性みる意



図から、質問紙調査を実施する。そして日本のユニークな社会政治的な状況が、彼らの文化変容態度にどう影響するかを考察する。

本研究の仮説について、具体的には、在日コリアンにおいて文化変容態度の4類型を設定した場合、どの類型において、今回注目する3つの特徴が高いかを予想していく。

#### 1.4. 仮説

##### 1.4.1. 「自由人」についての仮説

面接調査に基づき、積極派自由人において両文化への比較的密な関わりを語るものがみられたことから、積極派自由人は「統合」群の所属者に最も高いと予想される。

面接調査に基づき、消極派自由人においては単に二集団への所属意識が希薄であったことから、「周辺化」群の所属者に最も高いと予想される。

##### 1.4.2. 葛藤についての仮説

面接調査から、二文化の狭間にある心理的苦痛は、特定のアイデンティティ選択者で見られた現象ではなかった。社会学では、日本人カテゴリではなく、在日コリアンという社会的所属をする者には、普遍的で宿命的な心理的葛藤があるとされている(福岡, 1993)。そこで葛藤は文化変容態度によらない普遍的なものと考えられることから、葛藤は4類型間において、有意差がみられないと予想される。

##### 1.4.3. スイッチングについての仮説

スイッチングの語りが、アイデンティティの選択が「統合人」と「韓国人」にみられたことから、スイッチングは「分離」群と「統合」群の所属者で、より高いと予想される。

## 第2節 方法

### 2.1. 調査対象者

韓国コミュニティとの関わりを持っている在日コリアン106名(男58, 女45, 不明3名)が、質問紙調査への協力依頼に応じた。依頼方法としては、調査者が西日本のさる韓国団体を訪ねた人やイベントに参加した人に直接調査したものと、知人に直接調査実施を依頼したものが主だが、一部は依頼された調査実施者からさらに他の者に、調査実施の依頼が行われた。回収者による回答の点検は行われておらず、個人の回答の秘密は保守されている。調査は2010年に実施された。参加者は自発的に協力し、無記名で回答した。

回答者の属性は以下の通りである。世代は1世から4世までで、1世は4.7%, 2世39.6%, 3世は44.3%, 4世3.7%である。つまり2, 3世がほぼ84%である。年齢は20歳から83歳までで、平均年齢は44.6歳(SD=16.6)である。国籍は韓国が87名, 日本が14名, その他が1名, 不明が4名となっている。

## 2.2. 質問紙の構成

質問紙調査は日本語で実施された。質問紙の構成としては、文化変容・自由人（積極・消極自由人）・葛藤・スイッチング尺度が含まれており、全て4段階評定である。本調査で用いる以下の尺度項目は、上記の面接調査・海外の心理学的研究・日本の社会学的示唆をもとに、独自に作成した。

### 2.2.1 文化変容

二次元に対して認識される項目を選別してみるため、わざと、Ward and Kennedy(1994)に従い、対項目構成（対エスニック 13 項目，対ホスト 13 項目）で尋ね、測定方式も同様に従った。項目構成は以下に基づいている。Ward ら(1994)の各次元に対する 1 対 1 の項目構成となっている文化変容の尺度，Jang ら(2007)の韓国人移民を対象とした文化変容の尺度，上記の面接調査，在日コリアンに関する社会学の研究で重要視する帰化，愛着，（福岡，1997）などを含めている。具体的には，日常生活における両文化の取り入れ（e.g.，“日本の政治や社会のことをよく知っている”“母国の政治や社会のことをよく知っている”），両文化への態度（e.g.，“韓国の祝日や記念日を祝っている”“日本の祝日や記念日を祝っている”），二集団への接し方や感じ方（e.g.，“自分は日本人と変わらないと感じる”“自分はやはり韓国人だと感じる”）などで構成されている。

### 2.2.2. 自由人

積極派自由人は 8 項目で構成されている。面接調査の語りの中にあつた単語から以下のような 2 つの文章を作成した。「日本人でもなく韓国人でもなく人間として」「自分らしさを大事にする」。社会学で個人を志向する人は，外国への移動を望む，という特徴から（福岡，1993），以下の 4 つの文章を作成した。「一個人」「グローバルな価値を求める」「他の外国に住むことを考えている」「結婚相手は日本人でもなく韓国人でもなく他の外国人でもよい」。同じく社会学から，日本人でもなく韓国人でもなく国際人（辻本ら，1994），地球人（原尻，1989）という単語から 2 つの文章を作成した。「日本人でもなく韓国人でもなく世界に通用する国際人」「日本人でもなく韓国人でもなく地球人」。

消極派自由人は 3 項目で構成されている。社会学の知見，福岡（1993）は個人を志向する人たちの特徴として，日本名か民族名かあまり拘らない，集団同調性が低い，から 2 つの文章を作成した。「通名・本名，どちらでも使えばいいと思う」「日韓の文化，とくに意識せずに暮らしている」。面接の語りにどっちも愛国心ない，という語りから，「日本にも韓国にも別に愛国心感じない」との文章を作成した。

### 2. 2.3. 葛藤

二文化の狭間にある心理的苦痛を測定するため、Benet-Martinez ら(2005)に従い、情緒的な面に焦点を当てた項目と構成した。全部3項目で構成されている。Benet-Martinez ら(2005)から1項目「日本風のやり方と韓国風のやり方の間で迷う」を作成し、面接調査における帰化で悩んでいた語りがあったため「日本人として生きていくべきか韓国人として生きていくべきか分からない」の項目を作成、在日本大韓民国青年会(2010)に乗っている語り「韓国行っても純粋な韓国人でみてくれない」により、「日本にも韓国にも落ち着くところがないと感じる」を作成した。

### 2. 2.4. スイッチング

対人行動における二文化の使い分けに関する11項目で構成されている。面接の「もめごとがあってもまあよしとする」の語りから、2項目を作成、面接における「韓国人のストレートな言い方、日本人のあいまいさ、日本人とは日本食同胞とは韓国食、家では韓国語、状況による名前の使い分け」から5項目、社会学の在日コリアンの儒教、礼儀に関する知見(福岡, 1997)から3項目、日本文化の間接的表現(田中, 1991)から1項目を作成した。質問項目の例として、“同胞と付き合う時は日本人と付き合う時よりもストレートな感情表現をする” “日本人と話す時は同胞と話すときよりもはっきりしない言い方をする” などがある。

### 2. 2.5. メンタルヘルス

研究全体の主題を考慮して、ここでは簡易にメンタルヘルスに関する肯定的側面と否定的側面から、単項目を尋ねた。肯定的側面は、「幸福」について“今、幸せな気分だ”，否定的側面は、「うつ」について，“最近、気分が落ち込んでいる”を測定に用いた。

## 第3節 結果

### 3.1. 「文化変容」の因子分析

バリマックス回転による探索的因子分析を行い、最終的な結果を表 3-1 に提示している。「エスニック志向」は4項目で構成され、信頼性係数はアルファ=0.59であった。「ホスト志向」は5項目で、信頼性係数はアルファ=0.62であった。信頼性は低い、内容的にある程度一貫性が保たれていると判断した。

文化変容尺度の項目選定の具体的なプロセスは以下の通りである。

まず、天井効果や床効果の項目を削除し、その後因子分析に入った。負荷量が低い項目を削除し、さらに文化変容態度4類型を作るためには2因子間の独立的な関係が必要であるた

め (Ward ら 1999 ; Berry ら 2010), 重複する項目を削除した。具体的なのは脚注を参照1。

最終的な因子分析の結果, 2 因子構造だった。しかし, 当初の質問項目は二文化を対称にして設定したが, 結果は非対称であった。「エスニック志向」は“韓国の生祝日を祝う”など生活習慣に関する項目が抽出され, 「ホスト志向」は“自分はほぼ日本人だと思う”などホストカテゴリに関する項目が抽出された。

削除された項目で注目すべきことのみをここで挙げるなら, 「エスニック志向」において天井効果で削除された項目「韓国籍を守り続けるのはいいことだと思う」「自分はやはり韓国人だと思う」など, 主にエスニックのカテゴリに関する項目で, 「ホスト志向」において天井効果で削除された項目は, 「日本の生活習慣になじんで暮らしている」, 「日本語を不自由なく使える」など, 主に, ホストの日常生活に関する項目であった。

最終的な因子分析の結果, 文化変容の両志向性が直交次元 (orthogonal dimension) ( $r=-.050$ ) であるのを確認して, Ward ら(1999)の対象者の分け方に従った。Ward らは 104 名の対象者を対象に, 文化変容の両志向性の尺度得点の the scalar midpoint, the median score で試みて, scalar midpoint では 4 群の比較が難しいと判断して, the median split を用いた。本研究でもこの分け方に倣って, 文化変容の下位尺度であるエスニック志向とホスト志向の両尺度得点の中央値によって, 対象者を 4 群に分けた ( $\chi^2=3, (N=104) = 8.39, p=.039$ )。これに関連する散布図を図 3-1 に提示している。その結果, 高ホスト-低エスニック群を「同化」, 高ホスト-高エスニック群を「統合」, 低ホスト-低エスニック群を「周辺化」,

---

<sup>1</sup> エスニック志向では総 13 項目から 9 個を削除した。天井効果で 6 項目を削除, 床効果で 1 個 (「韓国語が不自由なくできる」) を削除した。そして, 負荷量が低い項目 2 個と, 重複項目 1 個 (同胞の集まりに積極的に参加) を削除した。ホスト志向では総 13 項目から 8 個を削除した。天井効果で 5 項目を削除, そして低い負荷量で 1 個, 重複 1 個 (日本人と付き合う時ありのままの自分) を削除した。

低ホスト-高エスニック群を「分離」とした。同化は 29 名，統合は 34 名，周辺化は 14 名，分離は 27 名となった。4 類型ごとの属性情報は表 3-2 に提示している。

表 3-1  
文化変容の因子分析

	Factor 1	Factor 2
同胞が日本人との結婚, 望ましい	<b>.643</b>	-.068
自分はほぼ日本人	<b>.602</b>	-.105
日本に帰化してもいい	<b>.553</b>	.154
一人で外食時, 韓国食以外の食事がしたい	<b>.379</b>	-.068
日本人との集まりに積極的	<b>.343</b>	-.003
韓国風的生活習慣守っている	-.052	<b>.793</b>
母国の政治や社会のことをよく知っている	-.077	<b>.520</b>
韓国の祝日を祝う	-.121	<b>.442</b>
同胞といるとき, ありのままの自分でいられる	.160	<b>.379</b>
Variance explained	15.5%	14.2%

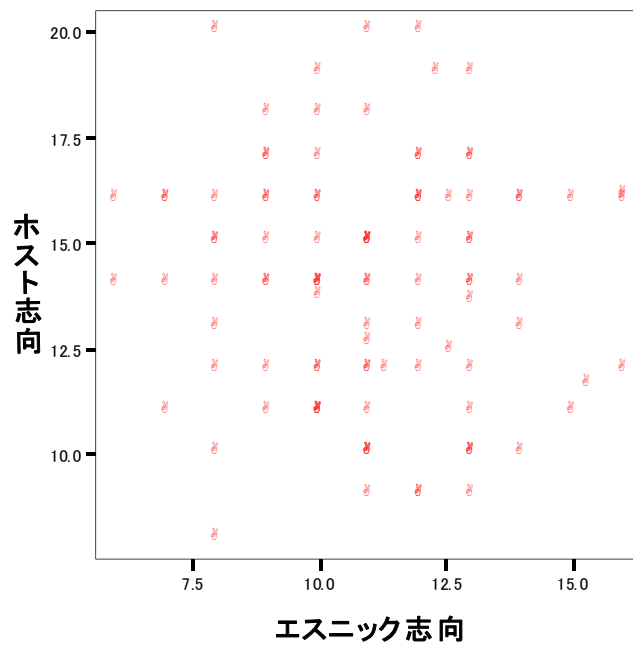


図 3-1 散布図

表 3-2

## 4 類型ごとの属性情報

	Generation ( $n = 96$ )				Gender ( $n = 101$ )		Nationality ( $n = 100$ )		
	First- generation	Second-	Third-	Fourth-	Male	Female	Korea	Japan	Other
同化	1	8	16	2	19	10	21	7	1
統合	2	13	15		14	18	25	7	
周辺化		9	4	1	7	7	14		
分離	2	11	11	1	16	10	25		
Total	5	41	46	4	56	45	85	14	1

## 3.2. 自由人の因子分析

プロマックス回転による探索的因子分析を行った。消極派自由人で想定した項目の 3 個のうち 2 つは負荷量が低く削除され、1 つ「日韓の文化、とくに意識せずに暮らしている」は積極的自由人で想定した項目らと一緒にまとまった。因子分析を繰り返し、最終的に得られた全ての項目の特徴は、韓国か日本を越えてあるいは以外に、自分を捉えたり、価値観を志向することから、「超越志向」と命名した。6 項目で、説明率は 46.7%であった。 $\alpha = 0.76$ であった。概念的定義を挙げるなら、「日本人、韓国人というカテゴリで自らを捉えず、これらに依る捉え方を否定し、他の捉え方をする傾向、ないしはそれを表現する生きかた」である。例えば地球人や個人などを標榜したり、グローバルな価値観を志向することである。操作的定義を経て得られた「超越志向」の項目を、本研究における測定尺度として超越志向を、続く分析に用いた。

表 3-3

## 自由人の因子分析

Items	Factor 1
日本人あるいは韓国人としてよりも人間としての生きかたを大事にする	.769
日本人でもなく韓国人でもなく地球人	.750
韓国人らしさや日本人らしさより自分らしさを大事にする	.706
在日韓国人としての私ではなく、単たる一個人としての私をみてほしい	.680
韓国文化も日本文化も特に意識せずに暮らしている	.628
韓国や日本の価値観を越えてグローバルな価値を求めたい	.540
Variance explained	46.7%

## 3.3. 「葛藤」の因子分析

葛藤は単因子構造で、3項目で、説明率は37.3%であった。 $\alpha = 0.60$ であった。本研究における葛藤の概念的定義は、二文化集団ないしは二文化間の間で心理的に抱え込む苦痛である。

## 3.4. 「スイッチング」の因子分析

スイッチングは、単因子構造で、11項目のうち9項目が抽出され、説明率は52.5%であった。 $\alpha = 0.90$ であった。本研究におけるスイッチングの概念的定義は、相手や状況によって二文化の行動パターンの中から選び出す適応方略である。

表 3-4

## スイッチングの因子分析

Items	F1
日本人といるときは同胞といるときよりも、周りに合わせて行動する	.874
同胞と付き合うときは、日本人と付き合うときよりもストレートな感情表現をする	.828
日本人と接するときは同胞と接するときよりも、遠慮や謙遜をする	.808
日本人といるときは調和を保つため、「まあいいか」と考えて、自分の行動を抑える	.801
同胞と一緒にいるのが、男らしさや女らしさを期待して接する	.777
日本人と話るときは、同胞と話するときよりも、はっきりしない言い方をする	.765
同胞が相手の場合は、韓国の儒教的な考え方を大事にして接する	.565
日本人とは日本食、同胞とは韓国食を食べる	.503
日本人よりも同胞と付き合うのが、礼儀に気をつける	.469
Variance explained	52.5%

### 3.5. 相関分析の結果

本研究で用いる5つの測定尺度と単項目のうつと幸福感の平均, 標準偏差, 相関を表3-5に提示している。超越志向はホスト志向と中ぐらいの正の相関があった。スイッチングはエスニック志向と中ぐらいの正の相関があった。葛藤とスイッチングの間に弱い正の相関があった ( $r=.25$ )。うつと相関があるのは葛藤とスイッチングであった。幸福感と関連がある変数は見られず, うつと幸福感の間には負の相関があった。

表3-5

各変数の記述統計量と相関係数

	<i>M</i>	<i>SD</i>	ホスト	エスニック	超越	葛藤	スイッチング	最近うつ	今幸せ
ホスト志向	2.79	0.55	1.						
エスニック志向	2.74	0.55	-.050	1.					
超越志向	3.05	0.61	.395**	.064	1.				
葛藤	2.06	0.64	.076	.055	.110	1.			
スイッチング	2.33	0.67	-.047	.523**	.027	.249**	1.		
最近うつ	1.90	0.83	-.069	-.023	-.014	.239*	.228*	1.	
今幸せな気分	2.93	0.84	-.003	.120	-.119	-.086	-.071	-.311**	1.

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$



### 3.6. 文化変容態度の4群による「超越志向」「葛藤」「スイッチング」尺度得点の分散分析

本研究で用いられた独立変数は4類型文化変容態度、従属変数は超越志向・葛藤・スイッチングである。文化変容態度の4類型と超越志向・スイッチング・葛藤との関連を検討するため、一要因分散分析を実施し、さらにグループ間比較をするため Tukey post hoc tests を行なった(表3-6)。

#### 3.6.1. 超越志向

積極派自由人と消極派自由人は、前者に想定された項目を中心に超越志向として尺度化されたため、超越志向の得点を用いて、自由人に関して想定された仮説の検証を行った。4類型の間に有意傾向は見られ、具体的に「統合」群が「分離」群より得点が高い有意傾向にあった、 $F(3, 103)=2.67, p=.052$ 。従って、仮説は部分的に支持された。

#### 3.6.2. 葛藤

仮説どおりに、4類型間で葛藤得点の有意差はみられなかった、 $F(3, 100)=0.42, n.s.$ 。

#### 3.6.3. スwitching

4類型の間に有意差が認められた。具体的に、「分離」群が「同化」群よりスイッチングの得点が高かった。従って、仮説は部分的に支持された、 $F(3, 100)=4.36, p<.01$ 。

表3-6

4群における超越志向、葛藤、スイッチング得点の一要因分散分析

	同化 (n = 29)		統合 (n = 34)		周辺化 (n = 14)		分離 (n = 27)		F	多重比較
	M	SD	M	SD	M	SD	M	SD		
超越志向	3.14	0.64	3.18	0.60	2.99	0.43	2.78	0.62	2.67 +	統合 > 分離
葛藤	2.10	0.66	2.08	0.69	1.88	0.62	2.09	0.61	0.42	n.s.
スイッチング	2.10	0.55	2.50	0.68	2.00	0.68	2.54	0.66	4.36 **	分離 > 同化

\*\*  $p < .01$ , +  $p < .10$

## 第4節 考察

### 4.1. 文化変容の尺度構成

当初の質問項目は二文化を対称にして設定したが、結果は非対称であった。つまり、両文化を認識する項目の領域が異なっていることを示唆する。これは、Berryら（1989）がカナダにおける移民に想定した二軸の内容と在日コリアンでは異なる結果となった。つまり、二文化を認識する項目が受け入れ社会によって異なる可能性を示唆する。なお、削除されたエスニック志向のエスニックのカテゴリに関する項目（例、韓国籍を守り続ける）や、ホスト志向においてはホストの生活習慣に関する個目（例、日本の生活習慣になじんで暮らしている）は、調査対象者があまりにも当然だと思うため、総じて高い評価を与えたことから天井効果が出たのであろう。

### 4.2. 超越志向

超越志向について3点に分けて順に考察する。一つ目は、文化変容態度と超越志向の関連について、二つ目は、超越志向の因子の解釈を行う。すなわち、超越志向にまとまった、ミクロ単位の項目（例、個人）とマクロ単位の項目（例、地球人）が示唆する意味について考察する。三つ目に、超越志向と似ている西洋の概念、例えば、transnational migrant identity や cosmopolitan などとの異同について考察する。

#### 4.2.1. 文化変容態度と超越志向について

文化変容の4類型と超越志向の仮説である、「統合」群が最も超越志向の得点が高いだろうということについて、明確には支持されなかった。しかし、二文化とも高く保っている「統合」群の所属者は、エスニック志向が高い「分離」群の所属者より、超越志向が高い傾向はみられた ( $p < .10$ )。超越志向の中には「一個人」「自分」を標榜する者も交じる点からみると、先行研究におけるエスニックとホスト両方の文化を保持できる状態（統合主義）と個人を主張できる状態（個人主義）の特徴が似ている、とする報告と重なる結果といえる (Bourhis & Dayan, 2004)。相関をみると、超越志向はホスト志向と中程度の有意な相関があった。つまり、日本人カテゴリへの同一視は、日本や韓国という集団カテゴリからの解放と関連することを示唆する。ホスト文化への志向性は、なぜ超越志向と結びつくのか。日本人カテゴリへの同一視はエスニック文化（/カテゴリ）への執着を脱することを示唆し、その心理的解放感と超越志向が関連するかもしれない。

#### 4.2.2. 超越志向の因子の解釈

まず、本研究全体を眺めて、操作的定義による「超越志向」になるまでのプロセスや、「超越志向」が在日コリアンに示唆する意味を記す。当初は、日本の先行研究では、社会学者によって“日本人でもなく韓国人でもなく”“個人（金，1999）”，“地球人（辻本ら，1994）”，

コスモポリタン（福岡，1997）などという新たな自分の捉え方が，在日コリアンの新たな「生き方」として指摘されており，我々は研究の始点として注目した。こうした生き方が本当にあるのか，予備調査として探索的面接を行なったところ，両カテゴリへの意識が低い人たちの中に，代わりに標榜するカテゴリを掲げる人（「積極は自由人」と命名）とそうでない人（「消極派自由人」と命名）がいた。今回行った質問紙調査では，上記の二種類を反映した設問を設けたが，「消極派自由人」は統計的に認識されず，積極派自由人を想定した考え方や姿勢から成る因子のみが抽出された。この因子に含まれたすべての項目は，韓国か日本を越えて，自分を捉えたり，価値観を志向することから「超越志向」と命名した。この尺度で測定される超越志向の概念的定義を挙げるなら，「日本人，韓国人というカテゴリで自らを捉えず，これらに依る捉え方を否定し，他の捉え方をする傾向，ないしはそれを表現する生き方」である。

今回の実証研究の結果で興味深いのは，「超越志向」の因子項目で抽出されたマイクロ単位の「個人」とマクロ単位の「地球人」が同じ因子にまとまったことである。マイクロ単位とは，自分を捉えるときに単一固体で捉えること，マクロ単位とは自分を人類全体の単位で捉えることである。これらは，共に日本または韓国という従来注目されてきた集団カテゴリに依らない点で，共通する。すなわちこの2つの単位の自己の捉え方は，標榜するカテゴリが単一固体か人類全体の大集団かという範囲に依らず，従来の集団カテゴリを否定する機能においてまとまりをみせていると考えられた。

超越志向の中に個の標榜が含まれた点は，西洋の個人主義と類似する面を指摘できる。Bourhis, Moise, Perreault, & Senecal (1997) は個人主義について，グループ・カテゴリのメンバーやグループの所属としてより個人としてみなすことを大事にし，唯一個人としての特徴や個人的成果を大事にする，と述べている。Ting-Toomey (1988) は，個人主義は個人の権利や個人のアイデンティティを強調するという。今回の超越志向に「地球人」「人間」の標榜も含まれたことから，個人を主張するのではなく，逆に個人を超えた大きな共通カテゴリで自らを捉える発想が含まれる。「チキウジン（地球に住む人）」「人間」という標榜は，一人一人を単位とせず，むしろ対極に近い，地球に住む人たち全体を単位に人を見る視点である。従って，超越志向が西洋の個人志向と全く同じ概念と考えることは難しい。超越志向は，内集団志向が強く（木村，2009），異質なものを受け入れない日本社会（李・田中，2010）だからこそ，集団ベースの捉えかたを否定し，集団の重要性を下げたい思いから，多様な標榜が出てきたのではないか。従って，本研究の超越志向のマイクロ単位の個人とマクロ単位の地球人項目は，集団の拘束から解放できるという点で同じ機能を持っている。

#### 4. 2.3. 超越志向と西洋の似ている概念との異同

超越志向と似たような概念を西洋で見ると，transnational/transcultural migrant identity や hybridity, diaspora, cosmopolitan identity, などがある。西洋のこれらの概念と，本研究における超越志向は，二文化や二文化集団に拘らない捉え方をする点では共通

する。しかし、以下の点で概念的に異なるものを持っている。

Hermans & Kempen (1998) は大量の国境を越えた移動や広範囲の移動を考慮すると、文化変容は複雑になり、文化変容とアイデンティティの話題を mixing, moving の観点から捉えるべきだと主張している。Bhatia ら (2001) は、今日の transnational migrant の観点から移民のアイデンティティを理解する必要があるという。これらの見解は、移民の transnational/transcultural アイデンティティへの示唆的信息はあっても、その詳細は必ずしも明らかにされていない。「transnational」な者のアイデンティティに、従来の二次元に固定されないものを想定できそうな予想を、表現しているにとどまり、質的な検討や測定までは進んでいない。

Diaspora について、Bhatia ら (2001) は、今日の国境を越えた移動の観点から、self and identity の構成概念としてディアスポラを主張している。Bhatia ら (2009) は、ディアスポラは、複数の文化的地域 (multiple cultural site) における流動的 (fluid)、妥協的、動的 (dynamic) な特徴をもつ、と述べている。つまり、ディアスポラは、複数の地を移動する人がそのつど自分のあり方を変えていく動的なアイデンティティを意味する。

Hybrid 理論という語で、固定的な国や文化的な壁を超えた、home and hostland, here and there の間において、絶えず妥協する moving culture の観点から捉えられている (Bhatia ら, 2001)。

上記の transcultural/transcultural identity, diaspora, hybridity は、国籍や文化の境界線を持たない「固定されない」「流動的な」「行き来する」アイデンティティを表現している。

だが、在日コリアンが住む日本社会の状況は、上記が前提とする状況とはやや異なる。日本は大陸の脇の島国で、国境を越えて移動する際の通過点になるような場所ではなかった。在日コリアンは、植民地時代に、一方向の一回限りの移動によって日本に定着して、発生した集団である。彼らの多くは韓国への訪問は頻繁でなく (福岡, 1993)、韓国語を話せない人がほとんど (林, 2001)、一生を日本で暮らしている人が多い (宋, 2001)。従って、日韓の間での moving はあまり見られず、流動性も確認されない。従って、在日コリアンの超越志向は、日韓の間を行き来する moving/dynamic の概念とは言いづらい。今回の結果からいえる超越志向は、従来重視され束縛されてきたとすら言われる (金, 1999) 集団カテゴリからの解放を求める主張のように思われる。

cosmopolitan は地球市民を指し、社会学の研究や一般的な言説の中にもみられる語である (福岡, 1993)。「地球人」の標榜が含まれる超越志向と、共通する面がある。しかし、本研究の超越志向は「個人」というマイクロ単位の自分の捉え方も含まれた。この点で、単なる地球規模の集合体の想定とは異なる。地球人と個人がなぜ一つの因子にまとまるのかという理由を考えることが、超越志向の機能を考えることにもなる。

なお、哲学で言う超越志向とは以下が異なる。

哲学における超越志向は、神や超自然の視点から論じるもの (Nenon, 2008) で、現存する自然科学の範囲を超える、実証できないもの (Qian, 2010) という。本研究における超越志向は、集団と自己との関係において、集団の一員として特徴付けられる自分のあり方から離れ、脱カテゴリでいたいという志向を意味する。従って、哲学でいう、人間が経験できない超自然的な超越志向の議論とは異なり、本研究の超越志向は実証的な測定の対象であり、現在在日コリアンが経験している現象を概念化したものである。

#### 4.3. 葛藤

4 類型間に有意差は認められず、類型に依らず普遍的と想定する仮説に即した結果となった。葛藤の項目として、二文化や二文化集団の間で個人の心理的に引き裂かれる気持ちなどの項目が設定されたが、在日コリアンにおいては、こうした二文化の捉え方によって葛藤が有意に増減する、という結果は得られなかった。

たとえ有意差は見出されなかったが、社会状況との関連から、この有意差が目立たなかった機序を考察してみることも興味深い試みだろう。

集団主義志向が背景にある日本では (古家, 2010)、集団の一構成員であることに、重要な意味を持ってくる。個人のアイデンティティより集団のアイデンティティを重要視する社会では、日本人と韓国人の両者でもない、あるいは両者でもあることは、中途半端な存在としてより大きな苦悩をもたらす可能性がある。アメリカでは、韓国系アメリカ人を American-Korean ではなく Korean-American と呼ぶのに、一方で、日本では韓国からの植民地移民を Korean-Japanese とは呼ばず、「日本人ではないが在留資格を得て日本に住むコリアン」を意味する「在日コリアン」と呼ぶ。この名称自体が彼らの二文化集団間におけるあいまいな位置づけを表わし、受け入れ社会である日本がこの集団を特別視、異質視することと (辻本ら, 1994; 在日本大韓民国青年会, 2010) 彼らの葛藤の間に関連があるかもしれない。

竹田 (2006) は在日外国人の法的環境の厳しさを指摘し、個人が抱えるアイデンティティ葛藤はこれと関連すると指摘している。つまり、多文化環境が法的に整っていない国では、在日外国人の葛藤が、個人の中で捉えた文化差よりも、社会的環境によってもたらされる困難で、より規定されるとしても不思議ではないだろう。

#### 4.4. スイッチング

在日コリアンにおけるスイッチング志向は、対人行動の相手による文化行動の使い分けとして測定されたが、これはエスニック文化に重点を置く「分離」群の所属者においてより高く、ホスト文化に重点を置く「同化」群の所属者により少なかった。「分離」群の所属者にスイッチングの得点が高いことについては、相関においてもエスニック志向が高いほど、スイッチングするとの結果と一貫性をもつ。

本研究のスイッチングは、先行研究の bicultural identity integration (Benet-Martinez

ら、2005)の2因子の一つである“distance”(例、I keep Chinese and American cultures separate)と似ている。そこでは、以下が示されている。一つ目に、文化変容方略の4類型の「分離」は、“distance”に影響する要因の一つであった。二つ目に、ホスト文化に同一視するほど“distance”しなくなる、との相関があった。すなわち、自分の対人行動がホスト文化と一致する、ないしはホストスタイルで一貫していれば、使い分けの必要は生じない。しかしエスニック文化を中心に据えて行動していれば、生活の多くの場面でスイッチングを要するようになるのだろう。二文化を持つものが、「二文化を分離する」ことによって共存させるスタイルを考えることができよう。

本研究においては、「分離」群の所属者は、日本スタイルで振舞うか、韓国スタイルで振舞うか、適宜使い分ける努力を行っていた。彼らにも西洋の研究と同様にスイッチングが、二文化を共存させる方略になっていると考えられる。では、どうして、「分離」群の所属者はスイッチングしないといけないのかについて、受け入れ社会の影響を考慮することが考えられる。受け入れ社会としての日本は同化主義的である傾向があるため、エスニック集団は自分の固有文化を保つためにスイッチングが生じてきたと考えられる。

Benet-Martinez ら (2005) の distance は認識面に (perceiving) 焦点をあてたもので、本研究のスイッチングは対人行動の側面から捉えられる、という違いはあるが、区分を行い二つとも共存させようとする点では一致した結果といえる。認知においても行動においても、二文化の切り替えがありうることであろう。

なおスイッチング得点が葛藤得点やうつ得点と有意な相関を示すことは、スイッチング実施者が心理的に良好な状態にいないことを示唆する。

## 第5節 まとめ

本研究の目的は、context-specific construct の3変数(自由人、葛藤、スイッチング)を、従来の標準的な4類型文化変容態度と対応しながら、実証化することである。

まず、自由人(積極派・消極派)について、我々は因子分析から主に積極派自由人の項目で構成される因子について、新たに「超越志向」と命名し、概念的定義は「日本人、韓国人というカテゴリで自らを捉えず、これらに依る捉え方を否定し、他の捉え方をする傾向、ないしはそれを表現する生きかた」とした。超越志向の得点は、「分離」群の所属者において最も低かった。つまり、エスニック志向にこだわり続けると超越志向になりにくいことを示した結果である。また、面白いことに、ホストとの所属感が高くなるほど超越志向になりやすいとの相関が見出されたが、これは、超越志向は二文化志向の何も持っていない真空状態ではなく、実はホスト化寄りになっている状態を示唆する。

次に、スイッチングはエスニック志向と高い相関、4類型文化変容態度では「分離」群の所属者で一番高かった。つまり、日本という単一文化社会における在日コリアンは、母文化を諦めず、上手に二文化を共存させるため、スイッチングという方法を駆使しているかもしれ

ない。従って、スイッチングは二文化を上手に統合できた状態の証というより、むしろ複雑な状態を指す、と思われる。もし、受け入れ社会が統合的な社会であるならばスイッチングは「統合」群の所属者の証かもしれないが、同化主義的な社会では「分離」群の所属者の特徴となる可能性がありえよう。

最後に、葛藤と二文化文化志向性は仮説どおりに関連がなかった。では、葛藤は何によって引き起こされるのか、葛藤を軽減するためにどうしたらいいのかについて、次の研究で検討したい。我々は、“日本人でもなく韓国人でもない”という葛藤を示唆する捉え方から、これを解消する認知的方略として自由人に注目している。次の研究において、この想定が繋がるかどうかについて明確にしたい。

表 3-7

因子分析する前の「文化変容」尺度の1対1の項目

1. 韓国の祝日や記念日を祝っている(母, 休日)
2. 日本の祝日や記念日を祝っている(ホ, 休日)
3. 家では, 韓国の食べ物がよく食卓にのぼる(母, 食事)
4. 家では, 日本の一般の家庭と同じように和食も洋食も中華も食べる(ホ, 食事)
5. 同胞が同胞と結婚するのは, 望ましいと思う(母, 結婚)
6. 同胞が日本人と結婚するのは, 望ましいと思う(ホ, 結婚)
7. テレビや同胞からの情報などで, 母国の政治や社会のことをよく知っている(母, 情報)
8. 日本の新聞や雑誌を通じて, 日本の政治や社会のことをよく知っている(ホ, 情報)
9. 同胞と付き合う時, ありのままの自分でいられる(母, 友人)
10. 日本人と付き合う時, ありのままの自分でいられる(ホ, 友人)
11. 韓国風的生活習慣を守って暮らしている(母, 習慣)
12. 日本の生活習慣になじんで暮らしている(ホ, 習慣)
13. 一人で外食する時は, 韓国食を食べたい(母, 外食)
14. 一人で外食をする時は, 韓国食以外の様々な食事がしたい(ホ, 外食)
15. 自分はやっぱり韓国人だと感じる(母, 所属感)
16. 自分は日本人とほとんど変わらないと感じる(ホ, 所属感)
17. 同胞の親友がいる(母, 友人)
18. 日本人の親友がいる(ホ, 友人)
19. 韓国語で不自由なく会話ができる(母, 言語)
20. 読み書きも含めて日本語を不自由なく使える(ホ, 言語)
21. 同胞との集まりに, 積極的に参加している(母, 集団)
22. 日本人との集まりに, 積極的に参加している(ホ, 集団)
23. 韓国の国籍を守り続けるのは, いいことだと思う(母, 国籍)
24. 日本に住んでいるので, 日本に帰化してもかまわないと思う(ホ, 国籍)
25. 周囲の人に, 自分は在日韓国人だと伝えている(母, 開示)
26. 周りから見れば, 私は日本人と区別がつかないと思う(ホ, 開示)



## 第4章

### 在日コリアンにおける二次元文化変容モデルとメンタルヘルスの関連、及び、超越志向に関する因果モデル

#### 第1節 研究の背景と目的

研究全体の目的である「在日コリアンの文化変容態度とメンタルヘルスの関連」について、研究2の所までで在日コリアンにおける文化変容の尺度が用意できて、メンタルヘルスとの関連が検討できる。メンタルヘルスは普遍的な人間の心の幸福感やうつなどを測定するものであるため、既存の尺度で人類共通に用いられるが、「文化変容」尺度は受け入れ社会によって認識される項目が異なる可能性がある。我々は調査1で「文化変容」尺度が用意できたため、ここではメンタルヘルスとの関連を検討するのができるようになった。西洋の移民に対する心理学的研究で、文化変容とメンタルヘルスに関する研究蓄積が厚いことから、在日コリアンでも同じモデルを使って、このいわば定番知見の検討を行う。すなわちエスニックとホストの二軸で文化変容態度を測定する二次元文化変容モデル(Wardら, 1999)を使って、これらの態度とメンタルヘルスとの関連を明らかにする。在日コリアンではこれら間の心理学的研究が空白であったが、知見を得ることができよう。

研究の最初から注目した「韓国人でもなく日本人でもなく個人、地球人」などの自己の捉え方は、研究1の面接調査では「積極派自由人」とされ、研究2の質問紙調査では新たに「超越志向」と概念化された。

近年、西洋の文化変容研究の領域において、従来の標準的な二次元文化変容モデルへの改善点の指摘がしばしばされている。Bhatiaら(2009)は、文化変容を、固定的な概念ではなく、動的に捉える必要があると述べている。Ben-Shalom and Horenczy(2004)は、個人の文化変容志向(acculturation orientation)は、社会・政治的な真空状態から現われるものではなく、受け入れ社会の統合政策によって大きく影響されるという。我々の見出した「超越志向」は、日本という単一文化社会(岡崎, 1992)、同質性を重視する社会(木村, 2009)から見出された、二次元文化変容モデルには当てはまらない態度的特徴といえよう。「超越志向」は、エスニックやホスト文化のどちらも保持していない状態ではなく、ホスト志向と密な関連があり、エスニック志向だと超越志向になりにくいことが明らかになった。

研究2の質問紙調査では、文化変容態度と超越志向の間の静止的な関連までは検討できたが、研究3のここでは、さらに、文化変容態度と超越志向の間の動的なつながりを検討してみたい。なぜなら、近年の文化変容研究では文化変容態度の固定的な関連のみでなく、動的な関連の必要性を強調している。従って、本研究では、超越志向に関する因果モデルを検討する。具体的には、二文化志向性以外に本研究で在日コリアンの態度的特徴として注目している葛藤やスイッチングの変数も組みこむ。葛藤やスイッチングは二文化志向性と超越志向の間をどう促進あるいは抑制するのか、超越志向にいたる流れを検討する。以下に、これら

の研究の視点について、詳しく述べていく。

### 1.1 西洋における二次元モデルを用いた文化変容態度とメンタルヘルス

移民の心理学的研究では、異なった集団間の接触により、必ず、文化変容が起るとされる (Berry, 1980)。異なった文化グループ間の直接的な接触の結果起る変容が文化変容 (acculturation) である (Berry ら, 1988)。Sam and Berry (1995) は、文化変容は接触の結果起る行動的及び心理的变化であると述べている。文化変容には、集団と個人の2つのレベルが想定できるとされる (Berry, 1980 ; Berry, 2005)。集団レベルでは、社会経済的地位や社会状況などが注目されるが、心理学領域で焦点が当てられる個人レベルでは、さまざまな心理的反応の測定が試みられてきた。蓄積された知見は総じて、個人レベルの変容がうまくいけば適応状態に至るが、うまくいかないと文化変容ストレスが生じて、精神的健康が損なわれるというもので、例えばうつなどが測定されている (Berry, 2005)。研究視点としては、個人的文化変容態度と適応に焦点をあてており、個人レベルのいわばミクロの視点で説明する研究が主流である。

文化変容態度の捉え方について、多様な文化領域の項目 (例 : food, customs, friendship, sense of belonging) を用いて、エスニックとホストの二次元を独立に捉え測定を行い、例えば「エスニック志向」と「ホスト志向」のように二次元文化変容態度と捉えたり、あるいは二次元をより細分化した「同化」「統合」「周辺化」「分離」のような4類型文化変容態度と捉える手法が多い。そしてこれらの文化変容態度とメンタルヘルスとの関連を検討する。

二次元間の関連について、たくさんの先行研究は二軸間の独立性が確認されていると述べている (Berry, 2006 ; Ward, 2008)。そして、二次元ないしは4類型文化変容態度とメンタルヘルスの関連をみた研究が多く、以下のような先行研究の報告がある。

まず、二軸の文化変容態度と心理的従属変数の先行研究の報告である。Ward ら (1999) は、ネパールに居住している104人の外国人住民を対象に彼らの文化変容態度と心理的適応を調査した。文化変容の二軸として、母文化との同一視 (identification with culture of origin) とホスト文化の人との関係 (relations to members of host culture) と捉えている。項目の例として、“あなたの行動や体験は母文化の人々と似ているか”、“あなたの行動や体験はホスト文化の人々と似ているか” などがある。従属変数の一つに心理的適応、具体的には「うつ」を用いている。重回帰分析の結果、母文化との同一視が心理的適応の有意な予測要因であると報告している。Ouarasse ら (2005) は、acculturation attitudes と acculturation outcomes の関連を展望し、ホスト文化との強い同一視が less depression, ないしは more depression で一致しないとまとめている。

次は4類型文化変容態度と心理的従属変数の先行研究の報告である。数多くの先行研究は、「統合」群の所属者が、一番心理的適応がよいと報告している (Ward ら, 1994 ; Berry ら, 2010 ; Ward, 2008)。しかしメンタルヘルスが最も悪いのは4類型のさまざまな報告があり、一

貫していない。Wardら(1994)は、海外に居住しているニュージーランド公務員を対象に、「同化」群の所属者がもっともうつである、と報告をしている。Jangら(2007)は、アメリカ居住の韓国人高齢者を対象に、「分離」群の所属者がもっともうつであるという。Samら(1995)は、Norway移民を対象に「周辺化」の所属者がうつ、否定的自己評価、心理的症状(psychosomatic symptoms)の説明変数であると報告している。

## 1.2. 在日コリアンにおける文化変容態度とメンタルヘルスへの示唆

在日コリアンの心理学的研究は乏しいが、社会学的研究では以下の指摘がある。多様な文化領域の変数の測定はある。例えば、本名の使用度、民族教育の伝承意識、民族的な食生活を大事にする(林, 2001)などのような項目の測定はある。しかし、これらの変数はアイデンティティという概念でくくられており、心理学視点から文化変容態度として捉えた研究例は見当たらない。そして、これらの変数について、単純な報告に留まり、さらにこれらの変数とメンタルヘルスとの関連をみた研究は見当たらない。ただし、在日コリアンのメンタルヘルスを示唆する研究として、在日としての劣等意識に関する程度を尋ねる単項目(林, 2001)、自尊心や劣等感に関する単項目が用いられ、差別と劣等感、差別と自尊心の関連をみた報告がある(福岡, 1997)。引き続き、福岡(1997)は、自尊心は集団アイデンティティを指すと説明しており、劣等感は民族的劣等感(“在日韓国・朝鮮人である自分を嫌だと思ったことがあるか”)を意味している、という。あるいは、劣等感の逆転点数を自尊心と捉えている。

西洋の心理学的研究では、集団自尊心と個人自尊心を分離した概念と捉え、測定が試みられているが(Wiley, Perkins & Deaux, 2008)、上記の在日コリアンの報告は個人より集団に焦点を当てた簡易に問うにとどまり、個人が軸となり個人の心理現象としての測定は行われていない。また劣等感の逆転項目として、自尊心の回答の数値を用いているが、心理学的には異なる概念であり、単なる逆転スコアで表現されるものとは考えにくい。結論的に、在日コリアンでは文化変容態度及びメンタルヘルスについて、きちんとした尺度に基づく測定が行われていないため、彼らに対する心理学的な知見が蓄積されていない状態にある。移民を対象とした研究において、西洋では個人に注目した心理学視点からの研究が多い。一方で、在日では個人より集団に注目した社会学視点の研究が多く、個人が軸となる心理学視点からの研究は少なかった。集団が個を抑圧してきたとも言われる(金, 1999)。

本研究では、移民的な集団としての在日コリアンの個人の心理現象に焦点を当てて、心理学的な視点と手続きによる研究を行う。方法として、海外でよく取り上げられてきた二次元文化変容、心理的従属変数を用いて、これらの変数間の関連を検討する。これによって、西洋における蓄積された文化変容態度と心理的変数の関連についての知見と在日コリアンでの知見を対比することができる。従来のメンタルヘルスに関する先行研究においては、うつ、孤独感、mental disorderなど、主にネガティブな面に焦点が当てられて、測定が行われてきており、幸福感のような肯定的な側面への注目は相対的に少ない。本研究では、より幅広

い観点から心理的従属変数を検討するため、肯定的・否定的な側面、両方から捉えて測定を試みる。特に、心理的従属変数の指標として臨床的な面ではなく、個人の心理的健康に焦点を当てた観点から、肯定的側面として「主観的幸福感」を（伊藤・相良・池田・川浦，2003）、否定的側面として「うつ傾向」（Samら，1995）の測定を行なう。

本稿では、これら二つの下位尺度を「メンタルヘルス」と捉え、文化変容態度とメンタルヘルスの関連についての先行研究の知見に基づいて、以下のような仮説を立てる。

仮説 1 エスニック志向が高いと心理的適応がよい（Ward, 1999）あるいは self-esteem が高い（Gong, 2007）との知見をうけて、本研究では、高いエスニック志向はよいメンタルヘルスと関連すると予想する。

仮説 2 数多くの先行研究では、4 類型文化変容態度の「統合」がもっとも心理的適応がよく「周辺化」がもっとも悪いと報告されており（Samら，1995；Berryら，2010），本研究においても統合がもっともメンタルヘルスが良好で周辺化がもっとも悪いと予測する。

### 1.3. 超越志向に関する因果モデル

以上まで、在日コリアンにおける二次元文化変容モデルを用いてメンタルヘルスとの関連をみてきた。しかし、近年、西洋では二次元文化変容モデルの限界についてしばしば指摘されている。Hermansら（1998）は文化変容やアイデンティティの話題を mixing, moving として捉えるべきだと主張している。Chirkov（2009）は、現存する文化変容の接近では認識的に・概念的に・技術的に移民の複合的な現象を説明するには不十分だ指摘している。そして、文化変容は表面的な行動に関する項目（例：言語・料理法・ファッション）に焦点が当てられがちだったが、もっと個人の動的なアイデンティティの理解が必要であるという。Bhatiaら（2009）は、国境を越えた移住や global movement を考慮したら、心理学領域の固定的な概念である文化変容の概念は再考されるべきであるという。

在日コリアンでも、二次元文化変容の枠にはまらない、個人のアイデンティティのありようが指摘されている。流動性や変動性への指摘は含まれないが、日本や韓国という二軸にはまらない態度的特徴を持つ個人がいるという点では、上記と似ており、以下の報告を挙げることができる。在日本大韓民国青年会（2012）には、“私たちは日本人でも韓国人でもなく地球人宇宙においては宇宙人の一人なんだという視点を持ったら周りに影響されず”，“韓国人でもない日本人でもない、それ以上のものを持っているのが在日だと思う”，とのインタビューの内容が紹介されている。我々の先の面接調査には、自分のアイデンティティの状況を尋ねたときに、“おれ人”，“人間として”，など、二次元に捉われない語りがあった。

我々の、研究 2 において、日本という受け入れ社会の中で、在日コリアンの態度的特徴として概念化された「超越志向」は、従来の二次元文化変容態度では説明できない現象である。本稿では、二次元を絶対視せず、二次元モデルに執着しないこの捉え方を二次元モデルの概念的拡張と考え、実証的にとらえてみたい。具体的には、在日コリアンに見られた「超越志

向」について、これがどのような要因によって導かれるのか、パスモデルを用いて検討を試みる。その理由は以下のように考える。日本社会の変化、例えば、差別がなくなり、国の多文化志向などとの関連から、エスニック集団という民族性重視から「個」への注目が現われたと述べられている（李，2011）。つまり、社会の変化に伴って現われた現象で、個人の心理状態との関連は研究されていない。本研究では、具体的に以下を検討する。個人のエスニック志向やホスト志向がどうだと、超越志向になるのか。在日コリアンの態度的特徴として本研究で注目している、葛藤やスイッチングは二文化志向性と超越志向の間をどのように強化するかないしは抑制するか。

モデルに含める要因としては、二次元の状態のほかに、葛藤とスイッチングを組み込む理由は以下のものである。

まず、葛藤について、社会学の先行研究では、二文化間の狭間にある葛藤は超越志向と関連する示唆的な見解がある。例えば、原尻（1989）は、日本国籍に帰化しても、依然として日本人でもなく韓国人でもないと感じ、“自由人”，“国際人”，“その他”で自分を認識するという。在日本大韓民国青年会（2010）には、“日本人でも韓国人でもなく地球人宇宙においては宇宙人の一人なんだという視点を持ったら周りに影響されず”との語りを紹介している。我々は、葛藤解決の方法として超越志向にいたるのか、葛藤は何によって促されるのかを検討する。

次に、スイッチングについて、スイッチングは直接的に超越志向と関わる予測はないが、しかし、研究2の相関結果に基づいて、エスニック志向とスイッチングの強い関連（ $r=.52$ ）やスイッチングと葛藤の関連（ $r=.25$ ）から見ると、このモデルに必要な変数であろう。

本研究における超越志向に関する因果モデルの具体的なパスの仮定において、主に、研究2の質問紙調査結果に基づいたものである。以下にそれらを詳しく述べていく。

研究2の質問紙調査では、一つ目に、エスニック志向のみが高くホスト志向は低い群である「分離」群の所属者において、超越志向の得点が最も低い傾向から、“エスニック志向が高いほど超越志向になりにくい”というパスを仮定した。二つ目は、研究2の質問紙調査により、ホスト志向と超越志向の正の相関から、ホスト志向から直接に超越志向への正パスを仮定した。三つ目は、在日コリアンは、親からないしはエスニックコミュニティから民族性やエスニック集団への強調があったため（原尻，1989）、その拘束感は葛藤につながると考えられるので、“エスニック志向が高いほど葛藤を感じる”とのパスを仮定した。四つ目は、在日コリアンが、たとえ、同化して日本人になっても完全な日本人としては認められず、自分としても何かの違和感をいだくと（原尻，1989）の知見から、ホスト志向から葛藤への正のパスを仮定した。五つ目は、研究2の調査結果、エスニック志向とスイッチング間の正の相関及びスイッチングがうつや葛藤のように否定的な心理的変数と関連があることから、エスニック志向からスイッチングへ、スイッチングから葛藤へのパスを仮定した。六つ目は、研究2の調査結果、ホスト志向のみが高くエスニック志向は低い「同化」群の所属者において、ス

スイッチングの得点が一番低いことから、ホスト志向からスイッチングへ負のパスを想定した。七つ目は、葛藤を乗り越える方法として超越志向になるかを確認するため、葛藤から超越志向への正のパスを想定した。最後に、研究 2 の調査結果、エスニックの生活習慣に関する項目で構成される「エスニック志向」とホストのカテゴリ志向で構成される「ホスト志向」は、互いに独立であったので、仮定として、「エスニック志向」と「ホスト志向」は関連がないだろう。

以上の仮定をまとめて、本研究では、二文化志向が超越志向への直接効果、そして二文化がスイッチング及び葛藤を媒介してどのように超越志向へ影響するかを検討するため、パス解析を行なう。仮定したモデルを図 4-1 に示している。

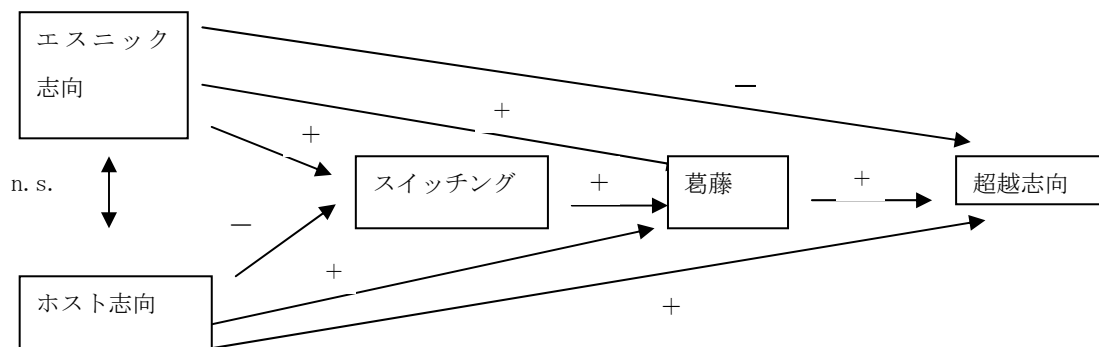


図 4-1 超越志向に関する仮説モデル

## 第2節 方法

### 2.1. 調査対象者

調査対象者は、韓国コミュニティとの関わりを持っている西日本在住の在日コリアン 184名（男性 93名（50.54%）・女性 91名（49.46%））で、世代は1世から4世までで1世は8名（4.35%）、2世は85名（46.20%）、3世は80名（43.48%）、4世は5名（2.72%）、不明が6名（3.26%）で、約9割が2・3世である。年齢は20歳から83歳まで（平均年齢は47.6歳、SDは16.9歳）。“どちらの言葉が上手く使えるか？”の質問に対して、選択枝として“日本語、韓国語、両方同じぐらい、どちらでもない”が示された。結果として184名（94.57%）が日本語、3名（1.63%）が韓国語、6名（3.26%）が両方同じぐらい、不明が1名（0.54%）だった。“Ethnicity と self-identification は区別される必要があるとの知見（phinney 1992 ; Ward 2006）から、国籍と self-identification を区別して尋ねた。国籍は韓国国籍が172名（93%）、日本国籍が8名（4%）、その他（other）が2名（1%）、不明が2名である。国籍について、谷（1995b）は、在日コリアンの定義として特別永住者（国籍は韓国）のみでなく、日本国籍に帰化した後も母国への一体感や帰属意識をなほどこか抱きつつ日本に定住している人々も在日コリアンに含めている。本研究の日本国籍保持者8名は、韓国コミュニティとの関わりを持っていることから、いくらか韓国との心理的接近があると判断し、在日コリアンの範囲に含めることにした。self-identification については、“自分は何人だと思いますか”と訪ね、“日本、韓国、両方同じぐらい、どちらでもない”が選択枝として示された。結果は、8名（4.35%）が日本、146名（79.35%）が韓国、17名（9.24%）は両方、10名（5.43%）はどちらでもない、3名（1.63%）は不明だった。

### 2.2. 手続き

依頼方法としては、調査者が、知人に直接依頼したり韓国コミュニティの中にある韓国語教育機関で働いている知人を介して依頼したりしたものと、西日本のさる在日韓国人団体を訪問した人やイベントに参加した人に依頼したものから成る。謝礼は特になく、参加者は自発的に協力し、匿名で回答した。

調査は質問紙調査により2011年1月から2011年10月にかけて、日本語の質問紙で実施された。一世も数十年間日本で生活しており、全員が日常生活レベルの日本語ができた。日本語の漢字表記が苦手な高齢者が2名いたが、音読すれば意味を解したので、調査者が読みあげて回答を援助した。

### 2.3. 質問紙の構成

質問紙の構成としては、文化変容、超越志向、葛藤、スイッチング、主観的幸福感、うつ傾向の尺度と属性情報からなっている。文化変容、超越志向、葛藤、スイッチング、主観的幸福感、うつ傾向の尺度は、原本は4段階で、うつ傾向の原本は7段階だったが、今回は回答のしやすさを考えて全て5段階評定とした。

### 2. 3.1 「文化変容」

海外の移民研究では内容的に対を成す項目で尺度構成をした例もあるが、本調査では二文化を意識する領域がそれぞれ異なる李・田中（2011）の調査報告に基づいた。そこでは、エスニック志向に対してはエスニックの一般的な生活習慣に関する項目が、ホストに対してはホストのカテゴリやホストの属性に関する項目が抽出されている。いわば、非対称の項目構成である。本研究の「文化変容」は、李・田中（2011）の「文化変容」尺度から、負荷量が高かった7項目に、新たに3項目を加え、総10項目となっている。項目の例として、エスニック志向は、“韓国の生活習慣を守っている”“韓国の祝日を祝う”など。ホスト志向は、“自分はほとんど日本人と変わらない”“私にとって日本人は「外国人」だという気がしない”など。西洋でよく使われる項目構成とは異なり、我々の先行研究の項目構成とも若干変えていることから、今回は因子構造を検討したうえで、抽出された因子ごとに続く分析を行った。

### 2. 3.2. 超越志向

李・田中（2011）の「超越志向」尺度からいくつかの項目を取り入れ、新たに2項目を追加し、総6項目となっている。韓国か日本を越えて自分を捉えたり、価値観を志向する項目構成である。項目の例として、“自分は自分で、国籍は二の次だと考える”、“日本や韓国の価値観を越えて、地球で広く通用する価値を求めたい”などがある。因子分析の結果、1因子構造で、 $\alpha$ 係数は0.70であった。因子分析の結果を表4-1に示している。

表 4-1  
超越志向の因子分析

	Factor
自分は自分国籍は二の次	.677
日本人でも韓国人でもなく、地球人だと思う	.594
地球上で広く通用する価値を求めたい	.587
在日韓国人としての私ではなく、一個人としてみてほしい	.524
韓国人だと意識も薄く、日本人だと意識も薄い	.425
日本文化も韓国文化も特に意識せず、快適に暮らしている	.374
Variance explained	29.2%



### 2. 3.3. 葛藤

李・田中（2011）の「葛藤」尺度（3項目）項目を取り入れ、若干表現に修正を加え、そして新たに1項目を追加し4項目となっている。日本と韓国という、二集団や二文化の狭間で迷っている度合いを尋ねている。項目の例として、“日本か韓国，どちらの人間にもなりきれない”，“日本のやりかたと韓国のやりかたの間でどちらをとるか迷ってしまうことがある”などがある。因子分析の結果，1因子構造で， $\alpha$ 係数は0.64であった。因子分析の結果を表4-2に示している。

表 4-2

葛藤の因子分析

	Factor
どちらの人間にもなりきれない	.726
日本のやり方と韓国のやり方で迷う	.629
日本にも韓国にも，落ち着ける場所がない	.526
完全に日本人として生きるか，韓国人として生きるか決められない	.370
Variance explained	33.4%

### 2. 3.4 スイッチング

李・田中（2011）からなる「スイッチング」尺度の9項目を用いる。文化行動における使い分けに関する項目となっている。項目の例として，“日本人といる時は同胞といる時よりも，周りに合わせて行動する”，“同胞と付き合う時は，日本人と付き合う時よりも，ストレートな感情表現をする”などがある。因子分析の結果，1因子構造で， $\alpha$ 係数は0.85であった。因子分析の結果を表4-3に示している。

表 4-3

スイッチング因子分析

	Factor
日本人といる時は，周りに合わせて行動する	.792
日本人といる時，「まあいいか」と考え，自分の行動抑える	.682
同胞と付き合う時には，ストレートな言い方	.681
日本人と接する時は遠慮や謙遜をする	.679
日本人とは日本スタイルで，韓国人と韓国スタイルで付き合う	.637
人付き合いの付き合い方が自然に変わってくる	.593
日本人と話す時は，あいまいな言い方	.579
同胞といる時の方が男女間の礼儀を気にしている	.535
同胞とは儒教的な考え方を大事にする	.529
Variance explained (%)	40.8%

### 2. 3. 5. メンタルヘルス

メンタルヘルスの肯定的側面として伊藤・相良・池田・川浦（2003）からなる12項目構成の「主観的幸福感尺度（Subjective Well-being Scale）」を用いた。ここでは臨床的な面ではなく、個人の心理的健康を問う項目で、認知と感情面、両方を含めている。例えば、測定項目の例として、“今の調子でやれば、これから起きることにでも対応できる自信がある”，“私の人生は面白いと思う”，“ここ数年やってきたことを全体的に見て、かなり幸せを感じている”などがある。信頼性検討の結果、 $\alpha$ 係数は0.85であった。因子分析の結果を表4-4に示している。

メンタルヘルスの否定的な側面の指標はSam & Berry（1995）からなる7項目構成の「うつ傾向（depressive tendencies）」を用いた。この尺度も上記の「主観的幸福感」と同様に、臨床的な問題傾向を示すものではないところから、本研究の測定に採用した。項目の例は、“時々、すべてに希望がないように思われ、何もやりたくない気分になる”，“時々、人生は生きる価値がないものと思うことがある”などがある。 $\alpha$ 係数は0.89であった。因子分析の結果を表4-5に示している。

表 4-4

## 主観的幸福感の因子分析

	Factor
これから起きることにも対応できる自信がある	.711
大変なことがあっても、立ち向かえる自信がある	.690
自分がやろうとしたことはやりとげている	.645
思い通りに進まない場合でも、適切に状況に対処できる	.604
私の人生は面白い	.595
全体的に見て、かなり幸せを感じている	.594
期待通りの生活水準や社会的地位を手に入れた	.590
自分の人生は退屈だ、面白くないと感じる	-.549
かなり成功したり出世したと感じる	.549
自分の人生には意味がないと感じる	-.544
過去と比較して、現在の生活は幸せである	.515
将来のことが心配である	-.307
Variance explained	34.0%

表 4-5

## うつ傾向の因子分析

	Factor
時々、すべてに希望がないように思われ、何もやりたくない	.834
人生は生きる価値がないものと思うことがある	.760
時々、憂うつになり、一日中ふとんに入っていたい	.759
何の理由もなく悲しくなることがよくある	.757
理由も分からずうつになる	.736
私の人生は、かなり、みじめである	.630
楽しみに期待していることが何もない	.605
Variance explained	53.2%

### 第3節 結果

#### 3.1 属性による分析

##### 3.1.1 国籍による分析

在日コリアンにおける国籍，特に日本国籍への帰化は，彼らのアイデンティティをなす重要な成分といわれる（林，2001）。つまり，国籍が韓国だから，韓国人だという認識を持つことである。では，実際の生活ぶりとはどう関連するか，例えば，エスニック志向やホスト志向，スイッチング，葛藤などと国籍はどう関係するかを見るため，国籍によるこれらの変数に違いがあるかどうかを検討した。その結果，国籍と愛着，国籍と名前は，クロス集計の結果，有意な関連がなかった。つまり，国籍が韓国なので韓国に愛着を持っているとか，国籍が韓国だから韓国名（本名）を使うとか，のような関連が認められなかった。次に，国籍（韓国・日本）とエスニック志向，ホスト志向，超越志向，葛藤，スイッチング，について，t検定を行い，その結果，全ての変数が国籍と有意な関連がないことが明らかになった。つまり，国籍が韓国なのでエスニックの生活習慣を保持しているとか，国籍が韓国なので日本との一員意識がない，という関連は見出されなかった。国籍は唯一に，self-identificationとクロス集計の結果，有意であった（ $X^2(6) = 66.24, p < .01$ ）。言い換えれば，韓国国籍だと自分は韓国人だと思うし，日本国籍だと自分は日本人だと思う，という結果である。

##### 3.1.2 年齢による分析

同じ年代でも，先祖の日本への定着時期や，片方の親は1世で片方は2世である場合，その子孫の世代は複雑になるため，ここでは年齢の属性で従属変数の平均値の違いを検討した。その結果，エスニック志向について，60代が30代より，得点が有意に高かった， $F(5, 172) = 2.62, p < .05$ 。超越志向について，20代が70，80代より，得点が有意に高かった， $F(5, 168) = 3.05, p < .01$ 。スイッチングについて，60代が20代より，得点が高かった， $F(5, 169) = 3.40, p < .01$ 。ホスト志向と葛藤については，年齢による違いが認められなかった。以上より，若い年齢であるほど，超越志向になり，高年齢層であるほどエスニック志向やスイッチングをすることが明らかになった。

#### 3.2 「文化変容」尺度の因子分析

「文化変容」の尺度の10項目に対して，主因子法，バリマックス回転を行い，以下のような2因子構造が得られた。因子1は，エスニックの生活習慣を意味する項目で構成されている「エスニック志向」で，4項目で $\alpha = .58$ であった。因子2は，ホストとの一員意識やホストカテゴリ志向を示すもので構成されている「ホスト志向」で，3項目： $\alpha = .54$ であった。二因子間の相関は独立であった（ $r = -.20$ ）。因子分析を繰り返す中で，以下のような理由で3項目が削除された。最初，ホスト志向の設定であった2項目が，ホストには正，エスニックには負に，同時に高い負荷量を示したため削除した。具体的な項目は以下のようなものである。

“同胞が日本人と結婚するのは望ましいと思う” “日本に住んでいるので、帰化した方がいいと思う”。そして、1項目は負荷量が低いため、削除した。最終的な因子分析の結果を表4-6に示している。

表 4-6  
文化変容の因子分析

	<i>F1</i>	<i>F2</i>
テレビや同胞からの情報などで、韓国の政治や社会のことを知っている	<b>.586</b>	.047
韓国風の生活習慣を守ってくらしている	<b>.577</b>	-.061
韓国の祝日や記念日を祝っている	<b>.535</b>	-.127
韓国食が一番口に合う	<b>.346</b>	-.017
私にとって、日本人は「外国人」だという気がしない	-.092	<b>.588</b>
自分は日本人とほとんど変わらないと感じる	-.218	<b>.569</b>
身の周りの日本人とは、互いに信頼しあえる人間関係を築いている	.135	<b>.490</b>
Variance explained (%)	16.5	13.3

### 3.3. 相関分析の結果

本研究の分析に用いられている尺度の平均値、標準偏差、及び相関係数を表4-7に提示している。結果は、以下の通りである。エスニックとホスト志向の間に有意な相関がなかった。超越志向は、ホスト志向と正の相関、エスニック志向とは負の相関、葛藤とは正の相関が見出された。スイッチングは、エスニック志向と正の相関、葛藤と正の相関が認められた。メンタルヘルスのポジティブ面である主観的幸福感は、エスニック志向と弱い正の関連が、葛藤とは弱い負の相関があった。葛藤とうつの中に正の相関があった。メンタルヘルスの両側面は、互いに中ぐらいの負の相関があった。超越志向とうつ傾向、超越志向と主観的幸福感は有意な相関は見られなかった。

表 4-7  
各尺度の平均値、SD と尺度間相関

	<i>M</i>	<i>SD</i>	ホスト	スイッチング	葛藤	うつ	エスニック	超越	幸福
ホスト	3.69	0.79	1.000						
スイッチング	2.95	0.77	-.237 **	1.000					
葛藤	2.41	0.84	.019	.331	** 1.000				
うつ	2.01	0.84	-.065	.066	.340 **	1.000			
エスニック	3.12	0.73	-.125	.342	** .040	-.017	1.000		
超越	3.27	0.78	.327 **	-.165	* .204 **	.036	-.241	** 1.000	
幸福	3.63	0.61	.093	.080	-.158 *	-.580 **	.180	* .055	1.000

\*  $p < .05$ , \*\*  $p < .01$

### 3.4. 文化変容態度とメンタルヘルスの関連

文化変容態度とメンタルヘルスに関する仮説を検証するため、「エスニック志向」と「ホスト志向」の尺度得点を中央値によって高低群に分け、2 要因（エスニック志向の高・低群×ホスト志向の高・低群）分散分析によってメンタルヘルスとの関連をみた。その結果、「主観的幸福感」については、ホスト志向の主効果のみが認められ、エスニック志向の主効果は見出されなかった。具体的に、高ホスト群が低ホスト群より得点が有意に高かく ( $F(1, 165) = 4.90, p < .05$ )、高エスニック群と低エスニック群の間には有意な違いがなかった ( $F(1, 165) = 2.47, n. s.$ )。「うつ傾向」については、伝統的なレベル ( $p < .05$ ) における有意な違いは見出されなかったが、ホスト志向群において有意傾向は見られた。具体的に、低ホスト群が高ホスト群より「うつ傾向」の得点が高い傾向であった ( $F(1, 167) = 3.85, p < .10$ )。さらに詳しく、1 要因分散分析により、文化変容態度を4 類型化してメンタルヘルスとの関連を検討した。4 類型の文化変容は具体的には、高ホスト-低エスニック群を「同化」、高ホスト-高エスニック群を「統合」、低ホスト-低エスニック群を「周辺化」、低ホスト-高エスニック群を「分離」とした。同化は57名、統合は52名、周辺化は27名、分離は42名となった。結果、「主観的幸福感」については、「統合」群が「周辺化」群より、得点が有意に高い傾向に留まった、 $F(3, 165) = 2.35, p < .10$ 。「うつ傾向」では、4 類型間の違いがなかった ( $F(3, 167) = 1.50, n. s.$ )。

仮説1では、エスニック志向と主観的幸福感の関連を予想していたが、結果はホスト志向と主観的幸福感と有意な関連が認められた。従って、仮説1は支持されなかった。仮説1で予想された、うつ傾向と文化変容態度に関しては、本研究では認められなかった。

統合が一番メンタルヘルスがよいだらうという仮説2について、主観的幸福感については明確ではないがその傾向はあったが、うつ傾向については関連が見出されなかった。従って、仮説2は部分的に支持された。

### 3.5. 超越志向に影響する文化変容態度、葛藤、スイッチングのプロセスモデル

次に、超越志向に影響を及ぼす二文化志向性・葛藤・スイッチングとの関連を検討するため、AMOS5.0を用いてパス解析を行なった。パスの削除と追加を繰り返し、適切なモデルを探った。パス係数とその有意確立及び適合度の改善を基に、モデル修正を繰り返し、最終的に得られたモデルの計算結果を図4-2に示す。

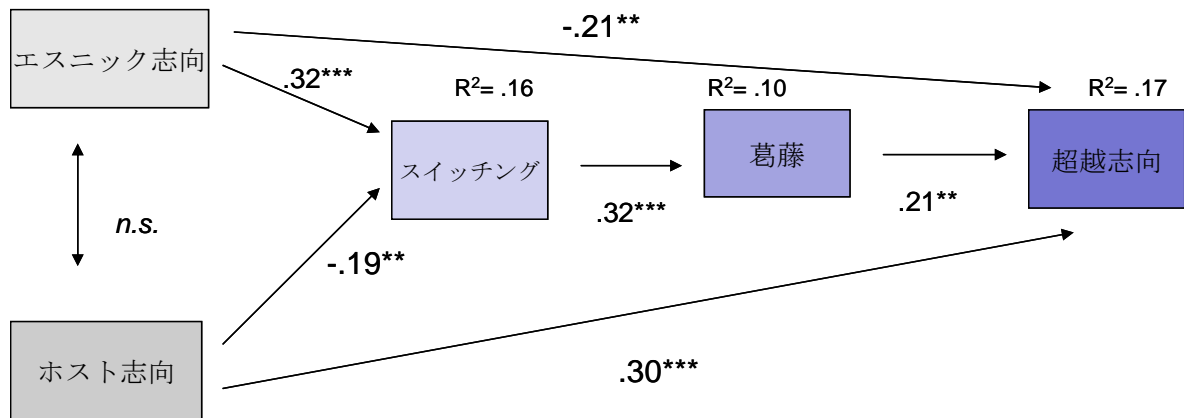
結果は以下の通りである。

ホスト志向は直接に超越志向に正の影響をしていて ( $\beta = .30, p < .001$ )、仮説は支持された。つまり、ホストへの一員意識やホストカテゴリ志向を高く持つほど、超越志向になることを示す。しかし、ホスト志向が高いと、スイッチングは起きなく、スイッチングしないことは葛藤も引き起こさなく、結果的に超越志向も起きない。ホスト志向は直接的には超越志向にいたる正の予測要因ではあるが、スイッチングや葛藤を介しては負の影響をしていた。

エスニック志向は、間接的に超越志向に正の影響をしていた ( $\beta = -.21, p < .01$ )。エスニック志向の高さはスイッチングを促し、スイッチングの実施は高い葛藤を介して超越志向に至った。従って、仮説であるエスニック志向からスイッチングへ、スイッチングから葛藤へ、葛藤から超越志向へのパスの想定は支持された。面白いことに、エスニック志向を持っている場合、スイッチングが葛藤に正の影響をすることである ( $\beta = .32, p < .001$ )。つまり、エスニック志向を持って超越志向になるには、スイッチングと葛藤を経る必要がある。一方で、エスニック志向は直接には超越志向に負の影響をされていて、仮説は支持された。つまり、エスニック志向にこだわり続けると超越志向になりにくいことを示す。

上記のパス解析の結果から、エスニック/ホスト志向の両方と超越志向の間に有意な直接パスがあったため、文化変容態度のより具体的な類型と超越志向の関連を検討するため、1要因分散分析を実施した。その結果、4類型文化変容態度の「統合」群と「同化」群が「分離」群に比べて、超越志向の得点が有意に高かった ( $F(3, 165) = 6.71, p < .001$ )。言い換えれば、統合と同化はエスニック志向のレベルは異なるが、ホスト志向のレベルは高ホストで共通している。高ホスト志向と超越志向の関連が示されたことで、上記のホスト志向から超越志向への正の有意なパスが認められたパス解析の結果と一貫している。





Note :

適合度 :  $X^2=4.70$ ,  $df=3$ ,  $n.s.$

GFI=.99, AGFI=.95, RMSEA=.06

\*\* $p < .01$ , \*\*\* $p < .001$

図 4-2 超越志向プロセスの因果モデル

#### 第 4 節 考察

本研究の主な目的は、1)文化変容態度とメンタルヘルスの関連を検討すること、2)パス解析によって超越志向と文化変容態度、葛藤、スイッチングについての関連を検討することである。以下にこれらの目的によって得られた結果に対する示唆点を論じていく。

##### 4.1 文化変容態度と幸福

西洋では文化変容のエスニック志向と self-esteem のようなメンタルヘルスの肯定的な側面との関連がたくさん報告されている (Phinney, 1992; Ward ら, 1999; Gong, 2007)。しかし、在日コリアンではエスニック志向の強弱の度合いと幸福感は関連がなく、ホスト志向の度合いと主観的幸福感が関連するという面白い結果が見出された。本研究でいうホスト志向は、ホストとの一員意識やホストカテゴリとの一体感を意味するもので、そのような法的な身分や社会的な位置づけが日本志向であれば、それが主観的幸福感とつながることである。これは日本社会の同化志向的な特徴を反映するものと考えられる。日本社会に溶け込んで日本社会への同一視ができていない場合と比べて、心理的安定感が得やすく幸福でいられることを示唆する。4 類型文化変容態度から見ると、「統合」群が「周辺化」

群より、主観的幸福感が高いだろうという仮説について、明確な関連は見られなかったが、有意傾向はあった。これは蓄積されているたくさんの先行研究と同様の線上であることは示唆する。

#### 4.2. 文化変容態度とうつ

西洋では文化変容態度とうつの間に有意な関連について数多くの報告がある。二次元文化変容態度とうつについて、Ouarassa ら (2005) は展望論文において、ホスト文化との同一視が more depression ないしは less depression だったり、一貫していないとの報告を紹介している。そして、4 類型文化変容態度とうつについては、「周辺化」が最もうつである、との報告が多い (Sam ら, 1995 ; Berry ら, 2010)。一方で、在日コリアンでは、ホスト志向 (= ホストとの一体意識) が低い群が高い群に比べて、「うつ傾向」が高い傾向があるという、弱い示唆が得られるだけである。総じて文化変容態度とうつの明確な関連性は弱い。つまり、心の不健康と二文化志向性は直接的な強い関わりはないことを示唆する。「うつ傾向」は、唯一葛藤と相関があった。これは Ward (2008) の展望論文において、EIC (ethno-cultural identity conflict) とうつの間に関連がある ( $r=.53$ )、との紹介と共通する結果である。本研究では、韓国人あるいは日本人としてという自己存在のあり方の不確実性や狭間に置かれている心理的苦痛が「うつ傾向」と関連するものと考えられる。

#### 4.3. 文化変容態度、スイッチング、葛藤と超越志向の間の関連

エスニック・ホスト志向から超越志向への直接的な影響と媒介変数を介した間接的な影響は以下の4つの解釈が考えられる。

一つ目は、ホスト志向を持つことは直接に超越志向に正の影響をしていたことや、分散分析から「同化」群と「統合」群という2つの高ホスト群の超越志向得点は、分離と周辺化群より有意に高かった。つまり、ホスト志向が高くなるほどは超越志向に至りやすいことを示す。本研究における超越志向は、「自分」「地球人」「両文化を意識せずに暮らす」などのように、二文化集団に頼らない自己のありかたや生き方を指す。従って、高ホスト志向と超越志向の間の関連は、ホストに同化するほど、脱カテゴリ化志向になることを示す。一見、不可解に見えるが、在日コリアンの社会学の調査でもこれと類似した報告がある。

福岡 (1993) は在日コリアンの聞き取り調査から、4つの類型を提案している。その中の「帰化志向」(日本国籍に帰化して日本人になる)と「個人志向」(民族や国籍にこだわらから自由でありたい)が、一次元からみたときに、同化意識に近い順が帰化志向の次が個人志向だと述べている。林 (2001) は質問紙調査から、「個人志向」と「帰化志向」の特徴はほぼ同じであると報告している。例えば、項目の例として“日本人の友達がほとんどである”などがある。本研究のホスト志向と超越志向の間の関連について、以下のように推測してみる。

ホストに溶け込んでも、社会学者の表現によるところの、「紙の上では」韓国人である (宋,

2001) ことから、依然として自分の存在のありかたに違和感や異質性を抱くのは不可避である。そこで、集団カテゴリ自体から解放されたく、超越志向に注目したのではないと思われる。集団レベルの「日本人」「韓国人」はいずれもぴったり当てはまらないが、超越志向で自分たちを捉えれば、集団レベルの違いを問題にせず、誰にも公平、共通に当てはめることができる概念である。特に、同質性を大事にする日本社会（岡崎，1992）では、これなら、互いに同質な存在でいられる枠組みであろう。

二つ目は、ホスト志向はスイッチングと葛藤を媒介すると超越志向になりにくいことを示した。ホスト志向が高い場合はホストに一体化してしまっ、スイッチングをする必要が低くなり、その次の葛藤と超越志向は抑制されるだろう。

三つ目は、エスニック志向の高さがスイッチングをもたらし、スイッチングは葛藤に正の影響を及ぼし、そして最終的には、超越志向に至る流れが見出された。エスニック志向（＝エスニックの生活習慣）からスイッチングへ正のパスが認められたのは、生活習慣上は二文化を保持していることを意味する。なぜなら、ホストの生活習慣は、天井効果で外されたため、多くのものが持っていると考えられる。次に、仮定どおりにスイッチングが葛藤を引き起こし、葛藤は超越志向に影響していた。しかし、仮定とは異なり、エスニック志向やホスト志向が直接に葛藤に影響したのではなく、二文化と葛藤の間にスイッチングが機能しているのが見出された。エスニック志向からスイッチングへのパスについて、ホストの生活習慣に特異なエスニック生活習慣が加わると、ホストの方法だけを使って過ごせないため、使い分けの必要が生じるだろう。スイッチングは、単一文化主義な日本（李，2011）で生きていく上、母文化を諦めず、二文化とも共存させる方略かもしれない。しかし、エスニック志向を保持し、二重規範をもって、home と host を行き来するスイッチングを実施するという状況が、同質性を大事にする日本では（岡崎，1992）、これを肯定的に評価されない傾向があるだろう。返って、変わったもの、異質なものとして評価しがち（金，2011）で、スイッチングが葛藤をもたらすと推測される。つまり、在日コリアンでは、スイッチング実施は心理的に不安定な状態を導きやすいものとなることを示唆する。最終的に、このような葛藤解決の認知的方略として、カテゴリや所属の重要性を低めようとする場合に、超越志向に至る可能性があるのではないか。

四つ目は、エスニック志向は直接に超越志向に負の影響をしていることや、1 要因分散分析から「分離」群が最も超越志向の得点が低いことから、エスニックに執着すると超越志向になりにくいことが示された。エスニックにこだわることは、文化的な区分をより意識することであり、集団カテゴリの強調に通じる。集団カテゴリを脱する超越志向の方向へは行きにくいのだろう。結論的に、エスニック志向が高い人は、エスニックにとどまって超越志向に至らない場合と、ホストとのバランスを取ろうとスイッチングしてそれを機に最終的に超越志向に至る場合の二つの経路が考えられる。

#### 4.4. 文化変容の因子分析

本研究で用いた「文化変容」尺度の因子分析の過程で面白い結果があったため、それについての示唆を述べていく。本研究で用いた「文化変容」尺度の二因子間が独立であるのは、西洋の先行研究の報告と一致する (Ouarassa ら, 2005 ; Ward, 2008)。つまり、ホスト志向が高くても、それはエスニック志向が高いことも低いことも意味せず、ホスト志向が低い場合も同様である。二次元性が確認できたことから、ホストとの一員意識を保つことと、エスニックの生活習慣を保つことは、相反する概念ではなく、共存しうることが示唆されたともいえる。しかし、最終的な因子項目が決まる前の段階で、注目すべき結果があった。法や社会的属性に関わる「日本人との結婚」「日本国籍への帰化」の2項目は、これらの項目を外す前の段階の因子分析において、反対の符号で共に因子負荷量が高かった。すなわち互いに負の関連を持ち、ホスト志向にもエスニック志向にも深く関与しうることを示す。言い換えれば、「帰化」と「結婚」は、二者択一的で一元的な観点であり、ホスト志向とエスニック志向が共存できない概念といえる。ホスト寄りかエスニック寄りの選択を要する、つまりどちらかを諦めざるをえない項目であろう。おそらく、国籍や戸籍という社会的な制度をめぐる判断は、単一的な選択を求める受け入れ社会の特質を反映するものであろう。もう一つの解釈として、在日コリアンの意思の反映とみることもできよう。生活が日本にあるだけでなく、日本に違和感を持たなくなっている人は、社会的所属を日本化してもよいと感じているのであろう。一方で、生活は日本にあっても、エスニックの生活習慣を保っている人は、自分の社会的所属を日本化したくないのであって、これは日本社会への反動・反感の表現という可能性もあろう。

#### 4.5. 属性に関する考察

国籍 (韓国・日本) と年齢 (20代・30代・40代・50代・60代・70, 80代) による分析結果について、以下に示唆点を述べていく

##### 4.5.1 国籍

国籍は、エスニック志向・ホスト志向・スイッチングのような実生活の変数と関連がなく、唯一に self-identification と関連があった。これより、国籍は実際の生活に関わるものではなく、個人の意識と関係するもので、自分が韓国人であることを表わす象徴的なシンボルであることが示唆される。1世の場合は韓国から渡ってきたため、韓国の生活習慣を保っているが、その後の世代は日本で生まれ日本の教育を受けたため、母国の生活習慣の伝承は段々薄くなったり日本化されるという (宋, 2001)。そうすると、今の20代の若い年齢層には、エスニック習慣というのが、明確には伝わってきていない可能性がある。彼らにとっては、韓国国籍だけが自分たちの存在の元を示す根拠となりえよう。今回の結果より、在日コリアン研究では、国籍と生活ぶりを分離して考えるべきであることが明らかになった。

#### 4. 5.2. 年齢

年齢とエスニック志向、年齢とスイッチングについて、同様の結果が得られた。高年齢層が低年齢層より、エスニック志向であり、スイッチングをするという結果である。エスニック志向とスイッチングの間の正の相関関係は、一貫して研究2と研究3の質問紙調査から確認されている。高年齢層と高いエスニック志向及び高いスイッチングが関連する理由は、昔は日本社会における差別があった（福岡，1993；宋，2001）ことを考えると、自然に対人関係における行動パターンを切り替えるのは不思議ではないと思われる。

年齢と超越志向の関連について、超越志向の得点が低年齢層に高いことは、日本社会の多文化化により個人の捉えかたとして、多様な選択枝について、寛大になったことを示す証拠であろう。高年齢層は低年齢層よりエスニック志向に執着しているため、超越志向になりにくく、低年齢層が高年齢層に比べて、エスニック志向に執着してないため、超越志向になりやすいと思われる。

年齢とホスト志向が、両者間に有意差がないのは、高年齢層でも低年齢層でも、生活の基盤はホストである日本社会にあつて、日本人と混じって生活しているのがごく自然なことであるため、日本人との一体感を持つことや周りの日本人との調和的な関係は年齢と関係ないのであろう。そして、年齢と葛藤の間に有意差がないことについて、二文化集団の狭間に置かれて経験する心理的苦痛は、在日コリアンという集団カテゴリ自体が持つ二重性やあるいはどちらでもない社会的な位置づけ（福岡，1993）と関連するものであり、年齢の高低層とは関連がないのであろう。

### 第5節 まとめ

本研究の主な目的は、文化変容態度とメンタルヘルスの関連を検討すること、そして超越志向に関する因果モデルを検討することである。以下にこれらについて簡単にまとめる。

在日コリアンのメンタルヘルス（主観的幸福感・うつ傾向）と文化変容態度の関連について二要因分散分析を行った。その結果、エスニック志向（＝エスニックの生活習慣志向）の度合いとは関連がなく、ホスト志向（＝ホストのカテゴリ志向）の度合いとは関連があるのが示された。つまり、彼らの幸福もうつも、これらを決める鍵はホストカテゴリ所属への溶け込みと関連あることを示唆するもので、ホストカテゴリという外的なものへの認知が彼らの心理的健康に影響している。

在日コリアンにみられた二次元文化変容モデルでは説明できない現象である、「超越志向」について、そのプロセスをパス解析で実施した。その結果、ホスト志向は直接に超越志向に正の影響をし、エスニック志向は直接に負の影響をしていた。さらに、エスニック志向が高い場合に、スイッチングが高くなり、スイッチングは葛藤に影響し、葛藤は超越志向に影響していた。つまり、高ホスト志向であるほど超越志向になり、高エスニック志向になるほど超越志向になりにくいことを示す。超越志向になるためにもよいメンタルヘルスを保つため

にも、その一つの方法として高いホスト志向を持つことが重要であることが明らかになった。超越志向を持つと、メンタルヘルスがよい、という直接的な関連はないが、少なくともうつから逃れる一つの方法とはいえよう。

## 第5章 総括

本研究は、在日コリアンを対象に、彼らの「文化変容態度とメンタルヘルス」について述べてきた。研究全体から眺めて、研究の流れに即して知見をまとめ、示唆を整理してみたい。総括のための図を、序論の構成図と対応させた形で図 5-1 に示し、それぞれの章で得られた知見を簡潔に記した。

### 第1節 自由人、超越志向および関連要因

まず、研究の背景として、近年、在日コリアンで注目されている“日本人でもなく韓国人でもなく”，“個人”（金，1999）“コスモポリタン”（福岡，1997）など、二文化集団カテゴリが希薄のみでなく、脱却を意図する意味も含めて「自由人」という概念を組み込んだ。これは西洋の二次元文化変容態度と対応すると、その概念では説明できない現象として注目した。我々は、「自由人」概念を組み込んで、質的手法の半構造化面接により、在日コリアンの文化変容態度について探索してみた。面接調査に用いた尺度は、「二文化環境の関わり方」と「アイデンティティ」の選択である。「アイデンティティ」は、4つの選択枝である「韓国人，日本人，統合人，自由人」を提示し、「アイデンティティ」選択が類似しているインフォーマントごとにグループ化して、語りの内容を分析した。リサーチエスチョンは、「自由人」は何かについて概念化を行なうこと、そして、「アイデンティティ」の選択と語りの内容はいかに関わるかを検討することである。そして、これらの2つのリサーチエスチョンの結果から考えられる在日コリアンにおける文化変容態度はどういうものかを論じた。結果、リサーチエスチョンである「自由人」は何かについて、以下のような結果が得られた。自由人には2つの下位分類ができた。二文化カテゴリ希薄のみでなく、代替カテゴリを主張する人たちないしはその志向性を「積極派自由人」とし、ただ、二文化カテゴリ希薄のみである人ないしは志向性を「消極派自由人」とした。もう一つのリサーチエスチョンである「アイデンティティ」の選択と語りの内容の関わりについては以下のような結果が得られた。結果、アイデンティティの選択と語りの内容は必ずしも一致しなかった。例えば、「韓国人」アイデンティティを選んだ人に韓国文化保持の語りはそれほど見られず、返って、「自由人」アイデンティティを選んだ人に韓国式の家庭教育など韓国文化保持の語りが見られた。なお、「自由人」を選んだ人たちは、韓国文化保持のみでなく、日本人的な価値観など日本文化の語りも明確にあった。我々は、アイデンティティと選択と語りの不貫性から、以下のような2つの現象を日本という受け入れ社会の環境における在日コリアンの文化変容態度への示唆点として捉えた。一つ目は、「韓国人」選択者と「統合人」選択者に、対人行動における使い分けをする、いわば「スイッチング」現象に注目した。二つ目は、特定のアイデンティティ選択において二文化集団や二文化行動の間で心理的「葛藤」を経験するのではなく、これはアイデンティティの選択と関係なく見られる現象と解釈した。以上の「自由人」概念とアイデンティティ選択と

語りの不一致から、受け入れ社会の特徴を反映した在日コリアンにおける文化変容態度の示唆的特徴として、「自由人」、「葛藤」及び「スイッチング」に注目し、次の研究から実証していく。

上記の研究1の面接調査において「自由人」として概念化された現象は、研究2の質問紙調査では、「積極派自由人」を表わす項目を中心に、新たに「超越志向」と概念化された。「超越志向」の概念的定義は、「日本人、韓国人というカテゴリで自らを捉えず、これらに依る捉え方を否定し、他の捉え方をする傾向、ないしはそれを表現する生きかた」である。超越志向は、概念的には、自分たちを拘束する二文化集団から距離をおくことを意味する。しかし、研究3の質問紙調査におけるパス解析によると、実際は、ホストのカテゴリやホストとの一体感をもつ人たちが超越志向になるとの結果となった。つまり、二文化集団ともを否定するというより、ホストカテゴリとの一体化はエスニックカテゴリから離れることを示唆する。そして、エスニックカテゴリからの解放感が超越志向と関連してくるのではないかと思われる。超越志向の機能として、拘束的な集団カテゴリが取れる方便ではあるが、メンタルヘルスのよい方向にも悪い方向にも影響するものではなかった。

超越志向と関連要因として葛藤について、上記のパス解析により、超越志向に直接に正の影響をする変数であるのが明らかになった。研究2の質問紙調査により、葛藤と4類型文化変容との関連を検討した結果、4類型間には有意な違いがなかった。従って、在日コリアンが抱える“普遍的葛藤”として解釈した。そして、葛藤とメンタルヘルスについて、研究3の質問紙調査から、葛藤と「うつ傾向」の間に正の相関が、葛藤と「主観的幸福感」に負の相関が見出された。上記パス解析における葛藤と超越志向の正の関連性及び葛藤とうつの有意な正の相関から、葛藤の二重性が言及できる。つまり、葛藤は必ずしも悪いことではなく、葛藤そのままに止まっていると、うつになり非幸福になるが、葛藤をへて超越志向になると、うつになることは防げるといえよう。

スイッチングは直接に超越志向と関連ある変数ではなかったが、スイッチングが葛藤への正のパスが認められたことから、間接的な影響をしていた。スイッチングすると葛藤を引き起こすという、スイッチングが否定的に認識されることが面白い。スイッチングと心理的従属変数の否定的関連については、研究2の質問紙調査におけるスイッチングとうつの間に正の相関からも確認できる。なぜスイッチングすると否定的な結果になるかについて以下のように推測する。韓国文化が自分の中にあると、二文化を共存させたいという気持ちから、自然にスイッチングをするようになる可能性がある。福岡(1993)の聞き取り調査にも、在日コリアンの無意識的なスイッチング・メカニズムという考察が書かれている。だが、スイッチングしていくうちに煩わしさを感じたり、なぜ自分はスイッチングしないといけないか、という複雑な気持ちになりえよう。そこで、在日コリアンとしての自分の存在のありかたや社会的位置づけに悩みを抱き、それが葛藤なりうつなり否定的に影響するかもしれない。

以上の超越志向と関連要因から、超越志向に関する「川の流れモデル」を考えることがで



きよう。2世以降の在日コリアンは日本で生まれ日本の教育を受けたため、川の流れといえは日本文化や日本志向の流れであろう。従って、川の流れに、何も持たずに単純に、乗っていくと超越志向になるだろう。川の流れに、エスニック志向を持って乗っていくと、エスニックとホストの間を行き来しながら、しかし葛藤を経験し、結局は超越にいたるのである。

以上まで超越志向を中心にこれに関連する要因との関連及びメンタルヘルスとの関連を見てきた。次は、西洋における移民研究では定番の知見となっている文化変容態度とメンタルヘルスの関連を、在日コリアンで実施したときの知見と示唆点を記す。

## 第2節 文化変容態度とメンタルヘルス

心理学視点からの在日コリアンにおける二次元文化変容の尺度がないため、我々は先の面接調査と社会学の知見に基づいて、研究2の質問紙調査から尺度の用意をした。「エスニック志向」として認識された項目は“韓国の祝日を祝う”などエスニックの生活習慣に関する項目となっており、「ホスト志向」として認識された項目は“自分はほぼ日本人だと思う”などホストカテゴリとの一員意識に関する項目となっていた。メンタルヘルスの尺度は、普遍的に人間が感じる主観的幸福感やうつ傾向に関する概念であるため、既成の尺度を用いた。

研究3の質問紙調査において、二要因（高・低エスニック志向×高・低ホスト志向）分散分析によりメンタルヘルスとの関連を検討した結果、「ホスト志向」における主効果がで出され、「高ホスト志向」群が「低ホスト志向」群より、幸福感の度合いが高く、うつの度合いが低いことが示された。ただし、ここでいう「ホスト志向」は、上記で記しているように、ホストの外的な条件に一体化することを意味する。従って、日常生活におけるホストの文化とメンタルヘルスの関連を指すのではなく、ホストのカテゴリやホストの属性を志向することとメンタルヘルスが関連することを意味する。外的条件のホスト志向性とメンタルヘルスが関連するのは、日本という受け入れ社会の特徴を反映する結果といえよう。つまり、ホスト社会の要求ないしは多文化社会への方針やイデオロギによって、異文化滞在者の文化変容態度は変わってくるのであろう。ホストがホスト国への帰化などを求める社会だと、それを受け入れた上で、メンタルヘルスも保たれると思われる。同化主義的な特徴を持つ日本は（李，2011）、自国への帰化を要する社会的雰囲気があり、そこで、在日コリアンの中でも、日本国という属性的にそれに合致した人たちが、よいメンタルヘルスを得やすいのであろう。

西洋では文化変容態度とメンタルヘルスの関連について、様々な報告があるが、しかし、一般的に、エスニック志向とうつ及びself-esteemについて、エスニック志向が高いとうつの度合いが低くself-esteemが高い、との先行研究の報告が伝統的に多い(Wardら，1994；Gong，2007)。4類型文化変容態度で見たときには、「統合」群がもっともメンタルヘルスがよいとの報告が多い（Samら，1995；Berryら，2010）。少数ではああるが、assimilative contextではエスニックよりナショナルアイデンティティが心理的適応がよい（ $r=.12$ ）との報告もある（Ben-Shalomら，2004）。

以上の先行研究例と我々の調査結果より、受け入れ社会の環境次第でメンタルヘルスを決める要因が変わってくる可能性が考えられよう。つまり、受け入れ社会が多文化の環境ならば、エスニック志向とメンタルヘルスの間により関連が予想され、単一文化社会ではホスト志向とメンタルヘルスが関わると考えられるのであろう。

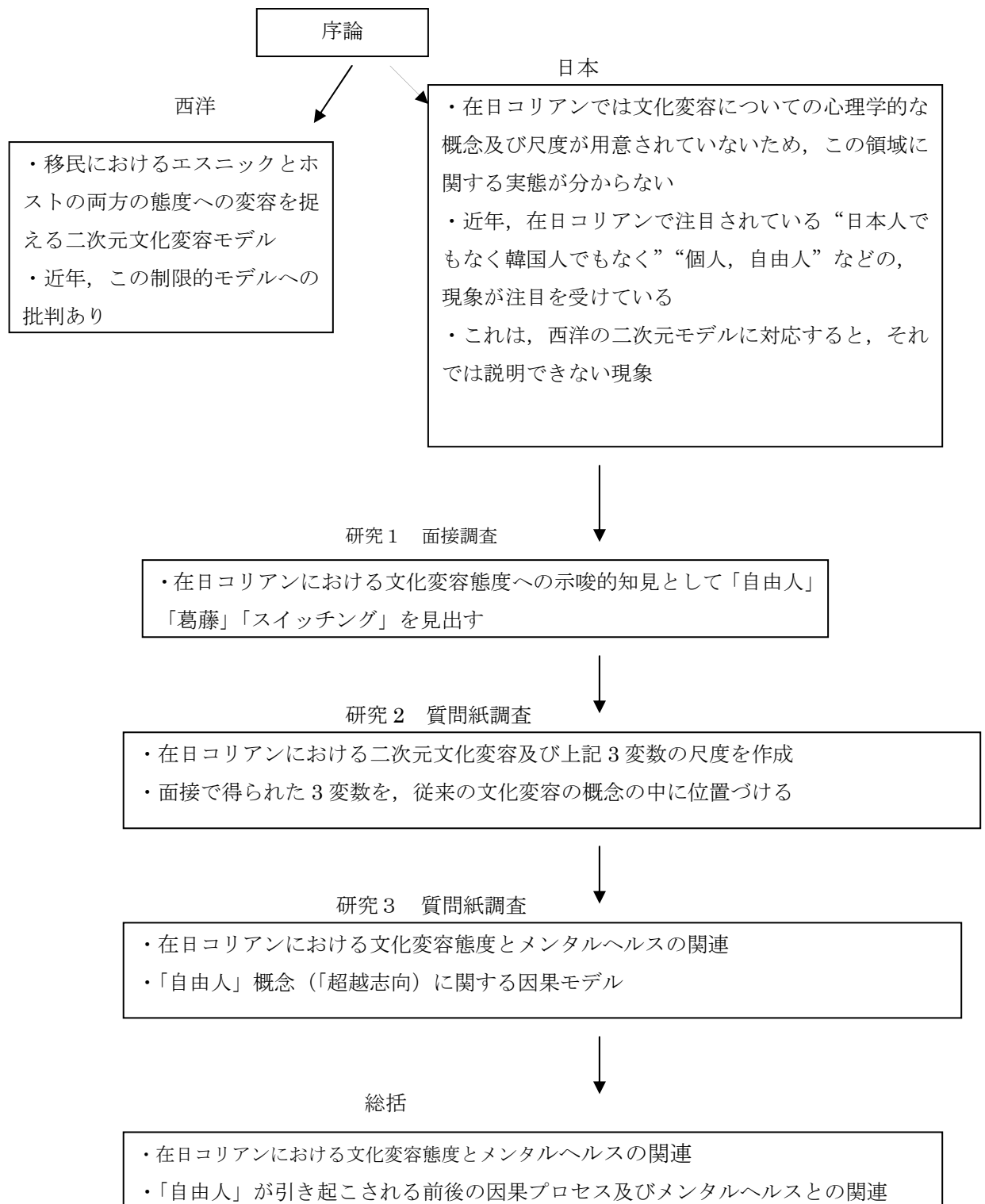


図 5-1 研究の総括図

### 第3節 本研究の限界と今後の課題

本研究における限界と課題を以下のように考えた。

まず、従来の二文化カテゴリ希薄と関連する「周辺化」と本研究の面接調査から見出された「消極派自由人」との関連について実証が求められる。研究1の面接調査において、周辺化の意味を含め、二文化カテゴリからの“脱却”の意味も含めて、「自由人」というカテゴリを設定した。結果、二文化カテゴリ希薄であり、そして脱却の語りも見られた人たちを「積極派自由人」、ただ二文化カテゴリ希薄のみである人を「消極派自由人」と命名した。研究2の質問紙調査において、4類型文化変容態度と「積極派自由人」、「消極派自由人」との仮説をたて、検証しようと試みた。因子分析の段階で、「積極派自由人」を示す項目を中心に、新たに「超越志向」と定義した。「消極派自由人」に関連する項目は負荷量が低くほぼ削除され、統計的には認識できず、「消極派自由人」と「周辺化」が関連するだろうと仮説を立てたが、検証できなかった。今回の結果からは、研究2と研究3の質問紙調査より、超越志向は「統合」及び「同化」と関連するのは明らかになった。従って、超越志向は周辺化とは別の概念であるのは明確になったが、面接段階で設定した「消極派自由人」と「周辺化」の関連について仮説は立てたが、実証はできなかった。西洋でも、周辺化の実態が明確でないとの報告が多いが(e.g., Berryら, 1989), 在日コリアンにも同様のことが言えよう。本研究における「消極派自由人」の実態は何かを究明することで、従来の「周辺化」との関連が浮き上がってくると思われる。概念的に、両方の文化やカテゴリとも弱い関わりしか持たない「消極派自由人」や「周辺化」は、統計的に認識できない現象である可能性があるため、今後、緻密な質的手法が要されるところであろう。

次に、本研究で新たに見出した「超越志向」は、日本という受け入れ社会の環境の中で見出された概念であるのが特徴で、以下のような三つの課題を提案する。一つ目に、超越志向は、日本や韓国という集団カテゴリから解放されたい気持ちから現われた志向性といえよう。しかし、代替カテゴリの標榜は自ら積極的に掲げたものなのか、それとも日本でもなく韓国でもなく他の選択しとして捉える志向性なのか。これらの区分が明確ではないため、質的手法を用いて、彼らの気持ちに深く関わってみる必要がある。二つ目に、超越志向を西洋の移民に測定した時に、どのような特徴が見出されるのか、その結果を在日コリアンと比べてみるのは興味深いであろう。三つ目に、在日コリアンでは、超越志向が現われてきた背景として、集団カテゴリからの自由を求めたい、というのが考えられるが、西洋において、超越志向が見出されるなら、それは何によるものなのか。例えば、西洋における「個人主義」とはどう関係するかなどを考えられよう。

超越志向に関する因果モデルから、「葛藤」の話題に関して以下のような課題を考える。まず、我々は、「エスニック志向→スイッチング→葛藤→超越志向」という因果プロセスを見出して、超越志向になるプロセスの中に葛藤が関与しているのが明らかになった。そして、も

う一つ、葛藤が関連すると推測される因果プロセスとして、ホスト志向から直接に超越志向への正のパスが認められた結果である。これについて、我々は、ホストである日本に同化しても、依然として、何かの違和感や不調和音を持って超越志向になるのではないかと考察した。後者の中に葛藤が潜んでいるなら、それを実証化し、前者の中にある葛藤と質の異なるものかどうかを検討するのは今後の課題である。

最後に、受け入れ社会については以下の二点が考えられる。第一に、受け入れ社会に関する探求が不足していることである。受け入れ社会の多様性を、一定の視点から分類したり、特定の変数で表現したりすることを試みながら、その変数が移民にいかに関与するかを探っていく必要がある。第二に、受け入れ側の社会文化的要因と、移動側の個人的要因は、どのように関連し合いながら精神的健康に影響していくのか。多要因を測定した量的研究と、事例を丁寧に追う質的研究をあわせた、統合研究が有効であろう。

## 引用文献

- 安達 理恵 (2008). 日本人の異文化受容態度に見られる傾向——地方都市での年代別・国別態度調査より—— 名古屋外国語大学外国語学部紀要, **35**, 153-173.
- Berry, J.W. (1970). Marginality, stress and ethnic identification in an acculturated aboriginal community. *Journal of cross-cultural psychology*, **1**, 239-252.
- Berry, J.W. (1980). Acculturation as varieties of adaptation. In A. Padilla (Ed.), *Acculturation: Theory, models and some new findings*. Boulder, CO: Westview Press. pp. 9-25.
- Berry, J.W. (1992). Acculturative stress and acculturation attitudes among Indian immigrants to the United States. *Psychology and developing societies*, **4**, 187-212.
- Berry, J.W., & Sam, D (1997). Acculturation and adaptation. In J.W. Berry, M.H. Segall & C. Kagitcibasi (Eds.), *Handbook of cross-cultural psychology*. Vol. 3. Allyn & Bacon. pp. 291-325.
- Berry, J.W. (2005). Acculturation :Living successfully in two cultures. *International Journal of Intercultural Relations*, **29**, 697-712.
- Berry, J.W. (2006). Mutual attitudes among immigrants and ethnocultural groups in Canada. *International Journal of Intercultural Relations*, **30**, 719-734.
- Berry, J.W., Kim, U., Power, S., Young, M., & Bujaki, M. (1989). Acculturation attitudes in plural societies. *Applied Psychology: An International Review*, **38**, 185-206.
- Berry, J.W., & Kim, U. (1988). Acculturation and mental health. In P. Dasen, J.W. Berry & N. Satorius (Eds.), *Health and cross-cultural psychology*. London: Sage. pp. 207-236.
- Berry, J.W., & Sabatier, C. (2010). Acculturation, discrimination, and adaptation among second generation immigrant youth in Montreal and Paris. *International Journal of Intercultural Relations*, **34**, 191-207.
- Ben-Shalom, U., & Horenczyk, G. (2004). Cultural identity and adaptation in an assimilative setting: Immigrant soldiers from the former Soviet Union in Israel. *International Journal of Intercultural Relations*, **28**, 461-479.
- Bhatia, S., & Ram, A. (2001). Rethinking “acculturation” in relation to diasporic cultures and postcolonial identities. *Human development*, **44**, 1-17.
- Benet-Martinez, V., & Haritatos, J. (2005). Bicultural Identity integration (BII): Components and Psychosocial Antecedents. *Journal of Personality*, **73**(4), 1015-1050.

- Berry, J. W., & Sabatier, C. (2010). Acculturation, discrimination, and adaptation among second generation immigrant youth in Montreal and Paris. *International Journal of Intercultural Relations*, **34**, 191-207.
- Bhatia, S., & Ram, A. (2001). Rethinking “acculturation” in relation to diasporic cultures and postcolonial identities. *Human development*, **44**, 1-17.
- Bhatia, S, & Ram, A. (2009). Theorizing identity in transnational and diaspora cultures : A critical approach to acculturation. *International Journal of Intercultural Relations*, **33**, 140-149.
- Bourhis, R. Y., & Dayan, J. (2004). Acculturation orientations towards Israeli Arabs and Jewish immigrants in Israel. *International Journal of Psychology*, **39(2)**, 118-131.
- Bourhis, R. Y., Moise, L. C., Perreault, S., & Senecal, S. (1997). Towards an Interactive acculturation Model: A social psychological approach. *International Journal of Psychology*, **32**, 369-386.
- Chirkov, C (2009). Summary of the criticism and of the potential ways to improve acculturation Psychology. *International Journal of Intercultural Relations*, **33**, 107-180.
- Constant, A., Gataullina, L., & Zimmermann, K.F. (2009). Ethnosizing immigrants. *Journal of Economic Behavior & Organization*, **69**, 274-287.
- Chirkov, V. (2009). Summary of the criticism and of the potential ways to improve acculturation psychology. *International Journal of Intercultural Relations*, **33**, 177-180.
- 古家 聡 (2010). 日本のコミュニケーション・スタイルのマクロ的再解釈——日本人集団主義説をもとに—— *Human Communication Studies*, **38**, 173-192.
- 福岡 安則・金 明秀 (1997). 在日韓国人青年の生活と意識 東京大学出版会
- 福岡 安則 (1993). 在日韓国・朝鮮人——若い世代のアイデンティティ—— 中央公論社
- Gilroy, P. (1997). Diaspora and detours of identity . In K. Woodward (Ed.), *Identity and difference* (pp. 243-299). London: Sage.
- Gong, L. (2007). Ethnic identity and identification with the majority group: Relations with national identity and self-esteem. *International Journal of Intercultural Relations*, **31**, 503-523.
- Graves, T.D. (1967). Psychological acculturation in a tri-ethnic community. *Southwestern Journal of Anthropology*, **23**, 337-350.

- Hall, S. (1990). Cultural identity and diaspora. In J. Rutherford (Ed.), *Identity: Community, culture, difference* (pp. 227-237). London: UK: Lawrence and Wishart.
- 原尻 英樹 (1989). 在日朝鮮人の生活世界 弘文堂
- Hermans, J. M., & Kempen, H. J. G. (1998). Moving cultures: The perilous problems of cultural dichotomies in a globalizing society. *American Psychologist*, **53**, 1111-1120.
- Haritatos, J., & Benet-Martinez, V. (2002). Bicultural identities: The interface of cultural, personality, and socio-cognitive processes. *Journal of research in personality*, **36**, 598-606.
- Haritatos, J., & Benet-Martinez, V. (2002). Bicultural identities: The interface of cultural, personality, and socio-cognitive processes. *Journal of research in personality*, **36**, 598-606.
- 一二三 明子 (2006). 異文化接触と親の教育方針がエスニック・アイデンティティ及び自尊心に与える影響——日本人学生と中国人留学生の場合—— 文芸言語研究, **49**, 61-81.
- 日比野ゆかり・村瀬聡美・金子一史・本城秀次(2005). 大学生における自己呈示・自己不一致・自尊感情の関連 日本パーソナリティ心理学会大会発表論文集, **14**, 113-114.
- Hofstede, G. (1991). *Cultures and organization: software of the mind*. London: McGraw-Hill.
- Hong, Y. Y., Morris, M., Chiu, C. Y., & Benet-Martinez, V. (2000). Multicultural minds: A dynamic constructivist approach to culture and cognition. *American Psychologist*, **55**, 709-720.
- Hong, Y. Y., Ip, G, Chiu, C. Y., Morris, M., & Menon, T. (2001). Cultural identity and dynamic construction of the self: Collective duties and individual rights in Chinese and American cultures. *Social Cognition*, **19**, 251-268.
- Hermans, J. M., & Kempen, H. J. G. (1998). Moving cultures: The perilous problems of cultural dichotomies in a globalizing society. *American Psychologist*, **53**, 1111-1120.
- ホフステード, G. 岩井紀子・岩井八郎 (訳) (1995). 多文化世界 有斐閣
- 法務省 (2010). 外国人登録者数 <<http://www.moj.go.jp/content/000081957.pdf>>
- 法務省 (2010). 出入国を巡る近年の状況 <<http://www.moj.go.jp/content/000081958.pdf>>
- 林 一圭 (2001). 在日韓国人の生活と意識に関する研究——岡山県内在住の在日韓国人を中心として—— 岡山大学大学院文化科学研究科博士学位論文
- Jang, Y., Kim, G., Chiriboga, D., & King-Kallimanis, B. (2007). A bidimensional model of acculturation for Korean American older adults. *Journal of Aging Studies*, **21**, 267-275.



- 川瀬 洋子・相良 順子 (2009). 在日韓国人の母親における異文化ストレスと関連要因の検討——ニューカマー(new comer)の場合—— **11**, 19-26.
- Khrishnan, A., & Berry, J.W. (1992). Acculturative stress and acculturation attitudes among Indian immigrants to the United States. *Psychology and Developing Societies*, **4**, 187-212.
- 金 明秀 (1997). 在日韓国人の社会成層と社会意識全国調査報告書 在日韓国青年商工人連合会
- 金 富燦, 尹 龍澤(訳) (2005). 在日韓国人の法的地位——地方参政権を中心に—— 創価法学, **34**, 93-121.
- 金 侖貞(2011). 地域社会における多文化共生の生成と展開, そして, 課題 自治研究, **392**, 59-82.
- 木村 有信 (2009). 「異文化適応」論の中の日本人特殊論について 立命館国際研究, **22-2**, 415-436.
- 金 泰泳 (1999). アイデンティティ・ポリティクスを超えて——在日朝鮮人のエスニシティ—— 世界思想社
- 貴志 俊彦 (2006). 東アジアにおけるトランスナショナル・コミュニティの歴史と現状 北東アジア研究, **10**, 1-9.
- 近藤 裕 (1981). カルチュア・ショックの心理——異文化とつきあうために—— 創元社
- 黒坂 愛衣・福岡 安則 (2008). 越境する「在日の苦難」——日本名でアメリカ国籍になった在日コリアンからの聞き取り—— 日本アジア研究, **5**, 107-130.
- 栗坂 克匡 (1995). 自己呈示 名古屋大学教育学部紀要 教育心理学科, **42**, 107-114.
- 李・田中 (2010). 在日コリアン二世・三世の二文化環境への態度とメンタルヘルス (1) ——文化的アイデンティティの自己認識に関する面接調査—— 岡山大学大学院社会文化科学研究紀要, **30**, 177-196.
- 李 原翔・佐野 秀樹 (2010). 中国帰国者三世の文化的アイデンティティの形成について 東京学芸大学紀要 I, **61**, 185-193.
- 李 明哲 (2011). 民族マイノリティのジレンマ: 在日コリアンの民族的アイデンティティの行方 海港都市研究, **6**, 19-30.
- マツモト, D. 南 雅彦・佐藤 公代 (訳) (2001). 文化と心理学——比較文化心理学入門—— 北大路書房
- 光長 功人・田淵 五十生 (2002). ブラジル人の子供たちは, どのようにアイデンティティを変容させるのか? 奈良教育大学紀要 (人文・社会科学), **51**(1), 1-17.

- 光永 功人・田淵 五十生(2002). ブラジル人の子供たちは、どのようにアイデンティティを  
変容させるのか?——帰国後の再適応を観察して—— 奈良教育大学紀要 人文社会科学,  
**51**, 1-17.
- 森 真弓 (2002). 「同化」ではなく「共生」を——在日コリアン・アイヌ民族・沖縄の  
女たちから学ぶ—— 北星学園大学経済学部北星論集, **42**, 57-72.
- Morris, M., Chiu, C. Y., & Benet-Martinez, V. (2000). Multicultural minds: A dynamic  
constructivist approach to culture and cognition. *American Psychologist*, **55**,  
709-720.
- 中根 千枝 (1972). 適応の条件——日本的連続の思考—— 講談社現代新書
- Nesdale, D., & Mak, A.S. (2003). Ethnic identification, self-esteem and immigrant  
psychological health. *International Journal of Intercultural Relations*, **27**, 23-40.
- Nenon, T. J. (2008). Some differences between Kant's and Husserl's conceptions of  
transcendental philosophy, *Continental Philosophy Review*, **41**, 427-439.
- Nesdale, D., & Mak, A.S. (2003). Ethnic identification, self-esteem and immigrant  
psychological health. *International Journal of Intercultural Relations*, **27**, 23-40.
- 岡崎 正道 (1992). 留学生教育の背景にある日本文化と特質と日本社会の閉鎖性 *Artes  
Liberales*, **51**, 11-26.
- 大西 晶子 (2001). 異文化感接触に関する心理的研究についてのレビュー 東京大学大学  
院教育学研究科紀要, **41**, 301-310.
- Ouarasse, O.A, & van de Vijver, F.J.R. (2005). The role of demographic variables and  
acculturation attitudes in predicting sociocultural and psychological adaptation  
in Moroccans in the Netherlands. *International Journal of Intercultural Relations*,  
**29**, 251-272.
- Phinney, J. (1992). The multigroup ethnic identity measure: A new style scale for use  
with diverse groups. *Journal of adolescent Research*, **7**, 156-176.
- Qian, W. (2010). On Lo Kuang's view about Confucian transcendence problem,  
*Universitas-Monthly Review of Philosophy and culture*, **37**, 173-182.
- Sam, D.L., & Berry, J.W. (1995). Acculturative stress among young immigrants in Norway.  
*Scandinavian Journal of Psychology*, **36**, 10-24.
- 宋 基燦(2001) 在日韓国・朝鮮人の「若い世代」の台頭と民族教育の新しい展開 京都社  
会学年報, **9**, 237-253.
- 竹田 美知 (2005). 国際結婚から生まれた子供の国籍選択とその影響要因——国際結婚を  
考える会の場合—— 日本家政学会誌, **56** (1), 3-13.
- 竹尾 和子・矢吹 理恵 (2006). 在日外国人の名乗り行動における関連要因の検討——エ  
スニック・アイデンティティ研究の視点—— 発達研究, **20**, 67-80.

- 田中 共子 (1991). 在日留学生の文化的適応とソーシャル・スキル 異文化間教育, **5**, 98-110.
- 田中 共子(2003). 異文化共生における心理学視点から示唆 文化共生学研究 (岡山大学大学院文化科学研究科), **1**, 63-72.
- 谷 富夫 (1995b). 在日韓国・朝鮮人社会の現在——地域社会に焦点をあてて—— 駒井洋(編) 定住化する外国人 明石書店 pp.133-161.
- 谷 富夫 (2002). 民族関係における結合と分離 ミネルヴァ書房
- Ting-Toomey, S. (1988). International conflict styles: a face-negotiation theory. In Y. Kim & W. Gudykunst (Eds.), *Theories in international communication*. Newbury Park, CA: Sage.
- Ting-Toomey, S., Yee-Jung, K. K., Shapiro, R. B., Garcia, W., Wright, T. J., & Oetzel, J. G. (2000). Ethnic/cultural identity salience and conflict styles in four US ethnic groups. *International Journal of Intercultural Relations*, **24**, 47-81.
- 辻本 久夫・李 鍾順・殷 宅基・岡本 洋之・金 泰泳・金 孝・近藤 とみお・洪 浩秀・森木 和美 (1994). 親と子が見た在日韓国・朝鮮人白書：在日韓国・朝鮮人と日本人の三つの意識調査 明石書店
- 植松 晃子 (2010). 異文化環境における民族アイデンティティの役割——集団アイデンティティと自我アイデンティティの関係—— パーソナリティ研究, **19**, 25-37.
- Viruell-Fuentes, E. A. (2007). Beyond acculturation: Immigration, discrimination, and health research among Mexicans in the United States. *Social Science & Medicine*, **65**, 1524-1535.
- Ward, C., & Kennedy, A. (1994). Acculturation strategies, psychological adjustment, and socio-cultural competence during cross-cultural transitions. *International Journal of Intercultural Relations*, **18**, 329-343.
- Ward, C. & Rana-Deuba, A. (1999). Acculturation and adaptation revisited. *Journal of Cross-Cultural Psychology*, **30**, 422-442.
- Ward, C. (2006). Acculturation, identity and adaptation in dual heritage adolescents. *International Journal of Intercultural Relations*, **30**, 243-259.
- Ward, C. (2008). Thinking outside the Berry boxes: New perspective on identity, acculturation and intercultural relations. *International Journal of Intercultural Relations*, **32**, 105-114.
- Wiley, S., Perkins, K., & Deaux, K. (2008). Through the looking glass: Ethnic and generational patterns of immigrant identity. *International Journal of Intercultural Relations*, **32**, 385-398.

- 山中 速人 (1982). 朝鮮「同化政策」と社会学的同化・上——民族・マイノリティー政策の社会学的分析枠組み—— 関西学院大学社会学部紀要, **45**, 285-295.
- Yep, G. (1998). My three cultures: Navigating the multicultural identity landscape. In J. N. Martin, T. K. Nakayama, L. A. Flores (Eds.), *Readings in cultural contexts* (pp. 70-79). Mountain view, CA: Mayfield publishing Company. pp.
- 山崎 瑞紀・平 直樹・中村 俊哉・横山 剛 (1997). アジア系留学生の対日態度及び異文化態度形成におけるエスニシティに役割 教育心理学研究, **45**, 119-128.
- 在日本大韓民国青年会 (2009). Annyong Interview あんにょん, Vol. **36**, 2-7.
- 在日本大韓民国青年会 (2010). Annyong Interview あんにょん, Vol. **38**, 10-16.
- 在日本大韓民国青年会 (2010). 講演録 あんにょん, Vol. **39**, 37.

附表

## 研究Ⅱの質問紙

在日韓国・朝鮮人の意識調査への  
ご協力をお願い

ご挨拶

1. この度は調査へのご協力ありがとうございます。
2. このアンケートは、皆様が日本で暮らすときに、どのような考えかたや暮らし方をなさっているのかをお尋ねし、健やかな暮らし方を考えようとするものです。
2. 正しい答え・間違った答えはありませんので、深く考えず思ったままにお答えください。よく似ている質問項目がいくつか含まれていますが、なるべく全部の質問にお答えください。
3. ご記入いただいた回答は、コンピューターで統計的に処理いたしますので、貴方様にご迷惑をかけるようなことは一切ございません。
4. プライバシーを傷つけるようなことは決してないことをお約束いたします。
5. この調査について、ご不明な点及びお問い合わせは下記のところまでお願い申し上げます。

2010年8月8日

岡山大学社会文化研究科 博士課程 2年

李 正姫

電話：\*\*\*\*\*

携帯メール：\*\*\*@\*\*\*\*

以下のことは、今のあなたにどれくらい当てはまりますか それぞれの項目ごとに、右にあげた4つの数字 1・全くそうではない 2・あまりそうではない3・ややそうである4・とてもそうである のうちから、最も近いものを「 <u>一つだけ</u> 」選んで、例にあるように「 <u>○で囲んで</u> 」ください。		全 く そ う で は な い	あ ま り そ う で は な い	や や そ う で あ る	と て も そ う で あ る
例)	温泉が好きだ	1	2	3	4
I. 1)	韓国の祝日や記念日を祝っている	1	2	3	4
2)	家では、日本の一般の家庭と同じように和食も洋食も中華も食べる	1	2	3	4
3)	家では、韓国の食べ物がよく食卓にのぼる	1	2	3	4
4)	日本の生活習慣になじんで暮らしている	1	2	3	4
5)	同胞が同胞と結婚するのは、望ましいと思う	1	2	3	4
6)	テレビや同胞からの情報などで、母国の政治や社会のことをよく知っている	1	2	3	4
7)	同胞と付き合い時、ありのままの自分でいられる	1	2	3	4
8)	日本に住んでいるので、日本に帰化してもかまわないと思う	1	2	3	4
9)	韓国風的生活習慣を守って暮らしている	1	2	3	4
10)	日本人との集まりに、積極的に参加している	1	2	3	4
11)	一人で外食する時は、韓国食を食べたい	1	2	3	4
12)	読み書きも含めて日本語を不自由なく使える	1	2	3	4
13)	自分はやっぱり韓国人だと感じる	1	2	3	4
14)	日本の祝日や記念日を祝っている	1	2	3	4
15)	同胞の親友がいる	1	2	3	4
16)	日本人と付き合い時、ありのままの自分でいられる	1	2	3	4
17)	韓国語で不自由なく会話ができる	1	2	3	4
18)	韓国の国籍を守り続けるのは、いいことだと思う	1	2	3	4
19)	周囲の人に、自分は在日韓国人だと伝えている	1	2	3	4
20)	日本人の親友がいる	1	2	3	4
21)	一人で外食をする時は、韓国食以外の様々な食事がしたい	1	2	3	4

		全く そう では ない	あ ま り そ う で は な い	や や そ う で あ る	と と も そ う で あ る
	22) 自分は日本人とほとんど変わらないと感じる	1	2	3	4
	23) 同胞との集まりに、積極的に参加している	1	2	3	4
	24) 同胞が日本人と結婚するのは、望ましいと思う	1	2	3	4
	25) 日本の新聞や雑誌を通じて、日本の政治や社会のことをよく知っている	1	2	3	4
	26) 周りから見れば、私は日本人と区別がつかないと思う	1	2	3	4
Ⅱ.	1) 日本人とは日本食,同胞とは韓国食を食べる	1	2	3	4
	2) 家では韓国語,家の外では日本語を使う	1	2	3	4
	3) 同胞と付き合う時は,日本人と付き合う時よりも,ストレートな感情表現をする	1	2	3	4
	4) 日本人と話す時は,同胞と話す時よりも,はっきりしない言い方をする	1	2	3	4
	5) 日本人と接するときは,同胞と接するときよりも,遠慮や謙遜をする	1	2	3	4
	6) 日本人といるときは,同胞といるときよりも,周りに合わせて行動する	1	2	3	4
	7) 日本人といる時は,調和を保つため「まあいいか」と考えて,自分の行動を抑える	1	2	3	4
	8) 本名(韓国名)と通名(日本名)を,場合によって使い分けている	1	2	3	4
	9) 同胞が相手の時は,韓国の儒教的な考え方を大事にして接する	1	2	3	4
	10) 同胞と一緒にの時のほうが,男らしさや女らしさを期待して接する	1	2	3	4
	11) 日本人よりも同胞と付き合う時のほうが,礼儀に気をつける	1	2	3	4
Ⅲ.	1) 最近,気分が落ち込んでいる	1	2	3	4



		全く そう では ない	あ ま り そ う で は な い	や や そ う で あ る	と と も そ う で あ る
	2) 今, 幸せな気分だ	1	2	3	4
IV.	1) 日本人か韓国人になるのではなく, 世界に対応する国際人になりたい	1	2	3	4
	2) 留学や就職などで, 日本でも韓国でもない他の外国に住むことを考えている	1	2	3	4
	3) 韓国にも日本にも, 別に愛国心を感じることはない	1	2	3	4
	4) 日本や韓国の価値観を越えて, 地球上で広く通用するグローバルな価値を求めたい	1	2	3	4
	5) 在日韓国人としての私ではなく, 単なる一個人として私をみてほしい	1	2	3	4
	6) 日本にも韓国にも, 落ち着くところがないと感じる	1	2	3	4
	7) 結婚相手は, 日本人でも韓国人でもない, 他の外国人でもよい	1	2	3	4
	8) 韓国人らしさや日本人らしさよりも, 自分らしさを最も大事にしている	1	2	3	4
	9) 日本風のやり方と韓国風のやり方の間で迷う	1	2	3	4
	10) 通名とか本名とかこだわらずに, どちらでも使えばよいと思う	1	2	3	4
	11) 自分は日本人でも韓国人でもなく, 地球人だと思っている	1	2	3	4
	12) 日本人として生きていくべきか, 韓国人として生きていくべきか, 分からない	1	2	3	4
	13) 日本人あるいは韓国人としてよりも, 人間としての生き方を大事にしている	1	2	3	4
	14) 日本文化も韓国文化も, 特に意識せずに暮らしている	1	2	3	4
	15) 自分は韓国人だと思う	1	2	3	4
	16) 自分は日本人だと思う	1	2	3	4

V. あなたご自身についてお尋ねします。①②・・・やab・・・の中から,当てはまるものに○をつけ,( )内には数字を書き込んでください。

・国籍	①韓国 ②日本 ③その他,	
・性別	①男 ②女	
・世代	①1世 ②2世 ③3世 ④4世 ⑤5世いこう	
・年齢	( )歳	
・結婚	①していない ②している→相手の国籍:a.韓国 b.日本 c.その他	
・民族学校に通ったことがありますか	①ない②ある→ a.小学校 b.中学校 c.高校	
・最後に卒業した学校	①学校には行かなかった ②学校を卒業した→学校は a.小学校(国民学校) b.中学校 c.高校 d.専門学校 e.高専 f.短大 g.大学 h.大学院	
・国籍	①韓国 ②日本 ③その他	
・性別	①男 ②女	
・世代	①1世 ②2世 ③3世 ④4世 ⑤5世以降	
・年齢	( )歳	
・結婚	①していない ②している→相手は a.韓国人 b.日本人 c.その他の国の人	
・民族学校にいったことがありますか	①ない ②ある→学校は a.小学校 b.中学校 c.高校	
감사합니다...ありがとうございました		

研究Ⅲの質問紙

<p>《調査ご協力へのお願い》</p> <p>これは在日韓国・朝鮮人の生活と意識調査です。 無記名で統計処理を行いますので、ご迷惑をかけることは一切ないことを約束いたします。どうぞご協力をお願いいたします。</p> <p>岡山大学大学院社会文化科学研究科 博士課程 李 正姫</p>			
<p>あなたご自信についてお尋ねいたします。①②・・・の中から当てはまる番号に「○をつけ」、( )内には数字を書き込んでください。</p>			
<p>・ 性別 ①男 ②女</p>			
<p>・ 世代 ①1世 ②2世 ③3世 ④4世 ⑤5世以降</p>			
<p>・ 年齢 ( )歳</p>			
<p>・ 結婚 ①していない ②している</p>			
<p>・ <u>最後に卒業した学校</u> ①小学校(国民学校) ②中学校 ③高校 ④専門学校 ⑤高専 ⑥短大 ⑦大学 ⑧大学院</p>			
<p>以下のことはあなたの場合、どれに当てはまりますか。「一つだけ」選んで「○で囲んで」ください。</p>		<p>日 韓 両方と どちらでも 本 国 方と同じぐ           ら           い</p>	
I	1) どちらの生活様式になじんでいると思いますか	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	
	2) どちらの言葉が最もうまく使えますか	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	
	3) 自分は何人だと思いますか	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	
	4) どちらの社会に愛着を感じますか	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	
	5) どちらの国籍ですか	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	
	6) 親しい人には、主にどちらの名前を使いますか	1 ・ 2 ・ 3 ・ 4	

以下のことは、今のあなたにどれくらい当てはまりますか それぞれの項目ごとに、右にあげた4つの数字 1・全くそうではない2・あまりそうではない3・ややそうである4・とてもそうであるのうちから、最も近いものを「 <u>一つだけ</u> 」選んで、例にあるように「 <u>○で囲んで</u> 」ください。		全 く そ う で は な い	あ ま り そ う で は な い	や や そ う で あ る	と て も そ う で あ る
例)	温泉が好きだ	1	2	3	4
I. 1)	韓国の祝日や記念日を祝って	1	2	3	4
2)	家では、日本の一般の家庭と同じように和食も洋食も中華も食べる	1	2	3	4
3)	家では、韓国の食べ物がよく食卓にのぼる	1	2	3	4
4)	日本の生活習慣になじんで暮らしている	1	2	3	4
5)	同胞が同胞と結婚するのは、望ましいと思う	1	2	3	4
6)	テレビや同胞からの情報などで、母国の政治や社会のことをよく知っている	1	2	3	4
7)	同胞と付き合う時、ありのままの自分でいられる	1	2	3	4
8)	日本に住んでいるので、日本に帰化してもかまわないと思う	1	2	3	4
9)	韓国風の生活習慣を守って暮らしている	1	2	3	4
10)	日本人との集まりに、積極的に参加している	1	2	3	4
11)	一人で外食する時は、韓国食を食べたい	1	2	3	4
12)	読み書きも含めて日本語を不自由なく使える	1	2	3	4
13)	自分はやっぱり韓国人だと感じる	1	2	3	4
14)	日本の祝日や記念日を祝っている	1	2	3	4
15)	同胞の親友がいる	1	2	3	4
16)	日本人と付き合う時、ありのままの自分でいられる	1	2	3	4
17)	韓国語で不自由なく会話ができる	1	2	3	4
18)	韓国の国籍を守り続けるのは、いいことだと思う	1	2	3	4
19)	周囲の人に、自分は在日韓国人だと伝えている	1	2	3	4
20)	日本人の親友がいる	1	2	3	4
21)	一人で外食をする時は、韓国食以外の様々な食事がしたい	1	2	3	4

		全くそうではない	あまりそうではない	ややそうである	とてもそうである
	22) 自分は日本人とほとんど変わらないと感じる	1	2	3	4
	23) 同胞との集まりに、積極的に参加している	1	2	3	4
	24) 同胞が日本人と結婚するのは、望ましいと思う	1	2	3	4
	25) 日本の新聞や雑誌を通じて、日本の政治や社会のことをよく知っている	1	2	3	4
	26) 周りから見れば、私は日本人と区別がつかないと思う	1	2	3	4
II.	1) 日本人とは日本食,同胞とは韓国食を食べる	1	2	3	4
	2) 家では韓国語,家の外では日本語を使う	1	2	3	4
	3) 同胞と付き合う時は,日本人と付き合う時よりも,ストレートな感情表現をする	1	2	3	4
	4) 日本人と話す時は,同胞と話す時よりも,はっきりしない言い方をする	1	2	3	4
	5) 日本人と接するとき,同胞と接するときよりも,遠慮や謙遜をする	1	2	3	4
	6) 日本人といるときは,同胞といるときよりも,周りに合わせて行動する	1	2	3	4
	7) 日本人といるときは,調和を保つため「まあいいか」と考えて,自分の行動を抑える	1	2	3	4
	8) 本名(韓国名)と通名(日本名)を,場合によって使い分けている	1	2	3	4
	9) 同胞が相手の時は,韓国の儒教的な考え方を大事にして接する	1	2	3	4
	10) 同胞と一緒にいる時の方が,男らしさや女らしさを期待して接する	1	2	3	4
	11) 日本人よりも同胞と付き合う時の方が, 礼儀に気をつける	1	2	3	4
III.	1) 最近, 気分が落ち込んでいる	1	2	3	4
	2) 今, 幸せな気分だ	1	2	3	4
IV.	1) 日本人か韓国人になるのではなく, 世界に対応する国際人になりたい	1	2	3	4

		全く そう では ない	あ ま り そ う で は な い	や や そ う で あ る	と て も そ う で あ る
2)	留学や就職などで、日本でも韓国でもない他の外国に住むことを考えている	1	2	3	4
3)	韓国にも日本にも、別に愛国心を感じることはない	1	2	3	4
4)	日本や韓国の価値観を越えて、地球上で広く通用するグローバルな価値を求めたい	1	2	3	4
5)	在日韓国人としての私ではなく、単なる一個人として私をみてほしい	1	2	3	4
6)	日本にも韓国にも、落ち着くところがないと感じる	1	2	3	4
7)	結婚相手は、日本人でも韓国人でもない、他の外国人でもよい	1	2	3	4
8)	韓国人らしさや日本人らしさよりも、自分らしさを最も大事にしている	1	2	3	4
9)	日本風のやり方と韓国風のやり方の間で迷う	1	2	3	4
10)	通名とか本名とかこだわらずに、どちらでも使えばよいと思う	1	2	3	4
11)	自分は日本人でも韓国人でもなく、地球人だと思っている	1	2	3	4
12)	日本人として生きていくべきか、韓国人として生きていくべきか、分からない	1	2	3	4
13)	日本人あるいは韓国人としてよりも、人間としての生き方を大事にしている	1	2	3	4
14)	日本文化も韓国文化も、特に意識せずに暮らしている	1	2	3	4
15)	自分は韓国人だと思う	1	2	3	4
16)	自分は日本人だと思う	1	2	3	4

V. あなたご自身についてお尋ねします。①②・・・やab・・・の中から、当てはまるものに○をつけ、( )内には数字を書き込んでください。

・ 国籍	①韓国 ②日本 ③その他,	
・ 性別	①男 ②女	
・ 世代	①1世 ②2世 ③3世 ④4世 ⑤5世いこう	
・ 年齢	( )歳	
・ 結婚	①していない ②している→相手の国籍:a.韓国 b.日本 c.その他	
・ 民族学校に通ったことがありますか	①ない②ある→ a.小学校 b.中学校 c.高校	
・ 最後に卒業した学校	①学校には行かなかった ②学校を卒業した→学校は a.小学校(国民学校) b.中学校 c.高校 d.専門学校 e.高専 f.短大 g.大学 h.大学院	
・ 国籍	①韓国 ②日本 ③その他	
・ 性別	①男 ②女	
・ 世代	①1世 ②2世 ③3世 ④4世 ⑤5世以降	
・ 年齢	( )歳	
・ 結婚	①していない ②している→相手は a.韓国人 b.日本人 c.その他の国の人	
・ 民族学校にいったことがありますか	①ない ②ある→学校は a.小学校 b.中学校 c.高校	
감사합니다...ありがとうございました		